

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第146集

坂戸市

かな い
金井遺跡 B 区

住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地地区画整理事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

—IX—

(第2分冊)

1994

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

序	
例 言	
凡 例	
【第1分冊】	
I 発掘調査の概要	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書刊行事業の組織	2
3 発掘調査・報告書作成の経過	3
4 調査と整理の方法	4
II 立地と環境	7
1 立 地	7
2 歴史的環境	9
3 入西遺跡群の概観	14
III 遺跡の概観	18
IV 古代の遺構と遺物	23
1 住居跡	23
2 掘立柱建物跡	91
V 中世の遺構と遺物	112
1 第1区の遺構と遺物	115
(1) 鑄造跡	117
(2) 掘立柱建物跡	136
(3) 溝 跡	145
(4) 井戸跡	147
(5) 土 壙	162
(6) 火葬墓	172
2 第2区の遺構と遺物	174
(1) 鑄造跡	176
(2) 鑄造関連遺構	191
(3) 掘立柱建物跡	196
(4) 溝 跡	205
(5) 井戸跡	226
(6) 土 壙	233
(7) 火葬墓	256

【第2分冊】

3 第3区の遺構と遺物	258
(1) 鑄造跡	260
(2) 掘立柱建物跡	434
(3) 溝跡	441
(4) 井戸跡	452
(5) 土壙	455
4 第4区の遺構と遺物	457
(1) 鑄造跡	457
(2) 溝跡	470
(3) 土壙	472
5 第5区の遺構と遺物	475
(1) 溝跡	475
(2) 土壙	478
6 第6区の遺構と遺物	482
(1) 溝跡	482
(2) 土壙	482
7 第7区の遺構と遺物	486
(1) 溝跡	486
(2) 井戸跡	489
(3) 土壙	489
(4) 火葬墓	491
8 第8区の遺構と遺物	492
(1) 土壙	492
VI その他の遺構と遺物	494
VII 参考資料	499

【第3分冊】

VIII 調査のまとめ	503
1 鑄造遺構と遺物	503
(1) 鑄造遺構について	503
(2) 鑄造遺物について	512
2 金井遺跡の鑄物師	581
3 中世の土器と遺構	596
4 古代の土器と遺構	611
附編	627

【写真図版】

挿 図 目 次

(第1分冊)

第1図	未調査区の範囲	5	第49図	第13号住居跡カマド	58
第2図	グリッド配置図	6	第50図	第13号住居跡貯蔵穴	59
第3図	地形断面模式図	7	第51図	第13号住居跡出土遺物(1)	60
第4図	金井遺跡B区地形図	8	第52図	第13号住居跡出土遺物(2)	61
第5図	埼玉県の地形図	9	第53図	第14号住居跡・カマド	62
第6図	金井遺跡A・B区と足洗遺跡	10	第54図	第14号住居跡出土遺物	63
第7図	金井遺跡B区と入西遺跡群	11・12	第55図	第15号住居跡・カマド	63
第8図	周辺遺跡の分布図	11・12	第56図	第16号住居跡出土遺物	64
第9図	金井遺跡B区全体図	21・22	第57図	第16号住居跡・カマド・貯蔵穴	65
第10図	古代の遺構全体図	23	第58図	第17号住居跡出土遺物	66
第11図	第1・2号住居跡	25	第59図	第17号住居跡・カマド	67
第12図	第1・2号住居跡カマド	26	第60図	第18号住居跡・カマド	68
第13図	第1・2・3号住居跡遺物分布図	27	第61図	第18号住居跡出土遺物	69
第14図	第1号住居跡出土遺物(1)	28	第62図	第19号住居跡	70
第15図	第1号住居跡出土遺物(2)	29	第63図	第19号住居跡出土遺物	70
第16図	第1号住居跡出土遺物(3)	29	第64図	第20号住居跡カマド	71
第17図	第2号住居跡出土遺物	30	第65図	第20号住居跡	72
第18図	第3号住居跡	31	第66図	第20号住居跡出土遺物(1)	73
第19図	第3号住居跡カマド	32	第67図	第20号住居跡出土遺物(2)	73
第20図	第3号住居跡出土遺物	32	第68図	第21号住居跡	74
第21図	第4号住居跡出土遺物(1)	33	第69図	第21号住居跡出土遺物	74
第22図	第4号住居跡出土遺物(2)	33	第70図	第22号住居跡	75
第23図	第4号住居跡・カマド	34	第71図	第22号住居跡カマド	76
第24図	第5号住居跡出土遺物	35	第72図	第22号住居跡出土遺物	77
第25図	第5号住居跡・カマド	36	第73図	第23号住居跡	78
第26図	第6号住居跡遺物分布図	37	第74図	第23号住居跡出土遺物	79
第27図	第6号住居跡・カマド	38	第75図	第24号住居跡出土遺物	79
第28図	第6号住居跡出土遺物	39	第76図	第24号住居跡	80
第29図	第7号住居跡・カマド・貯蔵穴	40	第77図	第25号住居跡カマド	81
第30図	第7号住居跡出土遺物	41	第78図	第25号住居跡	82
第31図	第8号住居跡	42	第79図	第25号住居跡出土遺物	83
第32図	第8号住居跡遺物分布図	43	第80図	第26号住居跡出土遺物	84
第33図	第8号住居跡出土遺物(1)	44	第81図	第26号住居跡・カマド	84
第34図	第8号住居跡出土遺物(2)	45	第82図	第27号住居跡	85
第35図	第8号住居跡出土遺物(3)	45	第83図	第28号住居跡出土遺物	86
第36図	第9号住居跡	46	第84図	第28号住居跡	86
第37図	第9号住居跡カマド・貯蔵穴	47	第85図	第29号住居跡	87
第38図	第9号住居跡出土遺物	48	第86図	第29号住居跡出土遺物	88
第39図	第10・12号住居跡	49	第87図	第30号住居跡	89
第40図	第10・12号住居跡カマド	50	第88図	第30号住居跡出土遺物	90
第41図	第10号住居跡出土遺物	50	第89図	第1号掘立柱建物跡(1)	92
第42図	第12号住居跡出土遺物	51	第90図	第1号掘立柱建物跡(2)	93
第43図	第161号土壌出土遺物(1)	52	第91図	第2号掘立柱建物跡	94
第44図	第161号土壌出土遺物(2)	52	第92図	第3号掘立柱建物跡	96
第45図	第11号住居跡カマド	53	第93図	第4号掘立柱建物跡	97
第46図	第11号住居跡・貯蔵穴	54	第94図	第5号掘立柱建物跡	98
第47図	第11号住居跡出土遺物	55	第95図	第6号掘立柱建物跡	100
第48図	第13号住居跡・遺物分布図	57	第96図	第7号掘立柱建物跡	101
			第97図	第8号掘立柱建物跡	102

第98図	第9号掘立柱建物跡	104	第149図	第1区土壇(3)	167
第99図	第10号掘立柱建物跡	105	第150図	第1区土壇(4)	168
第100図	第11号掘立柱建物跡	106	第151図	第1区土壇(5)	169
第101図	第12・13号掘立柱建物跡	107	第152図	第1区土壇出土遺物	170
第102図	第25号掘立柱建物跡	108	第153図	第1区火葬墓	173
第103図	第26号掘立柱建物跡	109	第154図	第2区遺構配置図	175
第104図	掘立柱建物跡出土遺物	110	第155図	第2 铸造遺構群全体図(1)	177・178
第105図	中世の遺構全体図	113・114	第156図	第2 铸造遺構群全体図(2)	179
第106図	第1区遺構配置図	116	第157図	第2 群第2号铸造土壇	179
第107図	第1 铸造遺構群全体図(1)	118	第158図	第2 群第1・3号铸造土壇	180
第108図	第1 铸造遺構群全体図(2)	119	第159図	第2 群第4・5号铸造土壇	181
第109図	第1 群第1号鑄込み跡	120	第160図	第2 群第1号鑄込み跡(1)	182
第110図	第1 群第1号鑄込み跡遺物出土状態	121	第161図	第2 群第1号鑄込み跡(2)・第1号炉跡	183
第111図	第1 群第2号鑄込み跡(1)	122	第162図	第2 铸造遺構群出土遺物(1)	186
第112図	第1 群第2号鑄込み跡(2)	123	第163図	第2 铸造遺構群出土遺物(2)	187
第113図	第1 群第2号鑄込み跡遺物出土状態	124	第164図	第2 铸造遺構群出土遺物(3)	187
第114図	第1 铸造遺構群遺物分布図	125	第165図	第2 铸造遺構群出土遺物(4)	187
第115図	第1 铸造遺構群出土遺物(1)	129	第166図	第3・4 铸造遺構群	189
第116図	第1 铸造遺構群出土遺物(2)	130	第167図	第1号粘土採掘跡(1)	192
第117図	第1 铸造遺構群出土遺物(3)	131	第168図	第1号粘土採掘跡(2)	193
第118図	第1 铸造遺構群出土遺物(4)	132	第169図	第2号粘土採掘跡	194
第119図	第1 铸造遺構群出土遺物(5)	133	第170図	第3号粘土採掘跡	195
第120図	第1 铸造遺構群出土遺物(6)	134	第171図	第1号炭焼き窯跡	195
第121図	第14号掘立柱建物跡	137	第172図	第19号掘立柱建物跡(1)	197
第122図	第15号掘立柱建物跡(1)	138	第173図	第19号掘立柱建物跡(2)	198
第123図	第15号掘立柱建物跡(2)	139	第174図	第19号掘立柱建物跡(3)	199
第124図	第16号掘立柱建物跡	140	第175図	第20号掘立柱建物跡	200
第125図	第17号掘立柱建物跡	141	第176図	第21号掘立柱建物跡	201
第126図	第18号掘立柱建物跡(1)	142	第177図	第2区溝跡・井戸跡・土壇配置図	202
第127図	第18号掘立柱建物跡(2)	143	第178図	第2区溝跡土層図(1)	203
第128図	第1区の溝・井戸・土壇配置図	144	第179図	第2区溝跡土層図(2)	204
第129図	第1区溝跡土層図	145	第180図	第7号溝跡出土遺物(1)	206
第130図	第1区溝跡出土遺物	146	第181図	第7号溝跡出土遺物(2)	207
第131図	第1号井戸跡・出土遺物(1)	148	第182図	第7号溝跡出土遺物(3)	208
第132図	第1号井戸跡出土遺物(2)	149	第183図	第7号溝跡出土遺物(4)	209
第133図	第1号井戸跡出土遺物(3)	150	第184図	第12号溝跡出土遺物	212
第134図	第2号井戸跡	151	第185図	第22号溝跡遺物分布図(1)	214
第135図	第2号井戸跡出土遺物	152	第186図	第22号溝跡遺物分布図(2)	215
第136図	第3号井戸跡・出土遺物(1)	153	第187図	第22号溝跡出土遺物(1)	216
第137図	第3号井戸跡出土遺物(2)	154	第188図	第22号溝跡出土遺物(2)	217
第138図	第3号井戸跡出土遺物(3)	155	第189図	第22号溝跡出土遺物(3)	218
第139図	第3号井戸跡出土遺物(4)	156	第190図	第22号溝跡出土遺物(4)	219
第140図	第3号井戸跡出土遺物(5)	157	第191図	第22号溝跡出土遺物(5)	220
第141図	第4号井戸跡	159	第192図	第22号溝跡出土遺物(6)	221
第142図	第4号井戸跡出土遺物(1)	160	第193図	第22号溝跡出土遺物(7)	222
第143図	第4号井戸跡出土遺物(2)	161	第194図	第22号溝跡出土遺物(8)	224
第144図	第4号井戸跡出土遺物(3)	162	第195図	第2区溝跡出土遺物	225
第145図	第1～6号土壇	163	第196図	第6・7号井戸跡	227
第146図	第7～10号土壇	164	第197図	第6号井戸跡出土遺物(1)	228
第147図	第1区土壇(1)	165	第198図	第6号井戸跡出土遺物(2)	229
第148図	第1区土壇(2)	166	第199図	第7号井戸跡出土遺物	230

第200图	第5・8・9号井戸跡……………	231
第201图	第8・9号井戸跡出土遺物……………	232
第202图	第85号土壙・鍛冶炉……………	233
第203图	土壙群全体図(1)……………	234
第204图	第86～89号土壙……………	235
第205图	第90・91号土壙……………	236
第206图	第92・93号土壙……………	238
第207图	土壙群全体図(2)……………	239
第208图	第94～99号土壙……………	240
第209图	土壙群全体図(3)……………	241
第210图	第101～104号土壙……………	242
第211图	第105～110号土壙……………	243
第212图	第111～116号土壙……………	244
第213图	第117・118号土壙……………	245
第214图	第2区土壙出土遺物(1)……………	247
第215图	第2区土壙出土遺物(2)……………	248
第216图	第2区土壙(1)……………	250
第217图	第2区土壙(2)……………	251
第218图	第2区土壙(3)……………	252
第219图	第2区土壙(4)……………	253
第220图	第2区火葬墓……………	256
(第2分冊)		
第221图	第3区遺構配置図……………	259
第222图	第5铸造遺構群全体図(1)……………	260
第223图	第5铸造遺構群全体図(2)……………	261
第224图	第5铸造遺構群全体図(3)……………	262
第225图	第5群第1号溶解炉跡……………	264
第226图	第5群第2号溶解炉跡……………	265
第227图	第5群第3号炉・第1号鋳込み跡……………	266
第228图	第5群第1・2号土壙遺物分布図……………	268
第229图	第5群炉体1～4号遺物分布図……………	269
第230图	第5群炉体5号遺物分布図……………	270
第231图	第5群第10号铸造土壙遺物分布図……………	271
第232图	第5铸造遺構群出土遺物(1)……………	275
第233图	第5铸造遺構群出土遺物(2)……………	276
第234图	第5铸造遺構群出土遺物(3)……………	278
第235图	第5铸造遺構群出土遺物(4)……………	279
第236图	第5铸造遺構群出土遺物(5)……………	280
第237图	第5铸造遺構群出土遺物(6)……………	282
第238图	第5铸造遺構群出土遺物(7)……………	283
第239图	第5铸造遺構群出土遺物(8)……………	284
第240图	第5铸造遺構群出土遺物(9)……………	286
第241图	第5铸造遺構群出土遺物(10)……………	288
第242图	第5铸造遺構群出土遺物(11)……………	289
第243图	第5铸造遺構群出土遺物(12)……………	290
第244图	第5铸造遺構群出土遺物(13)……………	291
第245图	第5铸造遺構群出土遺物(14)……………	292
第246图	第5铸造遺構群出土遺物(15)……………	294
第247图	第5铸造遺構群出土遺物(16)……………	295
第248图	第5铸造遺構群出土遺物(17)……………	296
第249图	第5铸造遺構群出土遺物(18)……………	297

第250图	第6铸造遺構群全体図(1)……………	303
第251图	第6铸造遺構群全体図(2)……………	304
第252图	第6群第1号炉跡……………	305
第253图	第6群第1・2・8号铸造土壙遺物分布図……………	306
第254图	第6群第3～7号铸造土壙遺物分布図……………	308
第255图	第6群第11・12号铸造土壙……………	309
第256图	第6铸造遺構群出土遺物(1)……………	313
第257图	第6铸造遺構群出土遺物(2)……………	314
第258图	第7铸造遺構群全体図……………	316
第259图	第7群第1号铸造土壙……………	317
第260图	第7群第1～3号炉跡……………	318
第261图	第7铸造遺構群出土遺物(1)……………	322
第262图	第7铸造遺構群出土遺物(2)……………	323
第263图	第7铸造遺構群出土遺物(3)……………	324
第264图	第7铸造遺構群出土遺物(4)……………	326
第265图	第8铸造遺構群全体図(1)……………	329
第266图	第8铸造遺構群全体図(2)……………	330
第267图	第8群第1号铸造土壙……………	332
第268图	第8群第2・3号铸造土壙・円形還元状遺構……………	333
第269图	第8群第1号炉跡……………	334
第270图	第8群第1・2号炉跡……………	335
第271图	第8群炉体1号……………	335
第272图	第8群第2号炉跡・第8・9・15号廃滓……………	336
第273图	第8铸造遺構群廃滓分布図(1)……………	337
第274图	第8群第11・12号廃滓……………	338
第275图	第8铸造遺構群廃滓分布図(2)……………	339
第276图	第8群第1・2・6・11・12号廃滓……………	343
第277图	第8铸造遺構群出土遺物(1)……………	344
第278图	第8铸造遺構群出土遺物(2)……………	345
第279图	第8铸造遺構群出土遺物(3)……………	346
第280图	第8铸造遺構群出土遺物(4)……………	347
第281图	第8铸造遺構群出土遺物(5)……………	347
第282图	第8铸造遺構群出土遺物(6)……………	348
第283图	第8铸造遺構群出土遺物(7)……………	349
第284图	第8铸造遺構群出土遺物(8)……………	350
第285图	第8铸造遺構群出土遺物(9)……………	351
第286图	第8铸造遺構群出土遺物(10)……………	352
第287图	第8铸造遺構群出土遺物(11)……………	353
第288图	第8铸造遺構群出土遺物(12)……………	354
第289图	第9铸造遺構群全体図……………	359
第290图	第9铸造遺構群出土遺物(1)……………	362
第291图	第9铸造遺構群出土遺物(2)……………	363
第292图	第10铸造遺構群全体図……………	366
第293图	第10群第1・5号铸造土壙……………	368
第294图	第10群第5号铸造土壙遺物分布図……………	369
第295图	第10群第2・6・8・9号铸造土壙……………	370
第296图	第10群第3・4号铸造土壙……………	371
第297图	第10群第7号铸造土壙遺物分布図……………	372
第298图	第10群第1～3号炉・第1号鋳込み跡……………	373
第299图	第10群第4号炉跡……………	375
第300图	第10铸造遺構群出土遺物(1)……………	379

第301図	第10鑄造遺構群出土遺物(2)……………	380	第349図	第30号溝跡出土遺物(2)……………	447
第302図	第10鑄造遺構群出土遺物(3)……………	381	第350図	第30号溝跡出土遺物(3)……………	448
第303図	第10鑄造遺構群出土遺物(4)……………	382	第351図	第30号溝跡出土遺物(4)……………	449
第304図	第10鑄造遺構群出土遺物(5)……………	383	第352図	第30号溝跡出土遺物(5)……………	450
第305図	第10鑄造遺構群出土遺物(6)……………	384	第353図	第10・12・13号井戸跡・出土遺物……………	453
第306図	第10鑄造遺構群出土遺物(7)……………	385	第354図	第11号井戸跡・出土遺物……………	454
第307図	第10鑄造遺構群出土遺物(8)……………	386	第355図	第3区土壇出土遺物……………	455
第308図	第11鑄造遺構群全体図(1)……………	392	第356図	第3区土壇……………	456
第309図	第11鑄造遺構群全体図(2)……………	393	第357図	第4区遺構配置図……………	458
第310図	第11群第1号炉跡・第1・2号鑄造土壇……………	394	第358図	第14鑄造遺構群全体図……………	459
第311図	第11群第3・5～7号鑄造土壇……………	395	第359図	第14群第1号鑄込み跡……………	460
第312図	第11群第1・2号鑄込み跡・ 第4号鑄造土壇(1)……………	396	第360図	第14群第1号炉跡……………	461
第313図	第11群第1・2号鑄込み跡・ 第4号鑄造土壇(2)……………	397	第361図	第14鑄造遺構群出土遺物(1)……………	463
第314図	第11群第1・2号鑄込み跡・ 第4号鑄造土壇(3)……………	398	第362図	第14鑄造遺構群出土遺物(2)……………	464
第315図	第11群遺物分布図……………	399	第363図	第14鑄造遺構群出土遺物(3)……………	465
第316図	第11鑄造遺構群出土遺物(1)……………	405	第364図	第15群第1号鑄造土壇……………	466
第317図	第11鑄造遺構群出土遺物(2)……………	406	第365図	第15群第1・2号廃滓……………	467
第318図	第11鑄造遺構群出土遺物(3)……………	407	第366図	第15鑄造遺構群出土遺物……………	469
第319図	第11鑄造遺構群出土遺物(4)……………	408	第367図	第4区溝跡土層図……………	470
第320図	第11鑄造遺構群出土遺物(5)……………	409	第368図	第4区溝跡・土壇配置図……………	471
第321図	第11鑄造遺構群出土遺物(6)……………	410	第369図	第4区土壇……………	472
第322図	第11鑄造遺構群出土遺物(7)……………	411	第370図	第4区土壇出土遺物(1)……………	473
第323図	第11鑄造遺構群出土遺物(8)……………	412	第371図	第4区土壇出土遺物(2)……………	474
第324図	第11鑄造遺構群出土遺物(9)……………	413	第372図	第5区溝跡土層図……………	475
第325図	第11鑄造遺構群出土遺物(10)……………	414	第373図	第5区溝跡・土壇配置図……………	476
第326図	第11鑄造遺構群出土遺物(11)……………	415	第374図	第41号溝跡出土遺物……………	477
第327図	第11鑄造遺構群出土遺物(12)……………	416	第375図	第5区土壇(1)……………	478
第328図	第12群第1号鑄造土壇……………	421	第376図	第5区土壇(2)……………	479
第329図	第12鑄造遺構群グリッド遺物分布図……………	421	第377図	第5区土壇(3)……………	480
第330図	第12鑄造遺構群出土遺物(1)……………	424	第378図	第6区溝跡・土壇配置図……………	482
第331図	第12鑄造遺構群出土遺物(2)……………	425	第379図	第6区溝跡土層図……………	483
第332図	第13鑄造遺構群全体図……………	427	第380図	第6区土壇(1)……………	484
第333図	第13鑄造遺構群遺物分布図……………	428	第381図	第6区土壇(2)……………	485
第334図	第13鑄造遺構群出土遺物(1)……………	431	第382図	第7区溝跡土層図……………	486
第335図	第13鑄造遺構群出土遺物(2)……………	432	第383図	第7区溝跡・土壇配置図……………	487
第336図	第13鑄造遺構群出土遺物(3)……………	433	第384図	第50・51号溝跡出土遺物……………	488
第337図	第22号掘立柱建物跡(1)……………	435	第385図	第14号井戸跡出土遺物……………	489
第338図	第22号掘立柱建物跡(2)……………	436	第386図	第14号井戸跡……………	489
第339図	第23号掘立柱建物跡(1)……………	437	第387図	第7区土壇出土遺物……………	489
第340図	第23号掘立柱建物跡(2)……………	438	第388図	第7区土壇(1)……………	490
第341図	第24号掘立柱建物跡……………	439	第389図	第7区火葬墓……………	491
第342図	第3区溝跡・井戸跡・土壇配置図……………	440	第390図	第8区土壇配置図……………	492
第343図	第3区溝跡土層図……………	441	第391図	第8区土壇……………	493
第344図	第27号溝跡遺物分布図……………	442	第392図	第8区土壇出土遺物……………	493
第345図	第26・27号溝跡出土遺物……………	442	第393図	第1・2号集石土壇……………	494
第346図	第30号溝跡遺物分布図……………	444	第394図	グリッド出土遺物(1)……………	495
第347図	第30号溝跡……………	445	第395図	グリッド出土遺物(2)……………	496
第348図	第30号溝跡出土遺物(1)……………	446	第396図	グリッド出土遺物(3)……………	497
			第397図	表探遺物(1)……………	498
			第398図	表探遺物(2)……………	498
			第399図	金井遺跡A区第160号土壇出土遺物(1) ……	499

第400図	金井遺跡A区第160号土壇出土遺物(2) ……	500
第401図	二反田遺跡出土溶解炉 ……	501
第402図	二反田遺跡出土遺物 ……	502
(第3分冊)		
第403図	梵鐘鑄造土壇 ……	504
第404図	フイゴ拵え跡 ……	505
第405図	鑄造土壇・竪穴状遺構 ……	507
第406図	推定溶解炉 ……	509
第407図	溶解炉出土部位復元図 ……	510
第408図	溶解炉集成 ……	511
第409図	鉄塊系遺物(製品) ……	512
第410図	鑄造遺物総計 ……	513・514
第411図	鑄造遺構群分割図 ……	517
第412図	鉄塊系遺物(1) ……	518
第413図	鉄塊系遺物(2) ……	519
第414図	鉄塊系遺物(3) ……	520
第415図	炉壁集成 ……	521
第416図	炉壁(1) ……	522
第417図	炉壁(2) ……	523
第418図	炉壁(3) ……	524
第419図	羽口集成 ……	528
第420図	羽口(1) ……	529
第421図	羽口(2) ……	530
第422図	羽口(3) ……	531
第423図	銅(1) ……	533
第424図	銅(2) ……	534
第425図	銅(3) ……	535
第426図	鉄滓(1) ……	537
第427図	鉄滓(2) ……	538
第428図	鉄滓(3) ……	539
第429図	黒鉛化木炭集成 ……	540
第430図	木炭(1) ……	541
第431図	木炭(2) ……	542
第432図	木炭(3) ……	543
第433図	白色滓(1) ……	545
第434図	白色滓(2) ……	546
第435図	白色滓(3) ……	547
第436図	石(1) ……	549
第437図	石(2) ……	550
第438図	石(3) ……	551
第439図	鑄型総計 ……	552・553
第440図	鑄型(1) ……	555
第441図	鑄型(2) ……	556
第442図	鑄型(3) ……	557
第443図	鍋・羽釜・容器・犁先鑄型 ……	558
第444図	各種鑄型(1) ……	559
第445図	各種鑄型(2) ……	560
第446図	梵鐘鑄型 ……	561
第447図	梵鐘鑄型集成・撞座 ……	562
第448図	梵鐘鑄型集成・龍頭(1) ……	563
第449図	梵鐘鑄型集成・龍頭(2) ……	564
第450図	梵鐘鑄型集成・乳 ……	565
第451図	容器鑄型 ……	566
第452図	容器鑄型集成(1) ……	567
第453図	容器鑄型集成(2) ……	568
第454図	獸脚鑄型 ……	569
第455図	獸脚鑄型集成(1) ……	570
第456図	獸脚鑄型集成(2) ……	571
第457図	仏像鑄型集成 ……	572
第458図	仏具鑄型 ……	573
第459図	飾り金具鑄型集成 ……	574
第460図	磬鑄型集成 ……	574
第461図	つまみ鑄型集成 ……	575
第462図	注ぎ口・鏡鑄型集成 ……	575
第463図	猿貝北遺跡出土遺物 ……	576
第464図	三叉状土製品使用法 ……	576
第465図	道具集成(1) ……	577
第466図	道具集成(2) ……	578
第467図	道具集成(3) ……	579
第468図	道具集成(4) ……	580
第469図	全国鑄造・製鉄遺跡分布図(古代) ……	582
第470図	全国鑄造遺跡分布図(中世・近世) ……	583
第471図	埼玉県内の製鉄・鑄造遺跡 ……	584
第472図	中世鑄物師の本貫地 ……	585
第473図	遺跡周辺分布図 ……	586
第474図	第10群第7号鑄造土壇出土梵鐘復元図 ……	587
第475図	現存する中世の梵鐘 ……	588
第476図	梵鐘撞座集成 ……	590
第477図	花菱形文様 ……	591
第478図	児玉党分布図 ……	592
第479図	金井周辺小字名 ……	593
第480図	児玉党の家紋とスタンプ状石製品 ……	594
第481図	土器接合関係図 ……	597
第482図	中世土器編年図(1) ……	599
第483図	中世土器編年図(2) ……	601
第484図	在地鉢分類図 ……	602
第485図	在地内耳鍋分類図 ……	603
第486図	在地甕分類図 ……	605
第487図	中世第II期の集落(鑄造跡) ……	607
第488図	鑄造遺構概念図 ……	608
第489図	中世第III期の集落 ……	609
第490図	古代の土器(第III期) ……	611
第491図	古代の土器(第IV期) ……	612
第492図	古代の土器(第V期) ……	613
第493図	古代の土器(第VI・VII期) ……	613
第494図	古代の土器(第IX・X期) ……	614
第495図	古代の土器(第XII・XIII・XIV期) ……	615
第496図	古代集落変遷図(1) ……	617
第497図	古代集落変遷図(2) ……	618
第498図	古代集落変遷図(3) ……	619
第499図	掘立柱建物跡の変遷(1)・(2) ……	620
第500図	掘立柱建物跡の変遷(3) ……	621

表 目 次

(第1分冊)

第1表	入西遺跡群一覽表	16
第2表	住居跡一覽表	90
第3表	掘立柱建物跡一覽表	111
第4表	第1 鑄造遺構群遺物計量表	126
第5表	第1 鑄造遺構群一覽表	135
第6表	第1 区掘立柱建物跡一覽表	143
第7表	第1 区溝跡一覽表	147
第8表	第1 区井戸跡一覽表	162
第9表	第1 区土壙一覽表	170
第10表	第1 区火葬墓一覽表	172
第11表	第2 鑄造遺構群遺物計量表(1)	184
第12表	第2 鑄造遺構群遺物計量表(2)	185
第13表	第3 鑄造遺構群遺物計量表	188
第14表	第4 鑄造遺構群遺物計量表	190
第15表	第2・3・4 鑄造遺構群一覽表	191
第16表	第2 区掘立柱建物跡一覽表	200
第17表	第2 区溝跡一覽表	225
第18表	第2 区井戸跡一覽表	232
第19表	第2 区土壙一覽表	254
第20表	第2 区火葬墓一覽表	256

(第2分冊)

第21表	第5 鑄造遺構群遺物計量表(1)	272
第22表	第5 鑄造遺構群遺物計量表(2)	273
第23表	第5 鑄造遺構群一覽表	301
第24表	第6 鑄造遺構群遺物計量表(1)	311
第25表	第6 鑄造遺構群遺物計量表(2)	312
第26表	第6 鑄造遺構群一覽表	315
第27表	第7 鑄造遺構群遺物計量表(1)	320
第28表	第7 鑄造遺構群遺物計量表(2)	321
第29表	第7 鑄造遺構群一覽表	327
第30表	第8 鑄造遺構群遺物計量表(1)	340
第31表	第8 鑄造遺構群遺物計量表(2)	341
第32表	第8 鑄造遺構群一覽表	357
第33表	第9 鑄造遺構群遺物計量表(1)	360
第34表	第9 鑄造遺構群遺物計量表(2)	361
第35表	第9 鑄造遺構群一覽表	361
第36表	第10鑄造遺構群遺物計量表(1)	376
第37表	第10鑄造遺構群遺物計量表(2)	377
第38表	第10鑄造遺構群一覽表	390

第39表	第11鑄造遺構群遺物計量表(1)	402
第40表	第11鑄造遺構群遺物計量表(2)	403
第41表	第11鑄造遺構群一覽表	419
第42表	第12鑄造遺構群遺物計量表(1)	422
第43表	第12鑄造遺構群遺物計量表(2)	423
第44表	第12鑄造遺構群一覽表	425
第45表	第13鑄造遺構群遺物計量表(1)	429
第46表	第13鑄造遺構群遺物計量表(2)	430
第47表	第13鑄造遺構群一覽表	433
第48表	第3 区掘立柱建物跡一覽表	436
第49表	第3 区溝跡一覽表	452
第50表	第3 区井戸跡一覽表	455
第51表	第3 区土壙一覽表	455
第52表	第14鑄造遺構群遺物計量表	462
第53表	第15鑄造遺構群遺物計量表(1)	468
第54表	第15鑄造遺構群遺物計量表(2)	469
第55表	第14・15鑄造遺構群一覽表	470
第56表	第4 区溝跡一覽表	470
第57表	第4 区土壙一覽表	474
第58表	第5 区溝跡一覽表	477
第59表	第5 区土壙一覽表	481
第60表	第6 区溝跡一覽表	483
第61表	第6 区土壙一覽表	485
第62表	第7 区溝跡一覽表	488
第63表	第7 区井戸跡一覽表	489
第64表	第7 区土壙一覽表	491
第65表	第7 区火葬墓一覽表	491
第66表	第8 区土壙一覽表	492

(第3分冊)

第67表	鉄塊系遺物分類表(1)	515
第68表	鉄塊系遺物分類表(2)	516
第69表	炉壁分類表	525
第70表	羽口推定口径(1)	527
第71表	羽口推定口径(2)	532
第72表	白色滓形状分類	544
第73表	埼玉県の中世梵鐘一覽	589
第74表	物部氏製作梵鐘一覽	591
第75表	児玉党家系図	594
第76表	三福寺出土遺物	595

付 図

付 図 金井遺跡B区全測図 (1/400)

写真図版

- 図版1 金井遺跡B区全景
図版2 西側調査区全景
東側緩斜面全景
図版3 第1・2号住居跡
第3号住居跡
第4号住居跡
図版4 第4号住居跡
第5号住居跡遺物出土状況
第6号住居跡
図版5 第7号住居跡
第8号住居跡
第8号住居跡遺物出土状況
図版6 第8号住居跡遺物出土状況
第8号住居跡カマド遺物出土状況
第9号住居跡
図版7 第10号住居跡
第11号住居跡
第11号住居跡カマド
図版8 第13号住居跡
第13号住居跡カマド
第14号住居跡
図版9 第16号住居跡
第17号住居跡
第17号住居跡カマド
図版10 第17号住居跡カマド
第18号住居跡
第19号住居跡
図版11 第19号住居跡遺物出土状況
第20号住居跡
第20号住居跡カマド
図版12 第21号住居跡
第22号住居跡
第22号住居跡遺物出土状況
図版13 第22号住居跡カマド
第23号住居跡
第23号住居跡遺物出土状況
図版14 第24号住居跡
第24号住居跡遺物出土状況
第25号住居跡
図版15 第27号住居跡
第29号住居跡
第30号住居跡
図版16 第1号掘立柱建物跡
第2・7～9号掘立柱建物跡
第3号掘立柱建物跡
図版17 第4・6・11号掘立柱建物跡
第5号掘立柱建物跡
第10号掘立柱建物跡
図版18 第12号掘立柱建物跡
第13号掘立柱建物跡
第14号掘立柱建物跡
図版19 第15号掘立柱建物跡
第19号掘立柱建物跡
図版20 第20号掘立柱建物跡
第21号掘立柱建物跡
第22号掘立柱建物跡
図版21 第23号掘立柱建物跡
第24号掘立柱建物跡
第25・26号掘立柱建物跡
図版22 西側調査区
第1 鑄造遺構群
第1 群第1号鑄込み跡
図版23 第1 群第1号鑄込み跡
第1 群第2号鑄込み跡
第1 群第2号鑄込み跡
図版24 第2 鑄造遺構群
第2 群第2号鑄造土壇確認状況
第2 群第5号鑄造土壇
図版25 第2 群第1号鑄込み跡
第2 鑄造遺構群遺物出土状況1
第2 鑄造遺構群遺物出土状況2
図版26 第2 鑄造遺構群古銭出土状況
第3 鑄造遺構群
図版27 第3 鑄造遺構群
第4 鑄造遺構群鉍滓出土状況
第4 鑄造遺構群
図版28 第5 鑄造遺構群粘土貼床
第5 鑄造遺構群
第5 鑄造遺構群
図版29 第5 群第1～8号鑄造土壇
第5 群第1号鑄造土壇
第5 群第1号鑄造土壇梵鐘鑄型出土状況
図版30 第5 群第1号鑄造土壇梵鐘鑄型出土状況
第5 群第2号鑄造土壇遺物出土状況
第5 群第9号鑄造土壇
図版31 第5 群第1号溶解炉
第5 群第1号溶解炉断面
第5 群第2号溶解炉
図版32 第5 群第2号溶解炉
第5 群第1号鑄込み跡
第5 群炉体5号炉壁出土状況
図版33 第5 群炉体5号トリエ出土状況
第6 鑄造遺構群遺物出土状況
第6 群第3号鑄造土壇
図版34 第6 群第4号鑄造土壇
第6 群第6号鑄造土壇

- 第6群第1号炉跡
- 図版35 第7群第1号鑄造土壙
第7群第1号鑄造土壙遺物出土状況
第7群第3号炉跡
- 図版36 第8鑄造遺構群確認状況
第8鑄造遺構群確認状況
第8鑄造遺構群
- 図版37 第8群第3号鑄造土壙
第8群第1号鑄造土壙
第8群第1号炉跡
- 図版38 第8群第2号炉跡
第8群円形還元状遺構
第8群第2号廃滓
- 図版39 第8群第7号廃滓
第9群第1号廃滓
第9群第2号廃滓
- 図版40 第10鑄造遺構群
第10群第1・5号鑄造土壙
第10群第1号鑄造土壙
- 図版41 第10群第1号鑄造土壙
第10群第1号鑄造土壙金植出土状況
第10群第1号鑄造土壙梵鐘鑄型出土状況
- 図版42 第10群第2号鑄造土壙
第10群第3号鑄造土壙
第10群第5号鑄造土壙
- 図版43 第10群第5号鑄造土壙
第10群第7号鑄造土壙
第10群第7号鑄造土壙梵鐘鑄型出土状況
- 図版44 第10群第7号鑄造土壙梵鐘鑄型出土状況
第10群第1号炉跡粘土貼床
第10群第1号炉跡粘土貼床
- 図版45 第10群第2・3号炉跡
第10群第1号鑄込み跡鑄型出土状況
調査区東側緩斜面
- 図版46 第11鑄造遺構群
第11群第2号鑄造土壙
第11群第2号鑄造土壙遺物出土状況
- 図版47 第11群第3号鑄造土壙
第11群第4号鑄造土壙・第1・2号鑄込み跡
第11群第4号鑄造土壙
- 図版48 第11群第2号鑄込み跡・第4号鑄造土壙・
第10号井戸跡
第11群第2号鑄込み跡
第11群ピット7鑄型出土状況
- 図版49 第11群P-14グリッド仏像鑄型出土状況
第11群P-13-hグリッド仏像鑄型出土状況
第12群第1号鑄造土壙
- 図版50 第13群第1号廃滓
第14鑄造遺構群
第14鑄造遺構群
- 図版51 第14鑄造遺構群
第14群第1号鑄込み跡
第14群第1号鑄込み跡
- 図版52 第14群第1号鑄込み跡
第15群第1号鑄造土壙
第15群第2号廃滓
- 図版53 第85号土壙
第1号炭焼き窯跡
第2区土壙群1
- 図版54 第2区土壙群2
第2区土壙群3
第1号土壙
- 図版55 第4号土壙
第89号土壙
第90号土壙
- 図版56 第90号土壙断面
第91号土壙
第92号土壙遺物出土状況
- 図版57 第117号土壙
第117号土壙鑄型出土状況
第118号土壙
- 図版58 第161号土壙
第174号土壙羽口出土状況
第183号土壙遺物出土状況
- 図版59 第1号井戸跡
第1号井戸跡木杭出土状況
第1号井戸跡木杭出土状況
- 図版60 第2号井戸跡
第3号井戸跡
第3号井戸跡椀出土状況
- 図版61 第3号井戸跡曲物出土状況
第3号井戸跡板碑出土状況
第4号井戸跡
- 図版62 第4号井戸跡井戸杵出土状況1
第4号井戸跡井戸杵出土状況2
第4号井戸跡井戸杵出土状況3
- 図版63 第4号井戸跡井戸杵出土状況4
第5号井戸跡
第6号井戸跡
- 図版64 第7号井戸跡
第8号井戸跡
第9号井戸跡
- 図版65 第10号井戸跡
第11号井戸跡木製品出土状況
第12号井戸跡
- 図版66 第13号井戸跡
第14号井戸跡
第7号溝跡
- 図版67 第7号溝跡遺物出土状況
第7号溝跡遺物出土状況

- 第22号溝跡遺物出土状況
 図版68 第22号溝跡遺物出土状況
 第22号溝跡遺物出土状況
 第22号溝跡獸脚鑄型出土状況
 図版69 第30号溝跡 1
 第30号溝跡 2
 第30号溝跡鑄型出土状況
 図版70 第30号溝跡・第174号土壙
 第30号溝跡 3
 第50号溝跡
 図版71 第1号粘土採掘跡
 第1号粘土採掘跡
 第2号粘土採掘跡
 第2号粘土採掘跡
 第3号粘土採掘跡
 第3号粘土採掘跡
 図版72 第1号集石土壙
 第1号火葬墓
 第5号火葬墓
 第8号火葬墓
 第2号集石土壙
 第4号火葬墓
 第8号火葬墓確認状況
 第13号火葬墓
 図版73 住居跡出土遺物 1
 図版74 住居跡出土遺物 2
 図版75 住居跡出土遺物 3
 図版76 住居跡出土遺物 4
 図版77 住居跡・井戸跡出土遺物
 図版78 土器・石器
 図版79 木器椀・曲物
 図版80 白磁・青磁椀
 図版81 青磁椀
 図版82 青磁椀・常滑甕
 図版83 常滑片口鉢
 図版84 常滑片口鉢
 図版85 瀬戸四耳壺・鉢・備前播鉢・志野
 図版86 瀬戸皿、鉢、盤
 図版87 瀬戸椀
 図版88 渥美・瀬戸甕・在地土師質皿
 図版89 在地甕・在地内耳鍋
 図版90 在地片口鉢
 図版91 炉壁
 図版92 炉壁
 図版93 炉壁
 図版94 炉壁
 図版95 炉壁：クライ・羽口・ノミ口
 図版96 羽口
 図版97 鍋・容器・犁先・鏡・つまみ・注ぎ口鑄型
 図版98 三叉状土製品・半球状土製品・木製品
 図版99 仏像鑄型
 図版100 梵鐘鑄型（陽鑄文字）・獸脚鑄型
 図版101 獸脚鑄型
 図版102 獸脚鑄型
 図版103 容器・獸脚鑄型・猫足鑄型
 図版104 飾り金具鑄型
 図版105 三叉状土製品
 図版106 三叉状土製品・砥石
 図版107 トリベ・鍛冶羽口・道具・紡錘車・土錘
 図版108 銅塊・銅滓
 図版109 鉄塊系遺物
 図版110 ハタまわし（X線写真）
 図版111 鉄塊系遺物（X線写真）
 図版112 鉄製箍（X線写真）
 鉄塊系遺物（X線CT写真）
 図版113 鑄造関連分析資料 1・2
 図版114 鑄造関連分析資料 3・4
 図版115 自然化学分析（炭化材）
 図版116～143 顕微鏡組織
 図版136～145 CMA
 図版146～153 顕微鏡組織
 図版154～161 CMA

金井遺跡 B 区想像図

—平成 2 年現地説明会資料より転載—



3 第3区の遺構と遺物

本区は金井遺跡の中心的鑄造遺構群が展開する東側の二段からなる緩斜面部分にあたる。台地上の標高は30.0m、一段目の斜面を下がったテラス部分は標高28.2m、二段目の緩斜面を下った部分では標高27.0mである。全体の比高差は3mとなる。

台地を切り込んで平坦面を造りだし作業場としたのが第7・8鑄造遺構群第1号土壙や第4号土壙である。また、第5・10鑄造遺構群は第1斜面面を利用して梵鐘鑄造の作業をしている。第6鑄造遺構群は台地上の平坦面から第1斜面にかけてやや大型の仏具用品の鑄造作業をしており、第11鑄造遺構群は第1と第2斜面の平坦なテラス部分を利用して仏具製品の鑄造作業をしていることが明らかとなった。この他、第9・12鑄造遺構群は廃滓場として役割を担っていたものと考えられる。

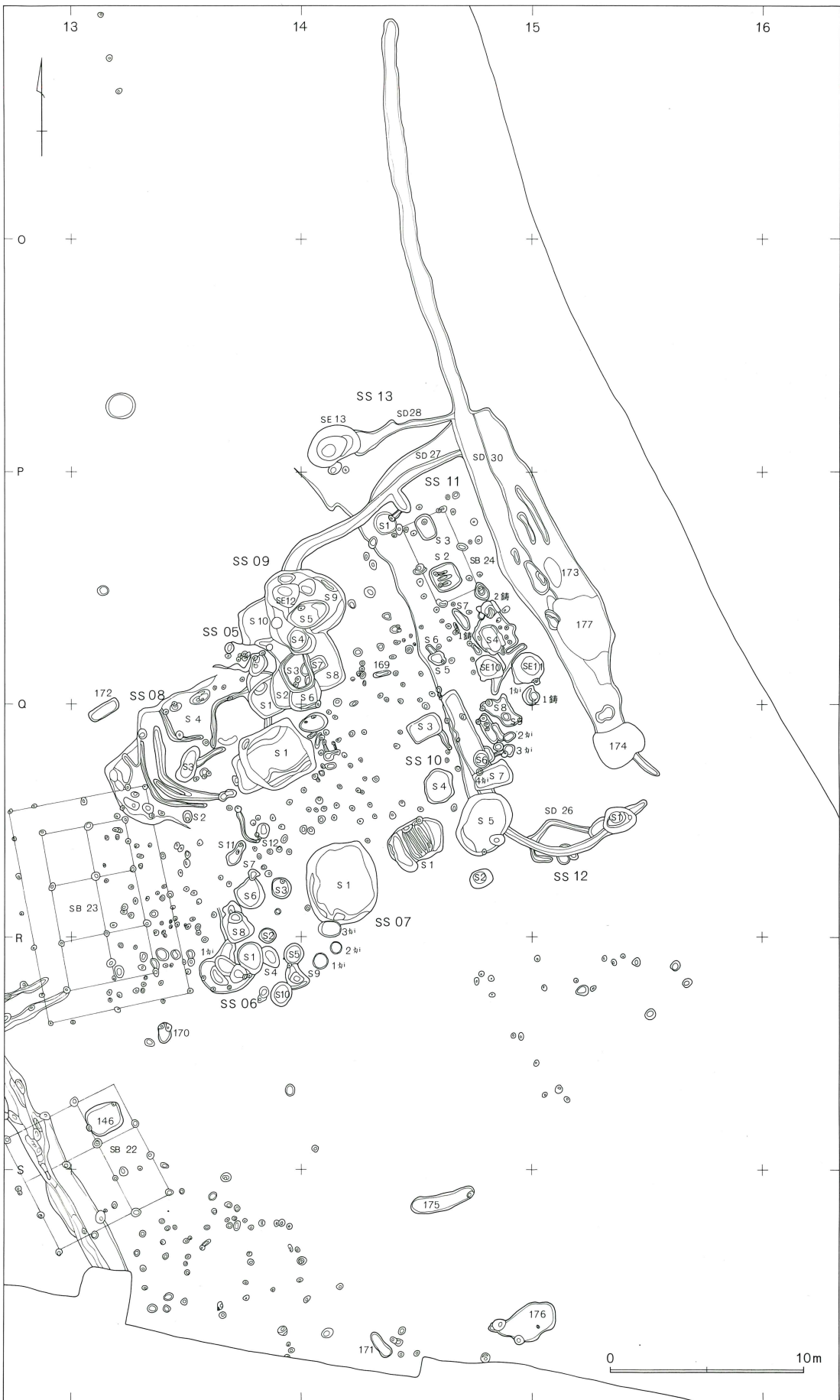
特に注目すべき点は鑄造のための溶解炉を2基原位置で確認できたことである。第1号溶解炉は炉底部が、第2号溶解炉は炉底から「ル」の胴部が一部残り全国的に見ても貴重な資料と思われる。

出土した鑄造遺物は大量である。緩斜面の堆積層は1mの小グリッドを設定し取り上げ、遺構の検出された部分は遺構名を付したが遺物の取り上げは小グリッドを基本とした。中でも、第5鑄造遺構群の第1～10号鑄造土壙内からはまとまって梵鐘鑄型を検出したり、溶解炉片を検出した。

本区は台地上に第7号溝が南北に走り、溝中央には本区鑄造遺構群の入り口の形態をもつ第8号溝が存在する。また、東側は地形にそって斜面裾部を第30号溝が南北に走る。遺構の広がり斜面に直交する形であるが、東西は両溝によって区切られている。



東側緩斜面（南側から）



第221図 第3区遺構配置図

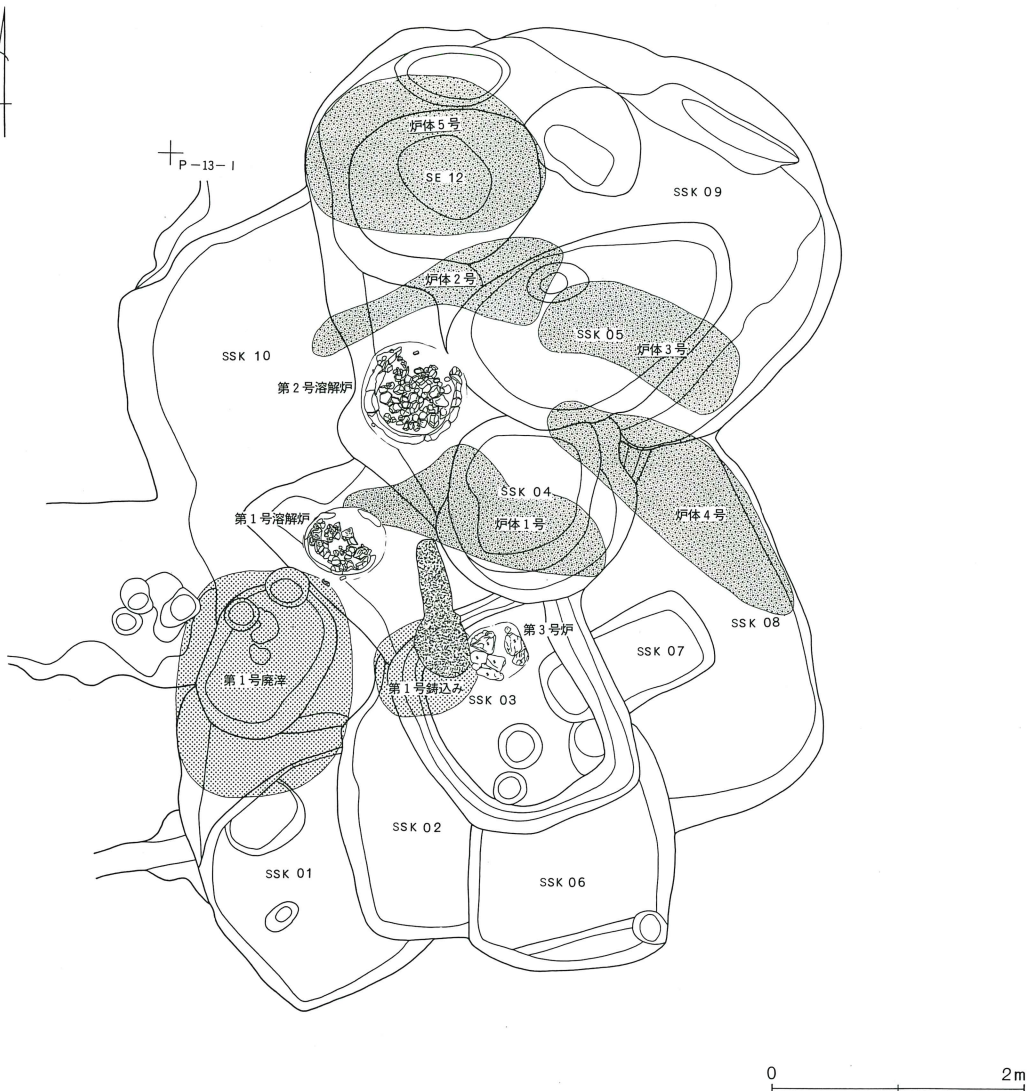
(1) 鑄造跡

a 第5鑄造遺構群

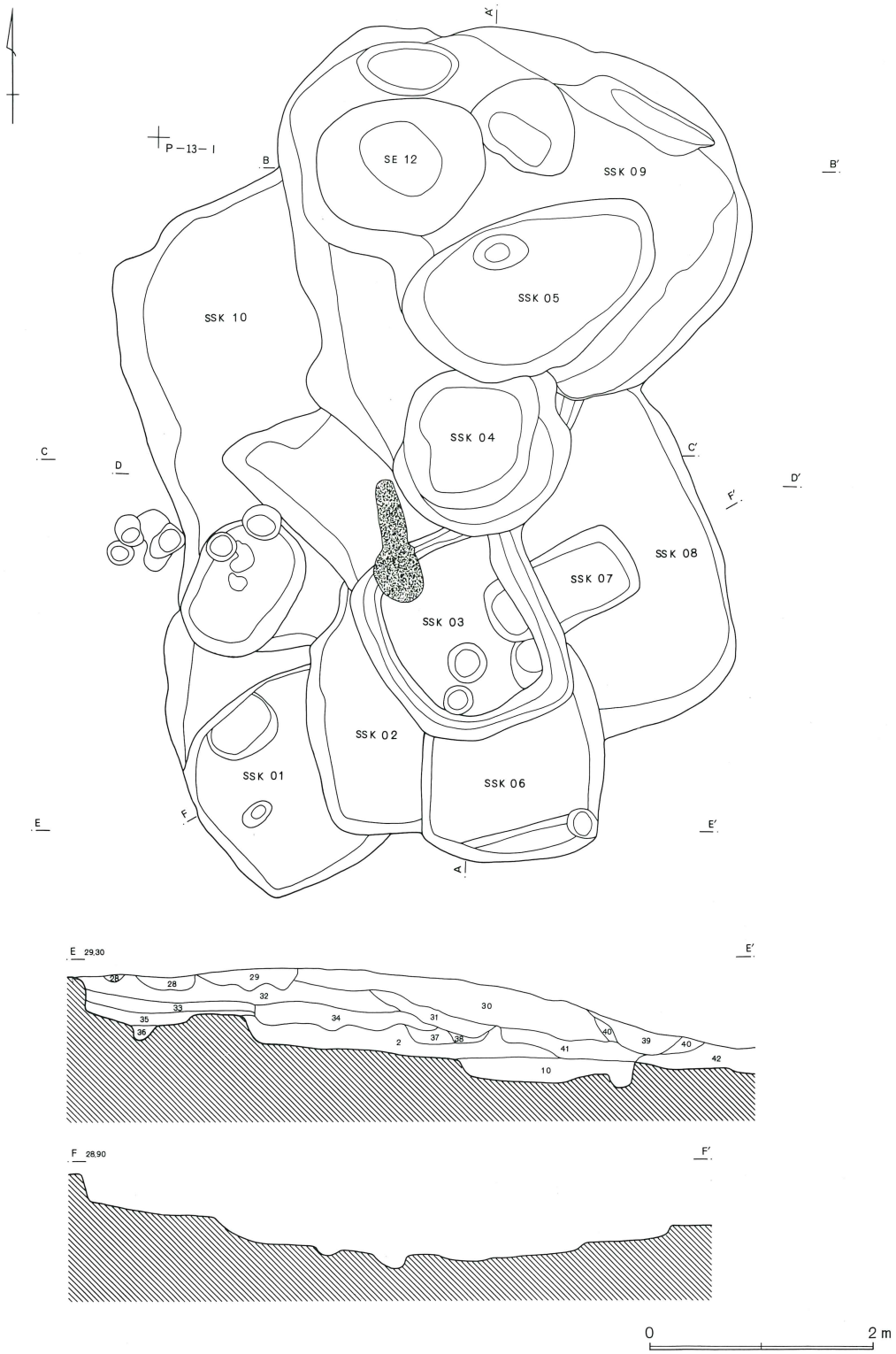
調査区東側の第1斜面に展開する鑄造遺構群である。西側には第8鑄造遺構群、東側の第2斜面上には第10・11・12鑄造遺構群、北側には第13鑄造遺構群、南側に第6・7鑄造遺構群が存在する。これらの第5～13鑄造遺構群は東側の二段からなる第1・2斜面に展開し梵鐘を始めとして小仏像、磬、飾り金具、獸脚等の仏具用品を生産する一大鑄造遺構を形成していたと考えられる。本群はそ
の中でも中心的位置のP-13・14区にあたる。

本群は第1・2・3号溶解炉、第1～10号鑄造土壌、炉体1～5号、第1号鑄込み跡、第1号廃滓で構成されている。

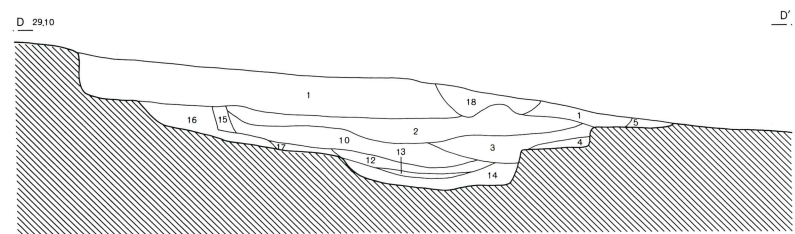
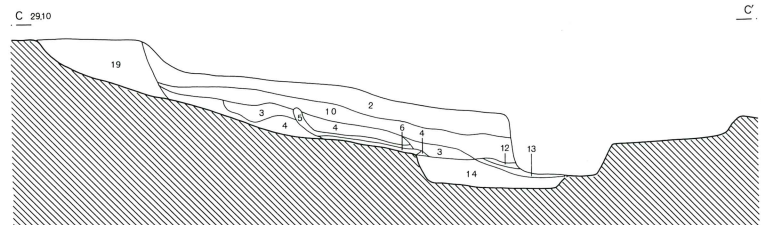
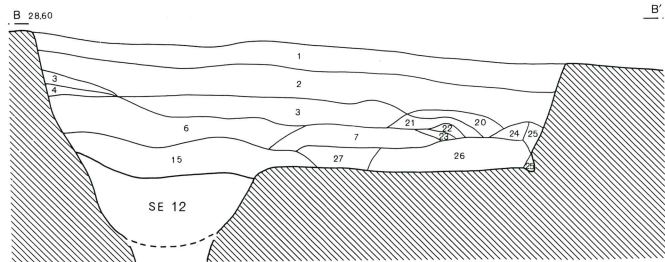
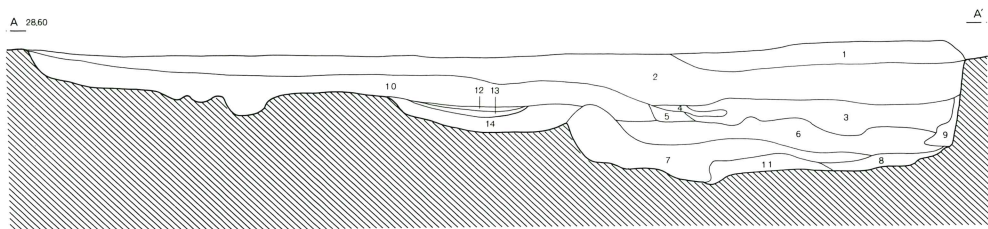
第1～3号溶解炉は確認面あるいは確認面から約10cm程の高い位置で検出した。また、第3号溶解炉に隣接した西寄り第1号鑄込み跡を検出。第1～10号土壌は確認面では形態を把握すること



第222図 第5鑄造遺構群全体図(1)



第223図 第5 铸造遺構群全体図(2)



- | | | | |
|---------|--------------------------|---------|--------------------------------------|
| 1 黒褐色土 | 炭化材を多く含む。焼土粒子、鑄型片を混在。 | 23 黒褐色土 | 焼土粒子を少量含み、やや砂質。 |
| 2 暗褐色土 | 1に比べ、焼土・炭化粒子を含む。しまりやや弱い。 | 24 黒褐色土 | しまりよい。 |
| 3 明褐色土 | 炭化粒子を多く含み、焼土粒子を混在。しまり強い。 | 25 明褐色土 | ローム粒子を多量含み、粘性がある。 |
| 4 黄褐色土 | ローム土を主体。粘性強い。 | 26 暗褐色土 | 炭化物、焼土粒子を少量含む。粘質。 |
| 5 黄褐色土 | ローム・焼土粒子を含み、しまりやや弱い。 | 27 暗褐色土 | 炭化物、焼土粒子を多量含む。粘質。 |
| 6 赤褐色土 | 炭化・焼土粒子を多く含み、しまりやや強い。 | 28 赤褐色土 | 焼土を主体。鉄滓・炭化粒子を混在。しまりもつ。 |
| 7 暗褐色土 | 焼土・炭化粒子を含み、しまりやや強く、粘性もつ。 | 29 褐色土 | 焼土・炭化粒子、鉄滓を含む。 |
| 8 褐色土 | ローム土を多く含み、しまり粘性もつ。 | 30 暗褐色土 | 焼土粒子・ブロック、炭化粒子多く含み、砂粒子混在。 |
| 9 黒褐色土 | ローム・焼土粒子を含み、しまり強い。 | 31 暗褐色土 | 焼土・炭化粒子を含み、30に比べ暗い。 |
| 10 明褐色土 | 焼土・炭化粒子を多く含み、しまりややもつ。 | 32 暗褐色土 | 焼土粒子・ブロック、炭化粒子・ブロックを混在。きめ粗雑。しまりややもつ。 |
| 11 暗褐色土 | 焼土粒子、炭化物を少量含む。砂質。 | 33 赤褐色土 | 焼土を主体。炭化物、焼土ブロックを含む。 |
| 12 黒褐色土 | 炭化・焼土粒子をやや含む。 | 34 褐色土 | 焼土・炭化粒子を多く含む。しまりやや弱い。 |
| 13 黄褐色土 | ローム粒子を主体。 | 35 黄褐色土 | 砂礫を混在。粗雑だがしまり強い。 |
| 14 黒褐色土 | 微量の焼土粒子、小礫を含む。しまり強い。 | 36 黄褐色土 | しまり強く、砂利多い。 |
| 15 明褐色土 | 焼土粒子、小砂利を多く含む。 | 37 赤褐色土 | 砂質で、焼土を主体。 |
| 16 褐色土 | 焼土粒子を含む。 | 38 明褐色土 | 砂礫、焼土を含む。 |
| 17 赤褐色土 | 焼土粒子を多く含む。 | 39 褐色土 | きめ粗雑で焼土若干含む。(現代の溝) |
| 18 褐色土 | 焼土・炭化粒子を含み、砂利を混在。(覆土堆積土) | 40 褐色土 | ややきめ細かい。(現代の溝) |
| 19 黒褐色土 | 小礫を多く、焼土粒子を微量含む。しまり強い。 | 41 暗褐色土 | 若干の焼土粒子を含む。(現代の溝) |
| 20 黒褐色土 | 炭化物、焼土粒子を微量含み、やや粘性がある。 | 42 暗褐色土 | 砂礫を含み、焼土粒子を若干混在。しまり強い。 |
| 21 暗褐色土 | 焼土粒子、炭化物を少量含む。砂質。 | | |
| 22 黒褐色土 | 焼土粒子、炭化物を少量含み、粘性がある。 | | |



第224図 第5 鑄造遺構群全体図(3)

ができなかったが、厚い堆積層を掘り進んで地山の砂利混じりのローム土に達して形態を把握することができた。これらの土壌は連続して重なり合っていた。特に、南側の第1・2・3・6・7・8号土壌の覆土中からは多くの梵鐘鑄型片を出土した。炉体1～5号は溶解炉片の投棄されたままとまりを意味し、主に北側の第4・5・9号土壌底面付近で検出された。

出土遺物は鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鑄型、土器、羽口の鑄造遺物を検出した。特に、鑄型は梵鐘鑄型33395gを計量し、このことは、本遺構群が梵鐘鑄造に関わっていたことが窺える。

遺構

第1号溶解炉（第225図）

東側緩斜面の肩部確認面から第1号溶解炉を検出した。溶解炉(こしき)は『倉吉の鑄物師』によれば上こしき・こしき・下こしき・湯だめ(ル)にわけられている。また、こしき炉の総称を溶解炉としていることから本書でも溶解炉と呼ぶ。第1溶解炉は、滓・炉壁等の鑄造遺物を含む堆積層の上に粘土(第9層)を張り込み作業面を形成し、第3・8層の間層をもって第1層の上に溶解炉を自立させたものと考えられる。確認面で炉壁片が集中し外側にリング状の焼土を検出した。断面観察の第2層がこの部分にあたる。炉壁は原位置を留めているものと考えられ、いずれも炉底部の破片であり、ル(銚)にあたる部分と考えられる。炉の規模は焼土の径が58cm、炉壁の厚さが5cmである。注意される点は炉底部中央の炉壁が残存していないことである。また、固定式と考えられる。炉壁は内面の湯滓が厚く1.1cm程付着し、表面には0.5cm前後の気泡が見られ、やや鈍い黒色の滓に径1.1～0.5cmの鉄粒が多く付着している。湯滓に接する中間粘土は2cm程の厚さで還元され青灰色である。裏面は赤色の粘土が1cmほどある。

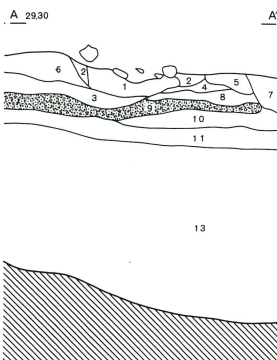
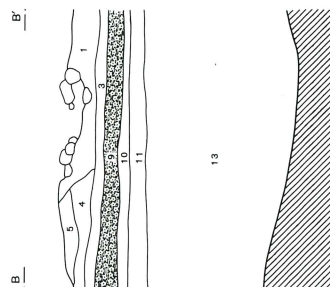
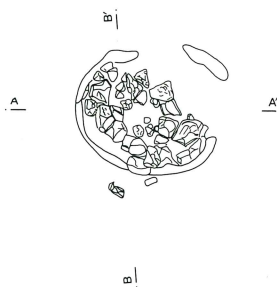
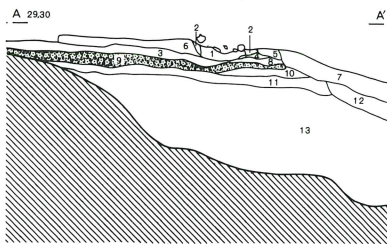
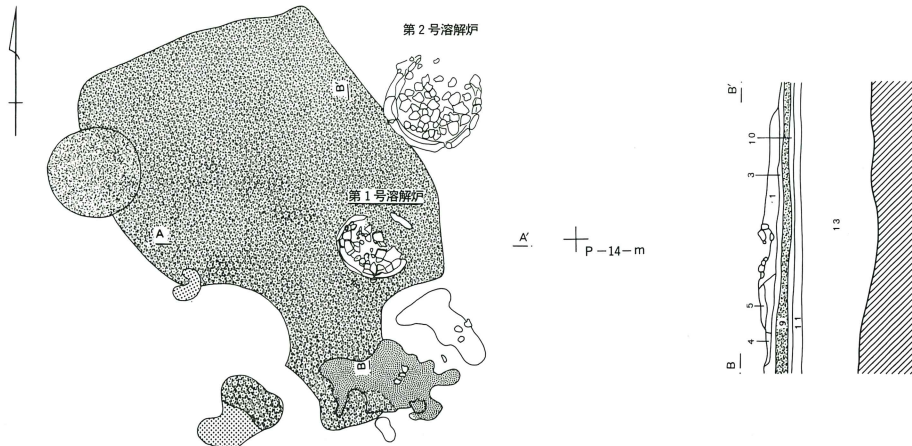
第2号溶解炉（第226図）

第1号溶解炉の北側30cmの位置に検出した。第2号溶解炉は第1号溶解炉を構築した際に張り込んだと考えられる粘土面の一部を壊して構築されている。炉底部のみの検出であるが基設されていた位置から動いていないと考えられる。断面観察によると6～8・10～14層の堆積層を切り込んで第15層を埋め戻し第1・3・9層で埋めて炉底部を支えていると考えられる。炉はまず第1面としたものが確認段階の状態である。炉形はほぼ円形に回る厚さ5～7cmの炉壁で、内面は溶解物の湯滓が厚さ2.2cm付着している。炉内には炉壁の小片が数多く検出された。これらの炉壁片を取り除いてみると、大きな礫石を5個と小礫を同じ高さから検出した。いずれも、整然と敷き詰められ、石と石の間は粘土を充填しており、炉内底部を形成しているものと考えられる。溶解物の付着は認められず充填された粘土も石も被熱された様子はない。炉の規模は外径で77cmである。

遺物の特徴は鑄型片を殆ど含まず、炉壁2の炉底部分が多い。炉の湯滓面には径0.3～0.5cm程の円形をした気泡をもつ。また、銅滓1を数点検出した。このほかの特徴として滓4が数点認められた。

第3号炉（第227図）

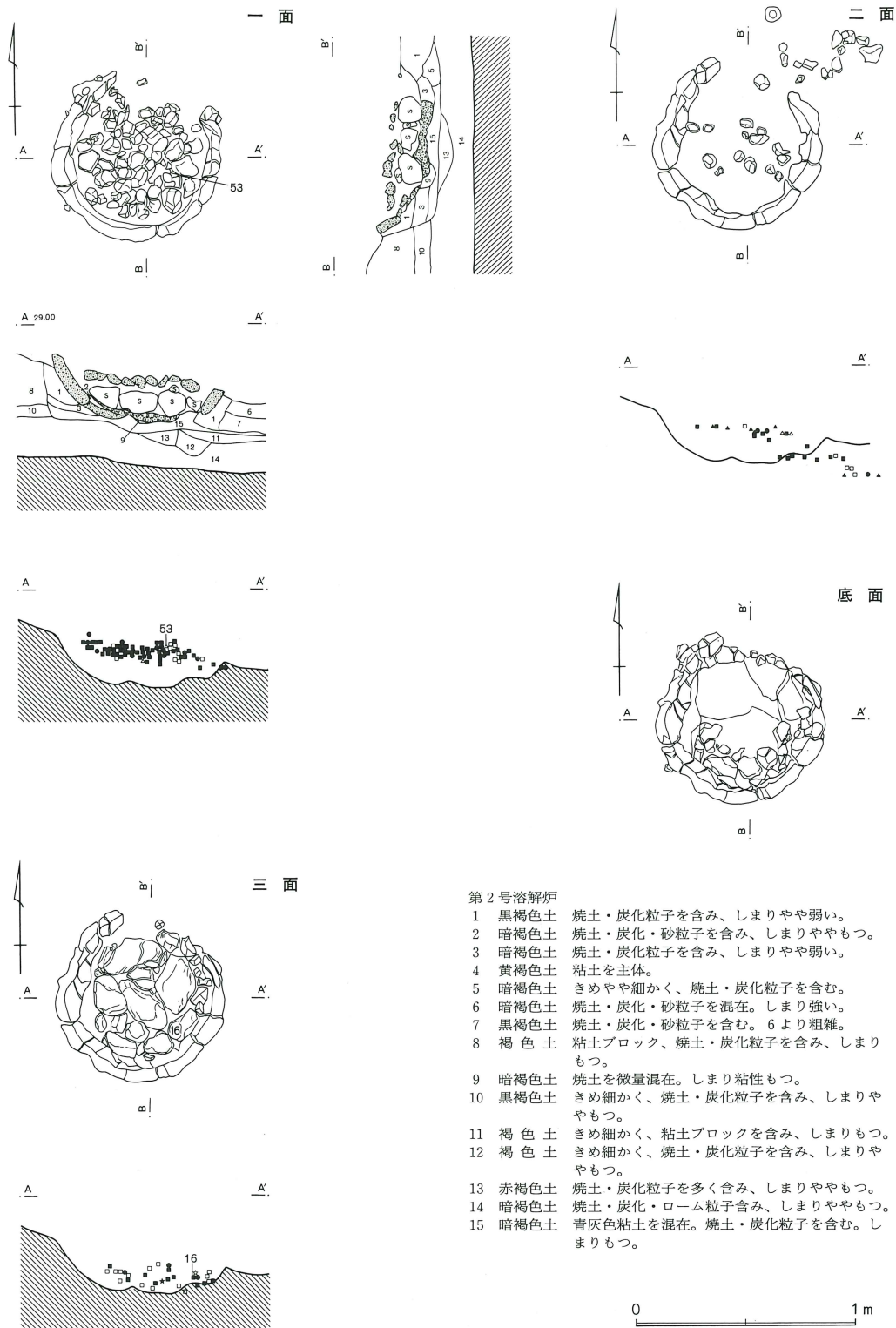
第5群の中央やや南よりで検出された。近接して梵鐘鑄型をまとめて出土した第1号鑄込み跡が存在する。本炉は第1・2号溶解炉と異なり炉壁を伴わず、径20cm前後の礫が47cm程の範囲で据



第1号溶解炉

- | | |
|---------|-----------------------------|
| 1 褐色土 | 焼土・炭化粒子を含む。 |
| 2 暗褐色土 | 焼土・炭化粒子を多量含み、粘土粒子を少量混入。 |
| 3 暗褐色土 | 焼土・炭化粒子、石、焼土塊を含む。 |
| 4 暗褐色土 | 焼土・炭化粒子を含み、しまりもつ。 |
| 5 黒褐色土 | 焼土・炭化粒子微量含む。 |
| 6 暗褐色土 | 焼土・炭化粒子を含み、砂粒、小石を混在。 |
| 7 黒褐色土 | 焼土・炭化粒子を含む。しまり弱く、ガラガラ。 |
| 8 褐色土 | 焼土塊、鋳型片を混在。 |
| 9 淡灰色土 | 粘土をブロック状に含む。焼土・炭化粒子を混在。 |
| 10 暗褐色土 | 粘土ブロックを混在。焼土・炭化粒子を含む。 |
| 11 暗褐色土 | 焼土・炭化粒子を含み、小石を若干混入。しまりややもつ。 |
| 12 暗褐色土 | 焼土・炭化粒子を多く含む。しまりもつ。(斜面堆積土) |
| 13 暗褐色土 | 砂質土を主体。炭化・焼土粒子を混在。 |

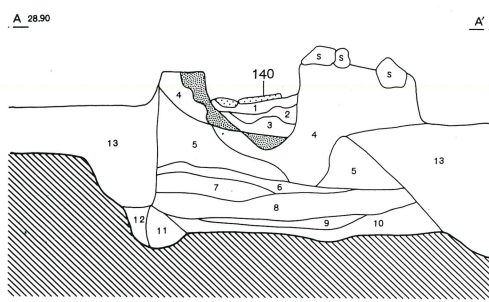
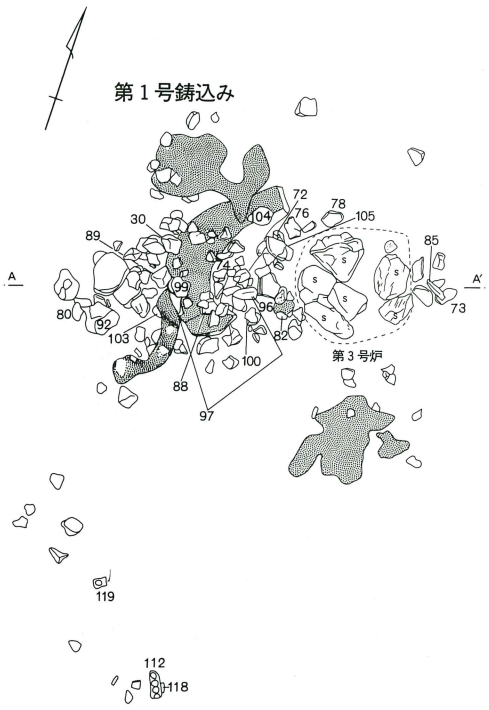
第225図 第5群第1号溶解炉跡



第2号溶解炉

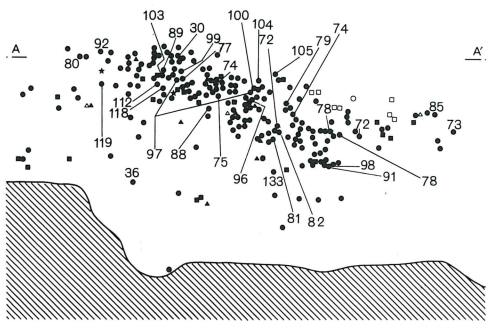
- | | | |
|----|------|----------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | 焼土・炭化粒子を含み、しまりやや弱い。 |
| 2 | 暗褐色土 | 焼土・炭化・砂粒子を含み、しまりややもつ。 |
| 3 | 暗褐色土 | 焼土・炭化粒子を含み、しまりやや弱い。 |
| 4 | 黄褐色土 | 粘土を主体。 |
| 5 | 暗褐色土 | きめやや細かく、焼土・炭化粒子を含む。 |
| 6 | 暗褐色土 | 焼土・炭化・砂粒子を混在。しまり強い。 |
| 7 | 黒褐色土 | 焼土・炭化・砂粒子を含む。6より粗雑。 |
| 8 | 褐色土 | 粘土ブロック、焼土・炭化粒子を含み、しまりもつ。 |
| 9 | 暗褐色土 | 焼土を微量混在。しまり粘性もつ。 |
| 10 | 黒褐色土 | きめ細かく、焼土・炭化粒子を含み、しまりややもつ。 |
| 11 | 褐色土 | きめ細かく、粘土ブロックを含み、しまりもつ。 |
| 12 | 褐色土 | きめ細かく、焼土・炭化粒子を含み、しまりややもつ。 |
| 13 | 赤褐色土 | 焼土・炭化粒子を多く含み、しまりややもつ。 |
| 14 | 暗褐色土 | 焼土・炭化・ローム粒子含み、しまりややもつ。 |
| 15 | 暗褐色土 | 青灰色粘土を混在。焼土・炭化粒子を含む。しまりもつ。 |

第226図 第5群第2号溶解炉跡



第3号炉・第1号鑄込み

- 1 褐色土 焼土・炭化粒子も含まない砂質土。
- 2 赤褐色土 焼土塊、炭化粒子を含む。しまり弱い。
- 3 赤褐色土 焼土・炭化粒子を多く含む。しまりやや弱い。
- 4 褐色土 炭化物多く、焼土・炭化粒子を混在。小砂利を混入。
- 5 褐色土 4に比べ、明るい。炭化・焼土粒子、小石を混在。
- 6 黄褐色土 粘土を主体として貼っている。
- 7 暗褐色土 炭化粒子を多量、粘土ブロックを少量含む。焼土粒子、小礫を混入。
- 8 暗褐色土 焼土・炭化粒子、礫を混在。しまりややもつ。
- 9 赤褐色土 焼土ブロック、炭化物の堆積層。
- 10 褐色土 焼土・炭化粒子を少量含み、しまりもつ。
- 11 褐色土 径5mm前後の焼土粒子、1cmほどの炭化粒子を含む。
- 12 茶褐色土 径1~2mmの焼土・炭化粒子を含む。
- 13 暗褐色土 焼土・炭化粒子、滓、壁などを含む。



第227図 第5群第3号炉・第1号鑄込み跡

えられた状態でまとめて検出し、炉台として考えられる。

第1号鑄込み跡（第227図）

第3号炉の西側に第244図140の不明鑄型を検出した。この鑄型は掘り込みをもつ地焼炉のような遺構内の第1層の砂質土上面から検出された。覆土第2・3層は焼土・炭化粒子を多く含む赤褐色土である。本遺構の上面からは梵鐘鑄型を多く検出し、第1・2・3号鑄造土壙上面から検出された梵鐘鑄型と同一個体と考えられる。

第1号鑄造土壙（第223・224図）

本遺構は南側にあたり、第2・6号鑄造土壙よりも新しいと考えられる。形態は方形であり東側は第2号鑄造土壙と重複関係にある。規模は南北1.80m、東西の長さは正確なところが不明である。しかし第2号鑄造土壙の上に堆積した覆土を伴い、また、同一レベルから出土している梵鐘鑄型の分布範囲から推定すると南北の長さとはほぼ同一と考えられる。深さは30cm程で底面はわずかに東に向けて傾斜し径28cmのピットが存在する。

第2号鑄造土壙（第223・224図）

本遺構は南側にあたり、第1と第6号鑄造土壙の中間に位置する。北東側には第3号土壙と重複関係にある。形態は長方形と推定される。規模は南北1.80m、東西の長さは正確なところが不明である。底面は平坦で第1号鑄造土壙の底面の高さからさらに25cm深く掘り下げられていた。

遺物は銅滓・銅粒を検出。また、緑青を吹く炉壁4も検出した。白色滓や炉3を多く検出し、滓4'も他に比べ多く計量した。特に滓4'は径1cm程の白色の石をかみ径3～4cmほどで20～30gの重さである。

第3号鑄造土壙（第223・224図）

本遺構は第2・6号鑄造土壙の北側壁を壊して造られ新しいと考えられる。形態は長方形であり底面は平坦である。底面の中央やや南寄りにピットを検出した。壁には幅20cm前後、深さ10cmの周溝を全周させる。東寄りには第7号鑄造土壙の浅い掘り込みが重複して見られる。新旧関係は不明である。規模は南北1.85m、東西1.54m、深さは第2号鑄造土壙よりさらに10cm深い。北側は炭化材集中区で炭化材が覆っている。

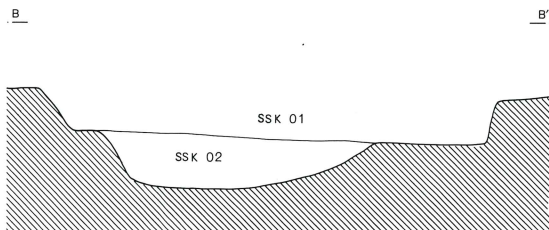
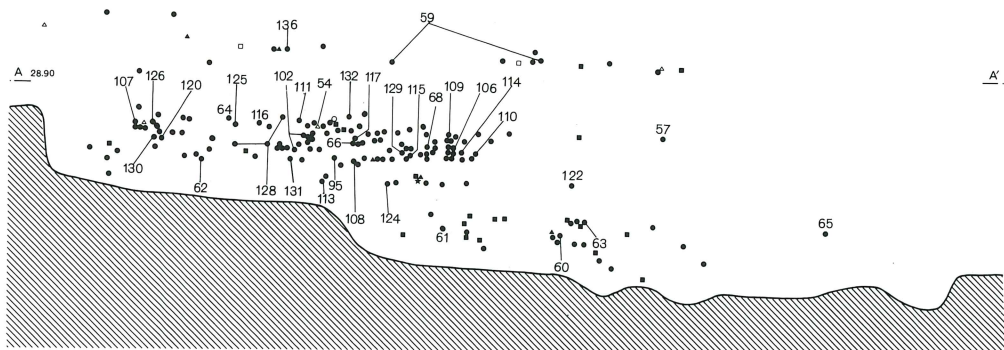
第4号鑄造土壙（第223・224図）

本遺構は鑄造土壙群のほぼ中央にあたり、第3・5・8号鑄造土壙よりも古いと考えられる。形態は円形に近く、規模は径1.50m、深さは第8号鑄造土壙の底面よりもさらに35cm程低く、底面の状態は平坦であるが周辺部がやや高く皿状をしている。断面観察によると覆土は第14層の微量の焼土粒子、小礫を含みしまりの強い黒褐色土が堆積している。上層には貼床と考えられるローム粒を主体とした黄褐色土が厚さ2cm程張り込まれていた。また、南側に検出された炉体4号の残片を検出した。

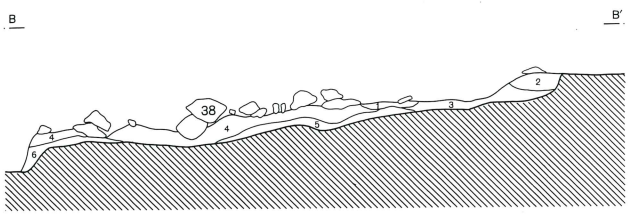
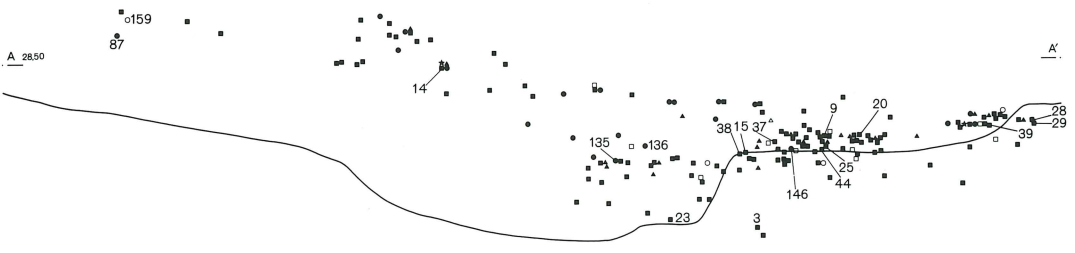
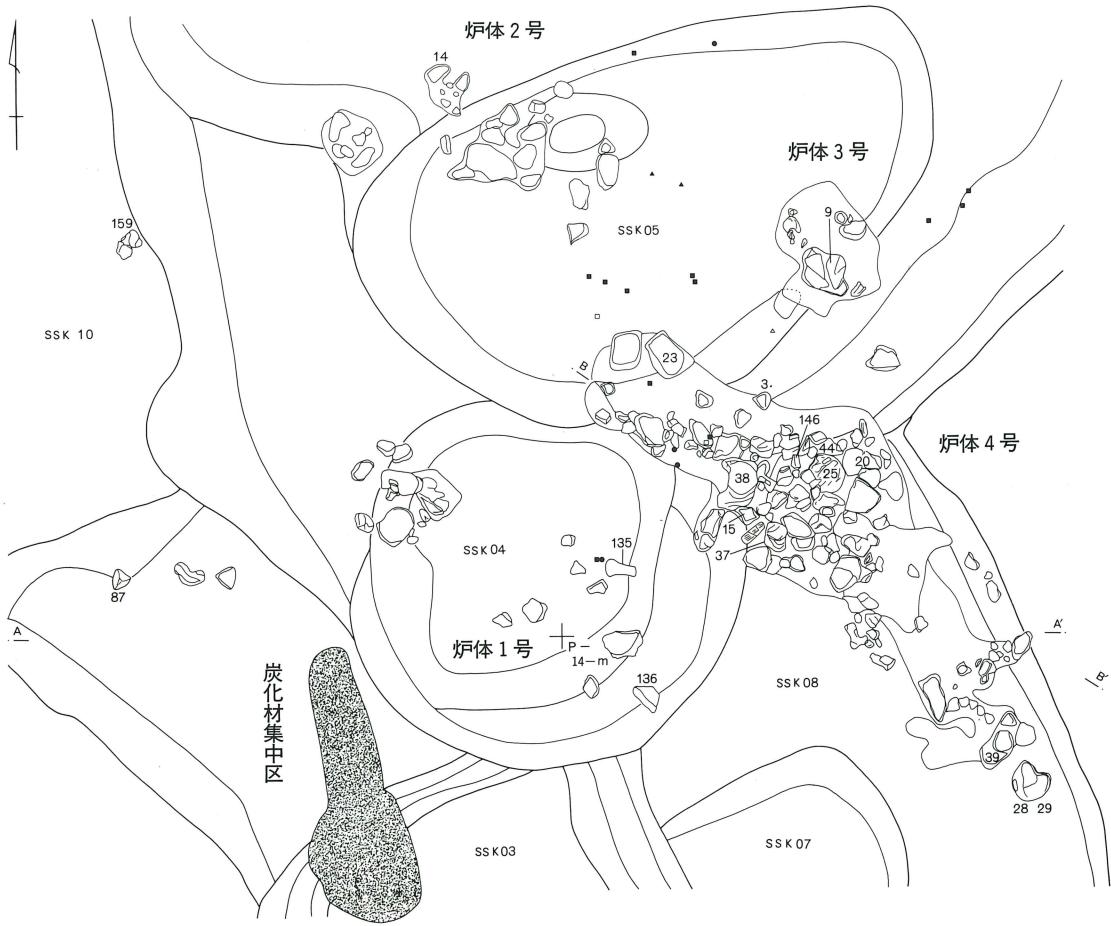
第5号鑄造土壙（第223・224図）

本遺構は北側にあたり、第9号鑄造土壙よりも新しいと考えられる。形態は楕円形であり北側に第9号、南側に第4号鑄造土壙と重複関係にある。規模は南北1.41m、東西2.34m、深さは確認面から90cmを測り土壙群内で最も深い。覆土上層には炉体3号が検出されている。

遺物は大型滓を含み鉄塊も大きい。滓1には黄白色のものを数点検出した。



第228图 第5群第1・2号土壤遺物分布図



- 炉体 4号
- 1 赤褐色土 焼土を主体。
 - 2 黒褐色土 焼土粒子、炭化物を少量含み、砂質。
 - 3 黒褐色土 焼土粒子、炭化物を少量含み、ややハード。
 - 4 黒褐色土 焼砂を主体。焼土粒子、炭化物多量。砂質。
 - 5 黒褐色土 炭化物を多量含む。砂質。
 - 6 黒褐色土 暗茶褐色ローム・焼土粒子を少量含む。



第229図 第5群炉体1～4号遺物分布図

第6号鑄造土壙（第223・224図）

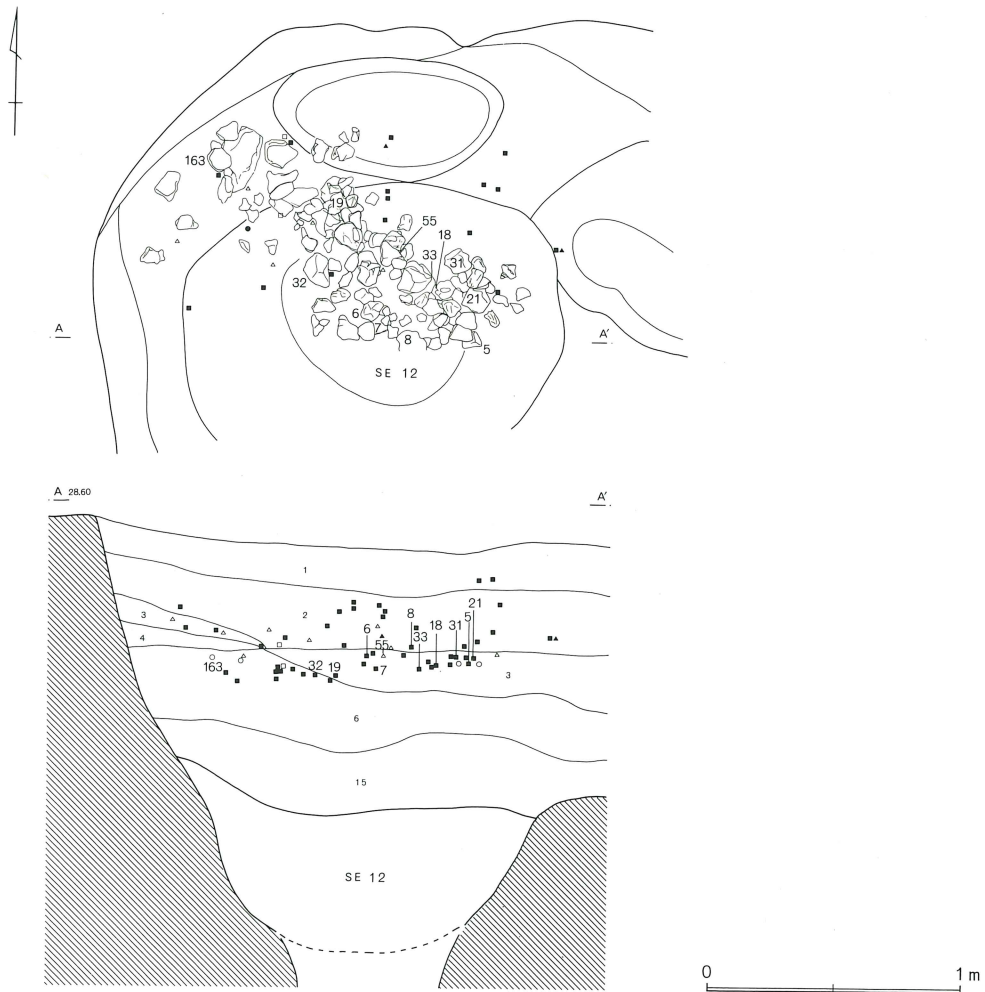
本遺構は南側にあたり、第2・3・8号鑄造土壙と重複関係にある。形態は長方形であり北側は第3号鑄造土壙と重複し正確な規模は不明であるが、推定される規模は南北2.00m、東西1.63m、深さ35cmである。底面は小砂利混じりのローム土であり平坦で徐々に北に向けて傾斜する。底面の高低差は最大で10cmである。

第7号鑄造土壙（第223・224図）

本遺構は南東側にあたり、第3・8号鑄造土壙と重複関係にある。形態は長方形であり東西方向に主軸をもつ。西側は第3号鑄造土壙に壊されている。東側は第8号鑄造土壙と重なり新しいと考えられる。規模は本群内で最も小さく東西1.40m、南北0.68m、深さは5～10cm程である。

第8号鑄造土壙（第223・224図）

本遺構は南東側にあたり、北側から西側にかけて第3～7号鑄造土壙と重複関係にある。形態は



第230図 第5群炉体5号遺物分布図

やや大型の長方形であると推定される。規模は南北2.30m、東西の長さは正確なところが不明であるが残存長は1.63m、深さは13cmである。北よりの覆土上層中には炉体4号を検出している。

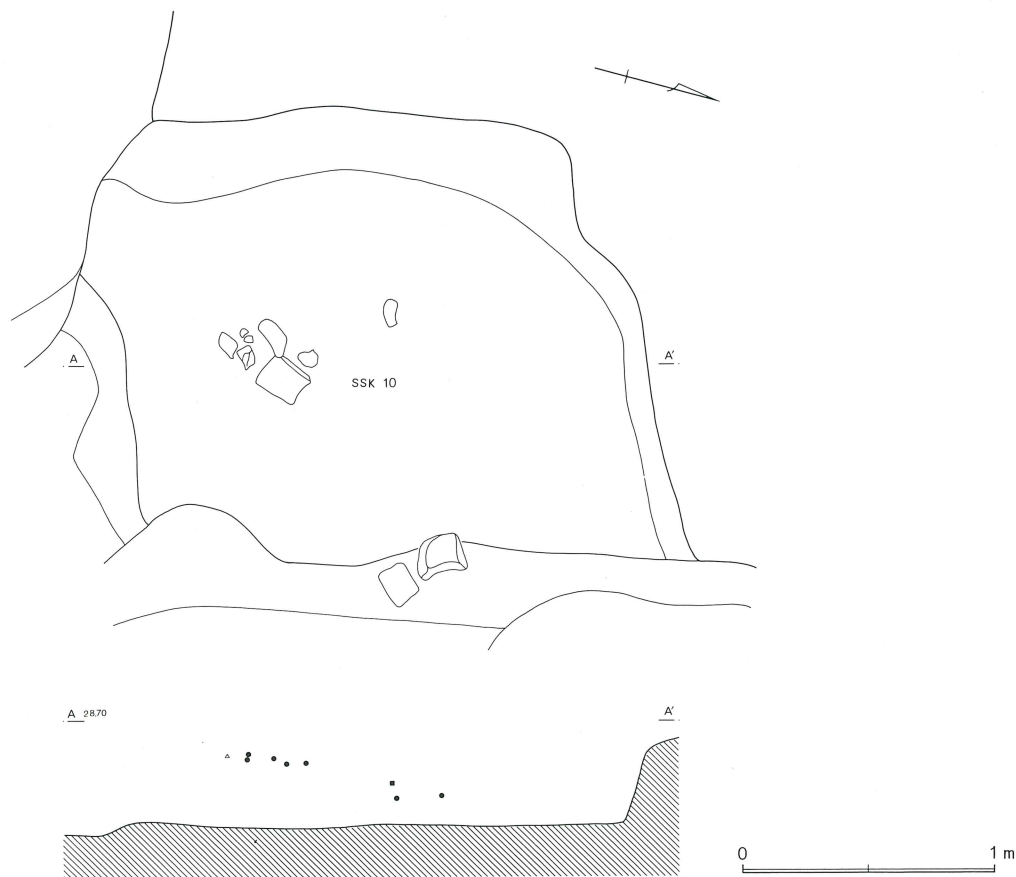
第9号鑄造土壙（第223・224図）

本遺構は北側にあたり、第5号鑄造土壙と重複関係にあり、また、本遺構より古い第12号井戸跡を確認した。形態は大型の楕円形と推定される。規模は南北4.06m、東西4.40m、深さ1m以上である。覆土の堆積土中からは多量の炉壁や羽口、鉄滓等を出土した。

遺物は湯滓面がさまざまな表状をもつ炉1を検出した。中でも、湯滓面が黒色でタール状のものや灰褐色で細かな気泡をもつものなどが出土している。滓は、滓1が大きなもので径6cm×100g、径5cm×50g、小さいものは径3cm×15g程である。大型滓は径10cm前後×200g以上である。

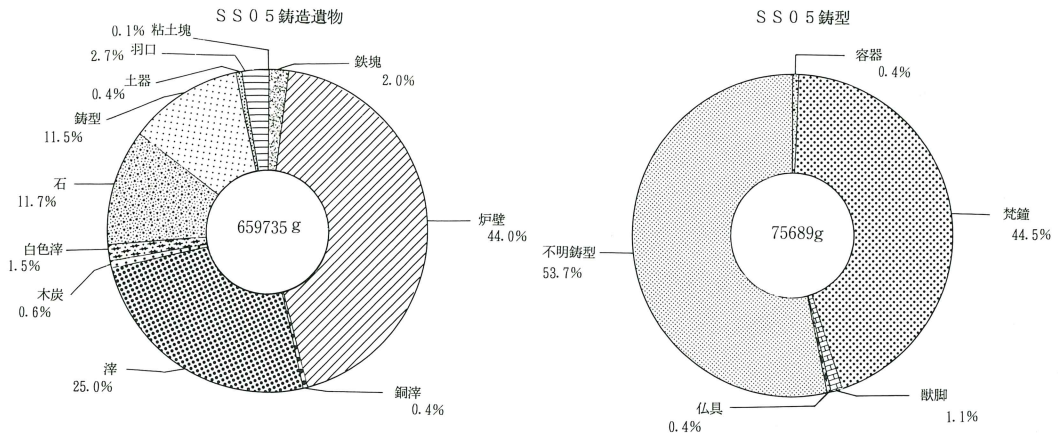
第10号鑄造土壙（第231図）

本遺構は北西側にあたる。形態は方形であり東側は第9号鑄造土壙と重複関係にある。規模は南北2.30m、東西1.82mである。掘り込みの深さは25cm程であり、底面は小砂利を混在するローム土を利用し平坦である。



第231図 第5群第10号鑄造土壙遺物分布図

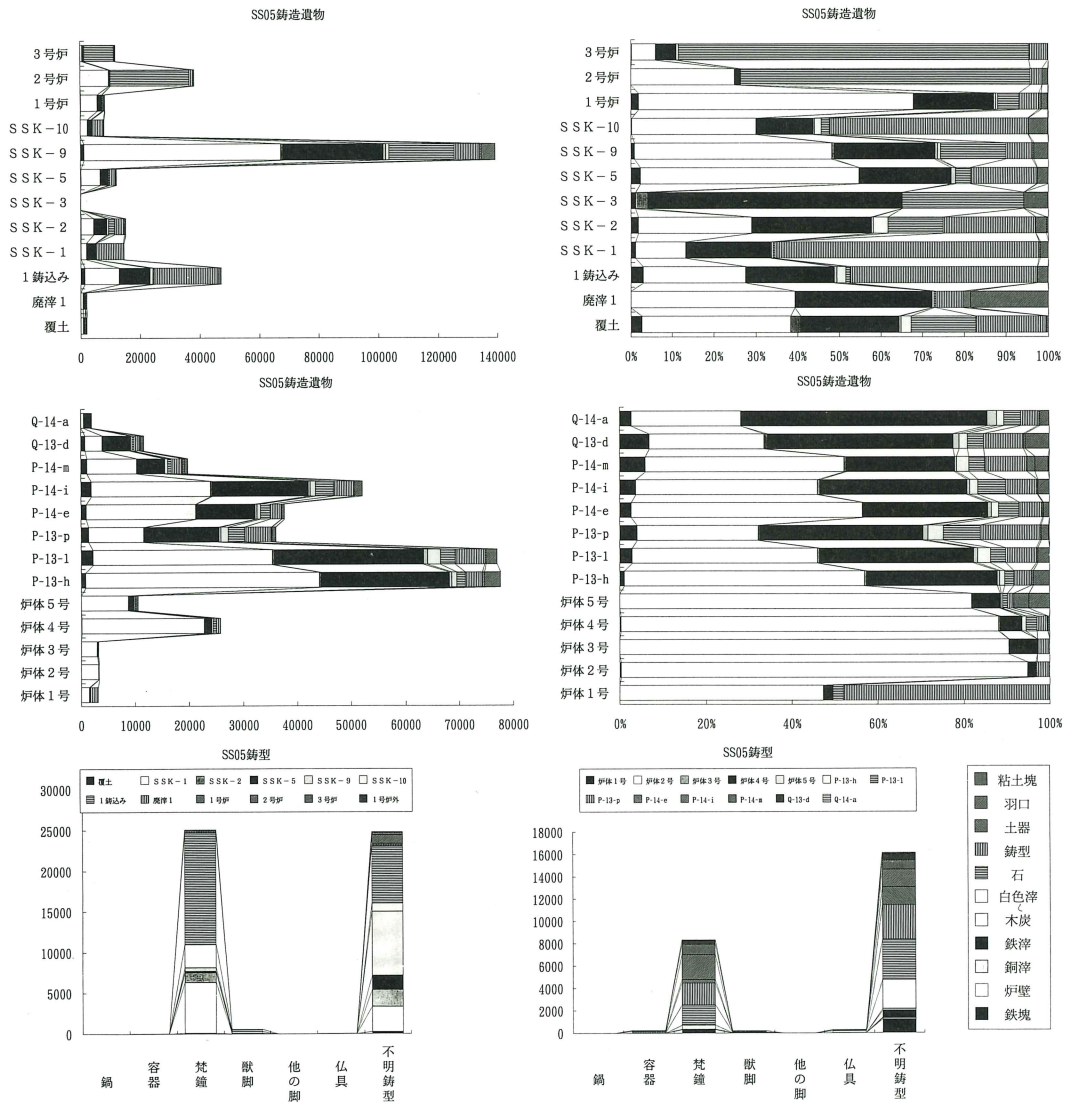
第21表 第5 铸造遺構群遺物計量表(1)



小番号	鉄塊	炉壁	鋼滓	鉄滓	木炭	白色滓	石	鑄型	土器	羽口	粘土塊
覆土	56	747	51	496	10	50	326	350	2	10	0
塵滓1	1	820	0	685	1	10	135	40	385	0	0
1 鋳込み	1393	11532	112	9925	304	971	487	21084	30	1155	45
SSK-1	169	1773	3	2948	37	50	64	9266	42	278	0
SSK-2	275	4124	15	4365	70	535	2015	3360	1	380	70
SSK-3	2	0	5	105	0	0	50	0	0	0	10
SSK-5	280	6335	10	2665	130	0	440	1910	15	310	0
SSK-9	1234	65996	813	33617	845	1010	21970	8609	516	4760	0
SSK-10	17	2404	15	1097	25	130	156	3830	15	365	11
1号炉	157	5507	21	1589	40	41	422	393	46	118	22
2号炉	12	9541	32	493	16	24	26621	1061	0	525	34
3号炉	30	673	15	574	0	68	9916	525	0	15	0
炉体1号	0	1480	0	71	0	0	75	1508	0	0	0
炉体2号	12	3164	0	65	0	0	9	98	0	0	0
炉体3号	0	2883	0	212	0	0	0	90	0	0	0
炉体4号	84	22646	89	1301	5	249	664	624	25	100	6
炉体5号	0	8668	0	707	28	33	123	151	377	507	0
P-13-h	824	43369	330	23654	457	919	1612	3139	420	2921	0
P-13-1	2210	33190	355	27672	740	2340	2776	5469	257	2059	6
P-13-p	1445	10183	112	13765	406	1276	3084	5010	119	607	83
P-14-e	1006	20248	91	10919	313	633	1805	2079	75	512	0
P-14-i	1937	22039	918	17857	347	986	3418	3840	75	1376	0
P-14-m	1169	9210	93	5040	89	563	726	1984	371	603	55
Q-13-d	802	3144	96	5077	163	220	450	1094	48	655	0
Q-14-a	55	521	0	1177	46	35	81	80	10	45	0
合計	13170	290197	2576	166076	4072	10143	77300	75689	2484	17686	342

小番号	鍋	容器	燂鐘	獸脚	他の脚	仏具	不明鑄型	日用品小計	仏具小計	鑄型合計
覆土	0	0	110	0	0	0	240	0	110	350
SSK-1	0	0	6193	0	0	0	3073	0	6193	9266
SSK-2	0	0	1200	80	0	0	2080	0	1280	3360
SSK-5	0	0	175	0	0	0	1735	0	175	1910
SSK-9	0	38	440	211	0	29	7891	0	718	8609
SSK-10	0	0	2843	0	0	0	987	0	2843	3830
1 鋳込み	0	0	13715	300	0	0	7069	0	14015	21084
塵滓1	0	0	0	0	0	0	135	0	0	135
1号炉	0	0	116	0	0	0	142	0	116	258
2号炉	0	0	0	0	0	0	1061	0	0	1061
3号炉	0	0	243	0	0	0	282	0	243	525
1号炉外	0	0	27	0	0	0	108	0	27	135
炉体1号	0	0	292	0	0	0	1216	0	292	1508
炉体2号	0	0	6	0	0	0	92	0	6	98
炉体3号	0	0	0	0	0	0	90	0	0	90
炉体4号	0	0	32	16	0	0	576	0	48	624
炉体5号	0	0	0	0	0	0	151	0	0	151
P-13-h	0	0	365	0	0	174	2600	0	539	3139
P-13-1	0	0	1831	19	0	0	3619	0	1850	5469
P-13-p	0	0	1930	0	0	0	3080	0	1930	5010
P-14-e	0	143	304	8	0	0	1624	0	455	2079
P-14-i	0	5	2236	42	0	0	1557	0	2283	3840
P-14-m	0	67	934	115	0	65	803	0	1181	1984
Q-13-d	0	33	393	0	0	35	633	0	461	1094
Q-14-a	0	0	10	0	0	0	70	0	10	80
合計	0	286	33395	791	0	303	40914	0	34775	75689

第22表 第5 铸造遺構群遺物計量表(2)



遺物

铸造遺物は全て分類し計量を行った。その結果、鉄塊13170g、炉壁290197g、銅滓2576g、鉄滓166076g、木炭4072g、白色滓10143g、石77300g、鑄型75689g、土器2484g、羽口17686g、粘土塊342gを計量した。遺物は各遺構覆土および上層を厚く覆っていた堆積層内から検出したグリッド出土遺物の合計である。遺物は計量比から見ると遺構内とグリッド出土遺物がほぼ半々のものどどちらか一方が極端に多いものとがあることが窺える。鉄塊・鉄滓・白色滓・木炭の溶解時にできる廃滓遺物はグリッド出土の方が多い。このことは、堆積層が自然の堆積物で構成されたのではなく铸造遺物の組成から推定すると溶解炉の廃滓場として利用されていたものと考えられる。また、遺構内

からは鑄型が多く本遺構が鑄込み土壌としての性格を持っていたことが推測できる。さらに、注意されることは炉壁と羽口の溶解遺物がどちらも半々の同量であった。特に、炉底部を検出した第1・2号溶解炉や土壌内からまとまって検出した炉体1～5号の検出が梵鐘鑄造時の溶解炉として関連性があるものと考えられる。

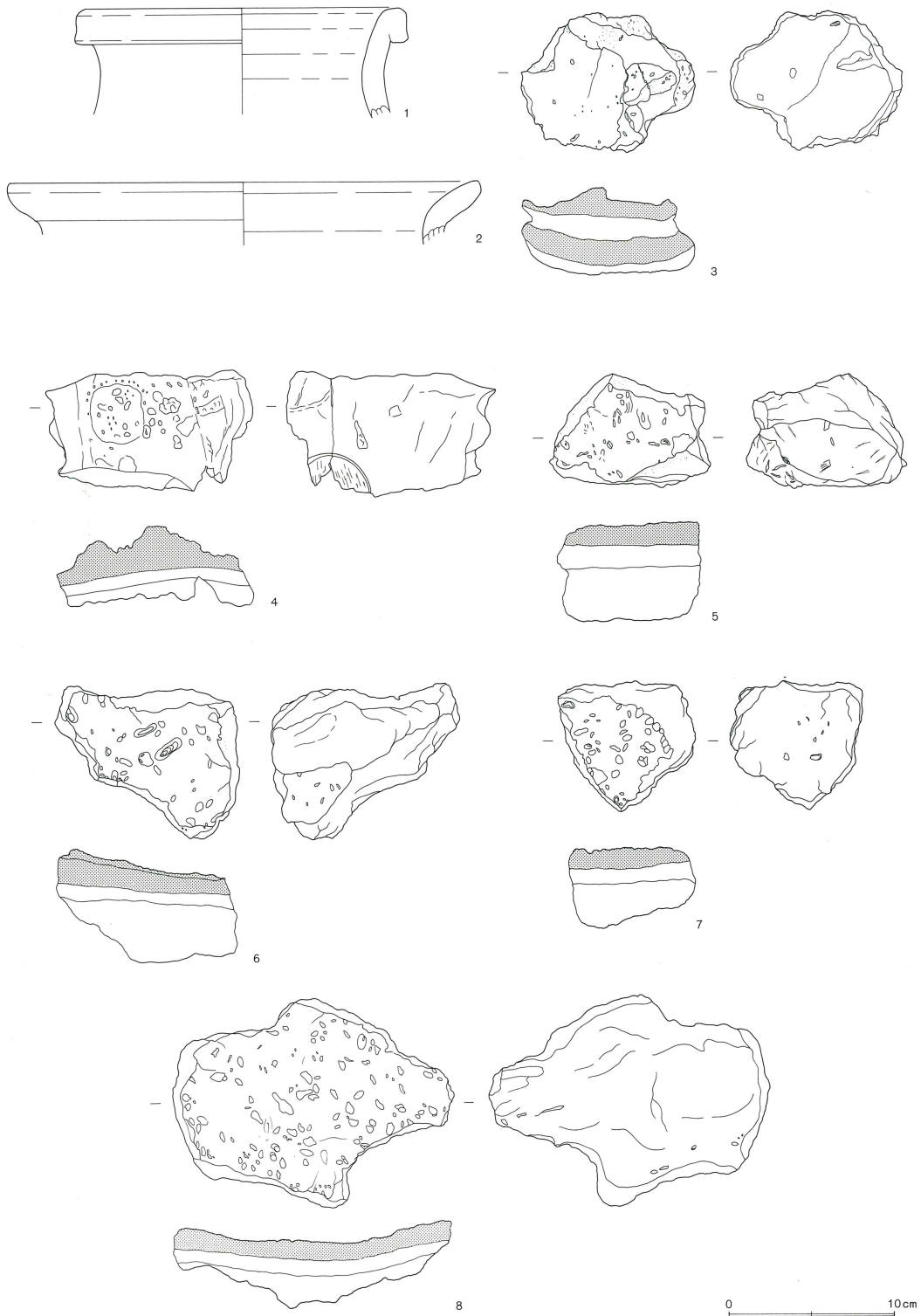
鑄型種類は、容器286g、梵鐘33395g、獣脚791g、仏具303g、不明40914gを計量し、圧倒的に梵鐘鑄型を多く検出した。また、グリッドから幅3.1cmの木炭を検出した。溶解炉内に使用する木炭の大きさが推定される。

土器は、1が常滑の広口壺である。第9号鑄造土壌出土。2が渥美の甕である。P-14-m-1出土であるが、第1号井戸跡出土の渥美甕破片と同一個体の可能性を持つ。

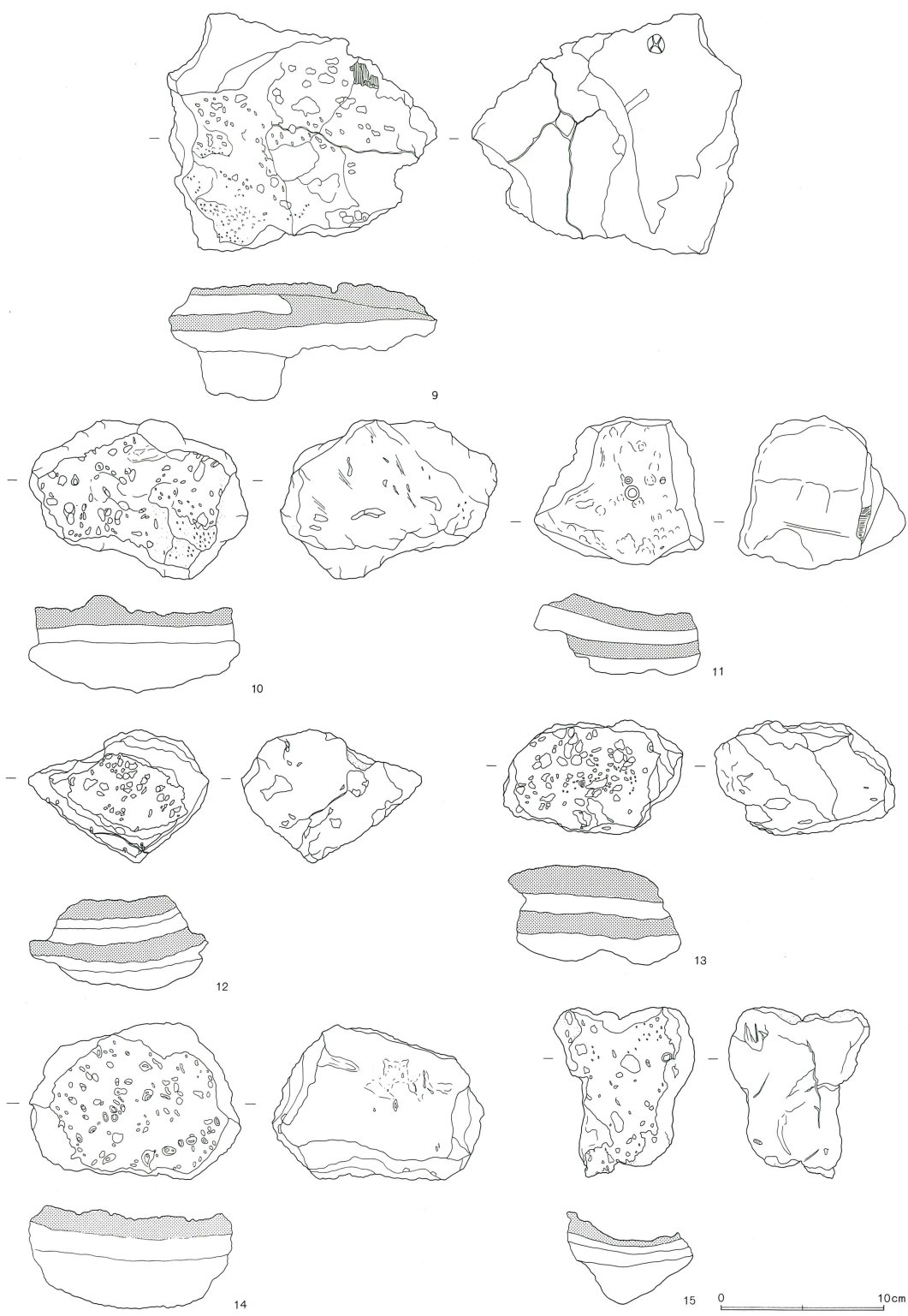
炉壁は、3～48でいずれも溶解炉の炉壁破片である。素材は粘土を基にして砂粒子、小石、滓片、鑄型片、焼土塊、黒鉛化木炭等周辺の混在物を多く取り込んで混ぜている。3は溶解物の湯滓層を2面もつ。表面の溶解物は厚く付着し流動質で上下方向の湯滓の流れが認められる。部分的に径0.5～1.0cmの小さな気泡痕をもつ。色調は紫紅色。裏面の粘土面は白色針状物質、鉄滓チップ、焼土塊、砂粒子を含む。また、スサを混在させ還元された青灰色の粘土面に赤褐色の粘土を残している。4～14・16・18・22は、表面に発泡した湯滓が付着し0.1～1.5cmの円あるいは楕円の気泡痕（ガスの抜け穴がクレター状に残る）をもつ溶解炉の炉壁片である。

9は、側面が破面に囲まれた不整形の炉壁である。内面の下半部は、濃い緑色にガラス化した溶解物が広がり、上半部にいくにつれ発泡した溶解層は薄くなる。下面から見ると、溶解面は2枚確認できる。内側の溶解面は曲率が弱く、長さ8cmで2mm膨らむ程度である。外側の溶解面は長さ8cmで膨らみは6mmと曲率が高い。上端で見ると、内面の貼り壁よりも外側の溶解面の方が熱変化が強く、厚さ1cm程の発泡層を形成している。色調は、内側の溶解層は灰色。外側の溶解層は灰褐色をへて灰白色。更に外側は褐色と変化している。1枚目、2枚目とも、褐色の鉄錆や粒状の酸化物が点在する。内壁下端には、長さ1.6cm以上の黒鉛化木炭をかみ込んでおり、他に3cm大の木炭痕も残る。外側の溶解面は上端部で内側よりも溶解層が強く、かつ、雲母状の光沢のある結晶が面的に生成している。胎土の混和物は、内壁側で、若干のスサと5mm大の石粒が見られる。外側の壁は、内側と外側でやや混和物が異なり、内側では8mm大の細かいもみがらと、5mm前後の短いスサが少量含まれている。外側は、細かいガラス質の滓や黒鉛化木炭片、あるいは、7mm大のもみがらが点在し、長さ1.4cm程の薄手のスサが多量に混和されている。裏面側部には径1.4cmで、放射割れを生じる鉄酸化物が認められる。胎土自体は、両層とも灰白色の粒子を含む砂質なものである。輪積み単位は、厚さ4.6cm程である。本資料は溶解炉の内、ガラス質の厚くなる炉体下半部の炉壁と考えられる。この資料部分から下側には黒鉛化木炭が見られるという点で還元度が高い空間ということを窺わせる。

16は、側面全面が破面の炉床破片である。表面の遺存状況はよくないが、本来の内面は濃い緑にガラス化し、5mm前後のガスの抜け穴が一面にあばた状になっている。又、粒状にもり上がり磁着反応をもつ赤褐色の酸化物粒子が表面と側面の破面に点在している。その最大のもは2cm前後。又、裏面に近い灰白色から灰色の炉壁の間に緑青を吹いた青銅の貫入が幅広く見られるのも特色で



第232図 第5 鑄造遺構群出土遺物(1)



第233図 第5 鑄造遺構群出土遺物(2)

ある。その一部は長軸端部の裏面に厚さ1.5mm程の塊状に露出している。また、裏面の片側全体にも細かい網目状に銅が幅広く貫入している。破面方向から見ると、ガラス質の発泡層は、内側3cm程の厚みで、粒状の赤錆の吹いた酸化物粒子がある。これは銑鉄の溶解炉を思わせるが、更に外側の3～4cmの発泡したガラス質層より奥側は鉄錆は殆どなく、青銅の貫入層が目立つ。このことは、最初に青銅を溶解し、後に内張りをして、銑鉄の溶解に用いた可能性を窺わせる。内側の炉壁は、0.7cm大の木炭片や3mm程の赤錆粒子、あるいは、もみがらを若干含んでいる。内張りされた炉壁は、最大1cm程の白色の非溶解物をもめに混じえるという点で、初期の壁体とは胎土の違いがある。長軸端部片側には、1～1.5cm大の木炭痕をかみ込む。

21は、片側半分は破面に3枚の溶解面が見られ厚さ6cmと厚みをもつが残り半分は1.4cmと薄い。内面は厚さ1.2cm程の濃い緑色から灰褐色で発泡している。表面は緑灰色や白色滓と同様の湯滓面が付着している。裏面は茶褐色粘土であるが、砥石として転用されたのか表面は平滑である。

22は、側面が直線状の破面に囲まれた厚い炉壁である。破面には3枚の溶解面が見られる。いずれも内面は、厚さ7mm程が濃い緑色から灰褐色にガラス化し、発泡している。最終作業面の下半部では濃い緑色の5mm前後のガスの抜け穴が全面に広がり、その上に上半部から灰褐色のガラス質の溶解物が垂れてきている。この部分の表面は、風化がはげしく、直下の小さい気孔層がスポンジ状に露出している。破面や内面には茶褐色の酸化物が点状に散在する。炉壁胎土は灰白色の中小の石や滓の小片を含み、1cm強のスサも多量に見られる砂質土である。内外の3枚ともほぼ同様の胎土と熱変化をしている。内側から3枚目の初期の炉壁は厚さ2.3cm程が灰白色に熱変化し、さらに、外側1.5cm程が赤褐色に酸化している。本資料の原位置は炉体下半から炉底部にかけての位置と推定される。炉底部内面は、濃い緑色でガスの抜け穴が全面に見られる特徴的なガラス質滓層である。その部分の滓層はほぼ3mm程の厚みで表面のみが滓化している。

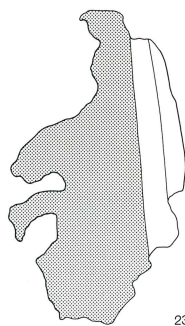
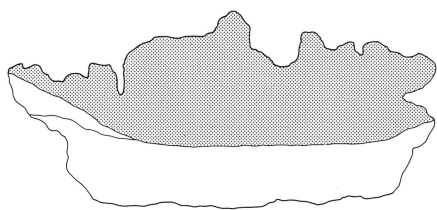
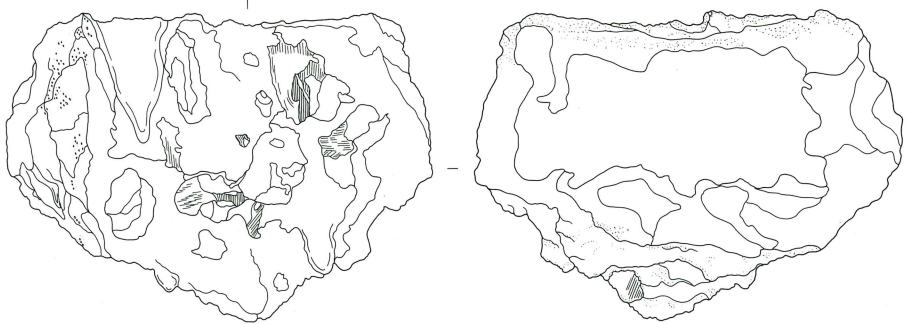
23は、内面に木炭痕が目立つ炉壁片である。側面は全面破面で、上下面には輪積時の水平方向の剝離面が見られる。輪積単位は上下方向で内側が11cm、外側で8.5cmの2枚である。溶解面としては、部分的に2枚認められるため少なくとも1回の補修が考えられる。内側の壁面は、長軸端部とそれ以外の面で質感が異なり、長軸端部はガラス化層が薄く、表面が微小なガスの抜け穴状に発泡している。主体をなすそれ以外の面は、最大長さ5cm×幅3cm大の木炭痕が顕著に見られ、内側全体が厚さ6.5cm程、棚状にせり出している。色調は、表面では付着酸化物のため茶褐色。ガラス質の地は濃いうぐいす色。滓には大小様々な気孔が残り、一部は炉壁の半溶解物が含まれている。長軸端部側から5cm程の部分にヒダ状に垂れて突き出した部分が見られる。この部分が羽口装着部側からの送風範囲のへりにあたる部分と見られる。従って、本資料の長軸端部側片方は羽口側であったと予想される。また、溶解状態から見て大口徑羽口による被熱であろう。炉壁胎土は1～2枚目とも同様なもので、ガラス質の滓片や黒鉛化木炭片、更には鋳型片らしいものも少量混和されている。スサはごくわずかである。胎土はやや砂質で混和物が多い。本資料の原位置を想定して平面形を見ると、少なくとも長さ15cm以上は直線気味で、15cmで7mm程たわんでいる程度である。羽口側も短い現状で判断しても直角気味の平面形であり、本資料の本来の位置である、羽口先レベルの炉体は上下方向にほぼ垂直で、平面方向には隅丸方形の炉体を復元できる。炉壁外面は炉壁内面に沿



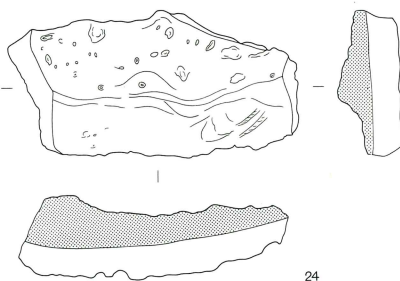
第234図 第5 鑄造遺構群出土遺物(3)



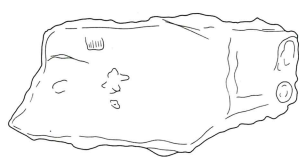
22



23



24



0 10 cm

第235図 第5 鑄造遺構群出土遺物(4)



第236図 第5 鑄造遺構群出土遺物(5)

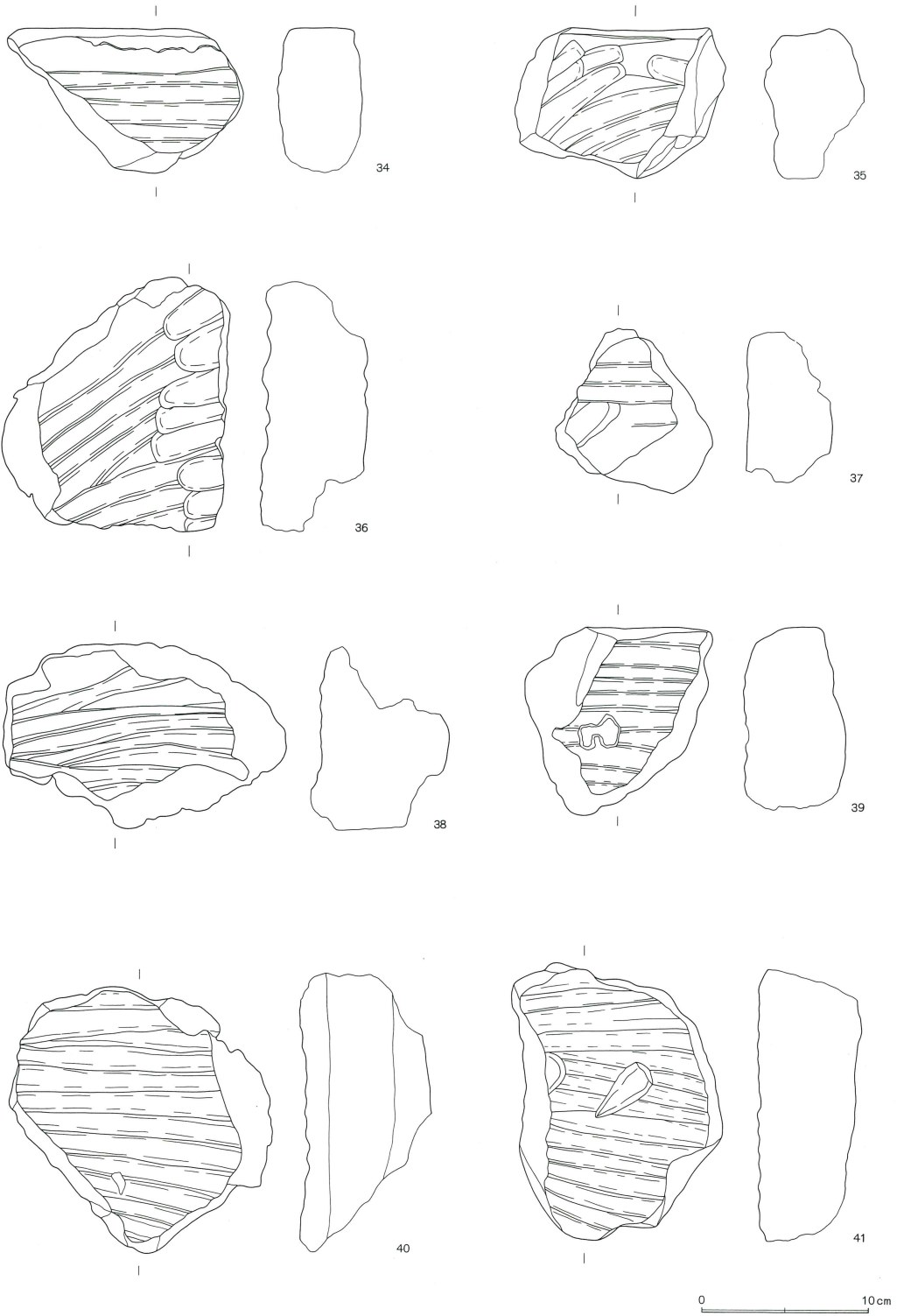
って面的に整形されている。最終操業面の裏面からの厚味は約2.6cmである。

27～29は炉壁面および断面に緑青が吹く遺物である。27は還元した粘土塊であり溶解した湯滓面をもたない。緑青の吹いた部分を半裁してみると粘土内面から青銅塊を検出した。分析結果によると酸化銅 (CuO) 61.33%、錫 (SnO₂) 18.88%、二酸化ケイ素 (SiO₂) 10.38%、酸化アルミニウム (Al₂O₃) 4.69%、鉛 (PbO) 2.56%、酸化カルシウムも含まれている。錫が19%と多く鉛も検出されていることから青銅であることが判断される。28は不定形な塊状の鑄型片又は、鑄型の転用品である。本資料は、還元した溶解物を内壁にもたず、灰褐色から赤褐色に酸化した砂質の胎土である。その最大の特徴は、内面に厚さ2mmほどの砂質のマネ状の貼り付け面が区別され、更にもその内側0.2～1.2cm程には、緑青の吹いた青銅の嵌入物が存在することである。銅の表面は、2～3mmの粒状の集合体となっている。生地となる裏側の壁面は、若干のスサや、かなり多目の長さ7mm大の長いもみがらを混和しており、一部には、黒錆の吹いた鉄酸化物粒子や黒褐色のガラス質滓、あるいは、1mm大の粒状の滓も混じえている。内面のマネ状の貼り土はその裏面ときれいに剝離している部分もあり、鑄造後の、還元したマネの青灰色とは色調を異にする褐色である。本資料は、鑄造時に仕上げマネの内側に生じたヒビ割れから銅が貫入したものである。内側の仕上げマネの端部は、褐色に発泡しており、鑄造に失敗した鑄型を何らかの別用途に転用したものかと思われる。

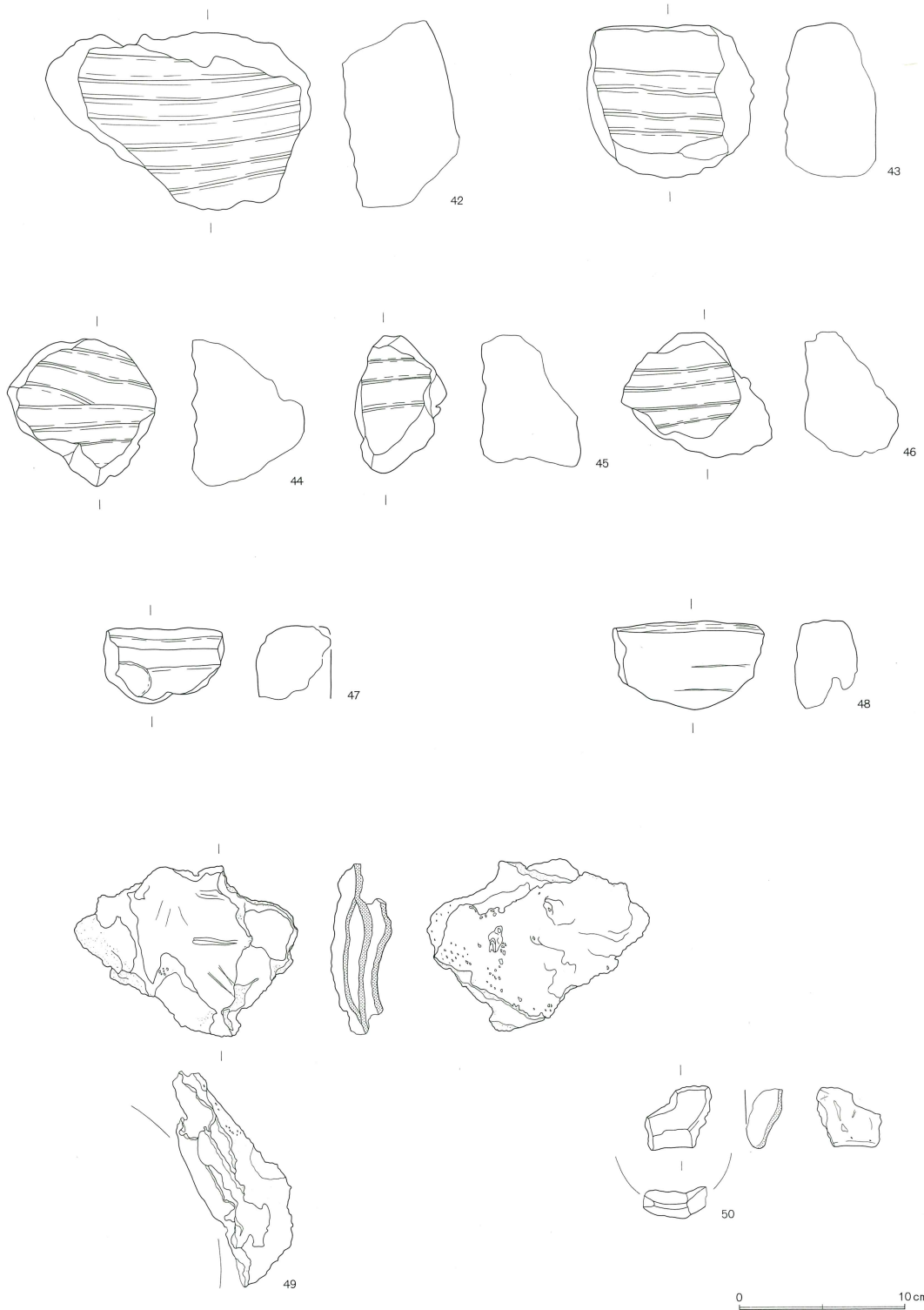
31～33は、粘土で造られた環状のドーナツ型をしたものと考えられる。溶解炉の壁かどうかは断定できないが、鑄型とも考え難い。湯滓の付着はみられないが、内面は被熱を受けわずかに赤色に変化している。胎土は砂粒子、鉄粒、径1～2cm程の石や径3cm程の鉄滓までも混入させる。

34～48は、炉壁1'として分類した一群である。これまでの炉壁粘土とは異なりやや良質の粘土素材を使用している。胎土中には黄白色の粘土塊を混ぜる点が特徴である。また、他の炉壁同様に白色針状物質、滓チップや小石を含む。いずれも厚く胴部破片で7.5cm、48の頂部で3.3cmである。内面は指によるナデの圧痕が付いている。還元された溶解物をもたないが黄褐色の付着物が全面を覆っている。

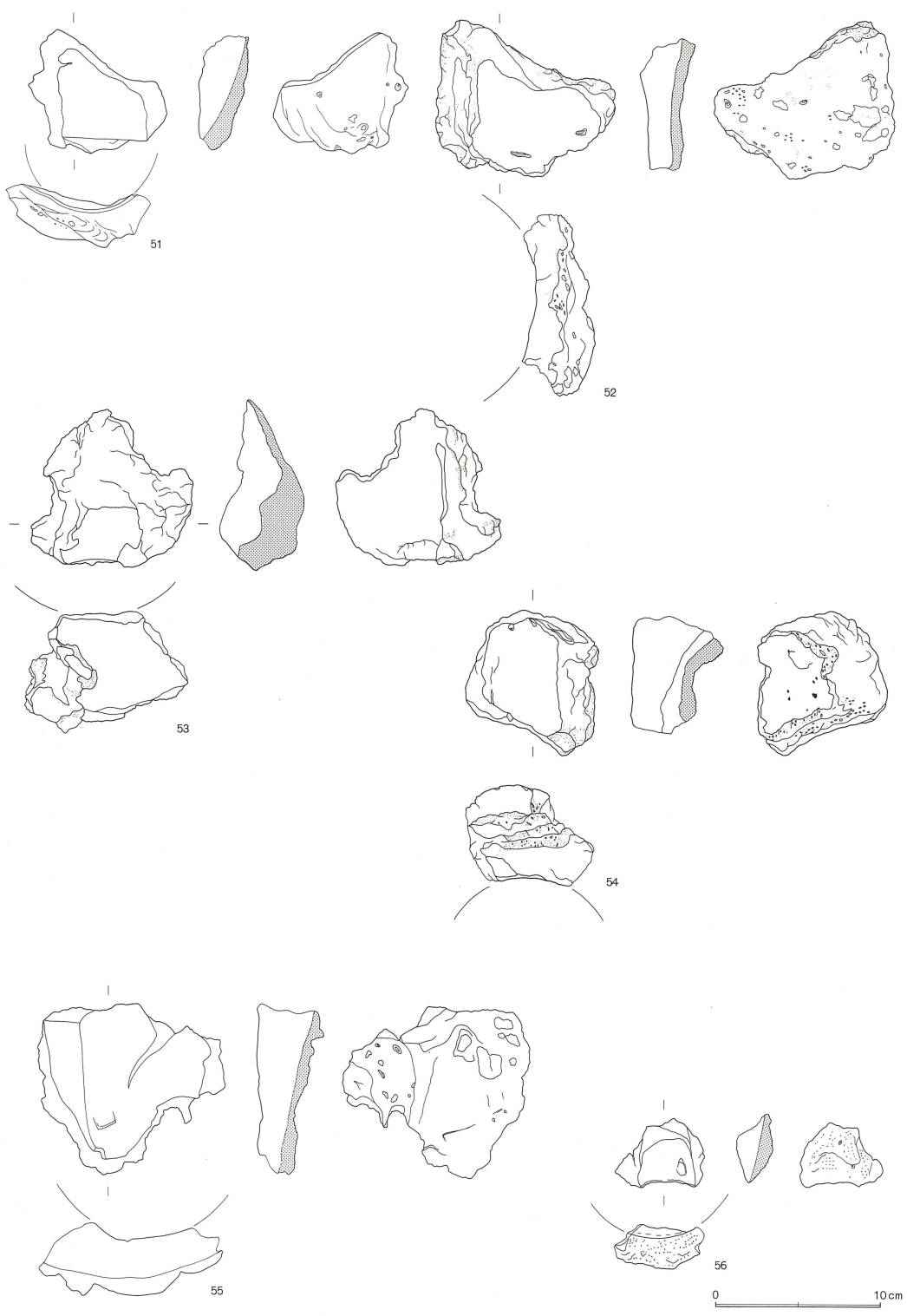
羽口は、49～56である。形態はいずれも破片であるが羽口先端部を残し、50は直径3.0cmの小口径、そのほかは、円形の大口径の溶解炉羽口と考えられる。素材は粘土で白色針状物質、砂粒子、径1mm程の細かい鉄滓粒、径2mmの石を混在する。外面には流動質の湯滓が0.2～1.0cm程の厚さで付着し、色調は鈍い黒色か紫紅色である。断面を観察すると青灰色の還元粘土層、そして、送風される内面は赤褐色の酸化粘土層である。羽口は溶解時の高温および冷却等の要因で内面が歪みと粘土のヒビ割れを起こしているのが特徴である。52・53は羽口粘土を胎土分析した。その結果、炉壁粘土と近似していることが裏付けられた。54・55は金属的分析を行ない、54は先端部を欠き、側面も破面となる大口径の羽口破片である。外面は黒色のガラス質に溶解し、垂れつつある。又、表面には1～3mm大の緑青の吹いた青銅の粒が半分顔を出す形で点在していることも特色である。なお、滓化した表面全体には冷却時のチリメン状のシワも生じている。羽口胎土中には滓粉や丸味を帯びた小さな石粒が見られ、白色の1mm以下の細かい砂粒がかなり多く混和されている。また、細かい繊維状のスサもある程度入っている。内面には穿孔部の穴の整形時に付けられたナデや長軸方向のス



第237图 第5 铸造遗构群出土遗物(6)



第238図 第5 鑄造遺構群出土遺物(7)



第239図 第5 鑄造遺構群出土遺物(8)

ジ状の絞り目が残る。基部側は、肉厚2.5cmの羽口側と羽口を炉体に支えた粘土部分が残りに、外側に向かって溶解部も開いている。色調は外側の溶解部がにぶい黒褐色。羽口胎土は一部を除いて赤褐色。先端部は灰色に熱変化し、本来の羽口先は欠け落ちている。55は大口径の羽口破片である。推定内径は直径約12.0cm。表面は溶解し発泡している。長さ2.6cm程の木炭痕が一部に残る。羽口胎土は滓粉や4mm大の錆びた鉄粒、さらにさまざまな色調の石粒を含み、砂質である。内面は粗くナデ整形されており、やや波状である。一ヵ所だけ幅1.5cmのナデ整形時の工具痕らしきものが長軸方向に向かって見られる。器肉には斜め方向に粘土の接合痕らしいものも見られる。色調は溶解した表面が灰褐色、一部は紫紅色の酸化気味の雰囲気を見せる。溶解部の厚さは最大1cm。羽口の胎土側は赤褐色の酸化焼成である。羽口は先端部に向かって急激に薄くなり、端部の滓はやや内側にたれている。溶解面には点状に褐色の鉄酸化物が付着している。本羽口は炉壁から突き出す形で、少なくとも10cmは炉内に突き出していたと推定され、成形痕から見ておそらく、炉壁と一体で成形されたものと考えられる。内面には大きなヒビ割れが生じている。

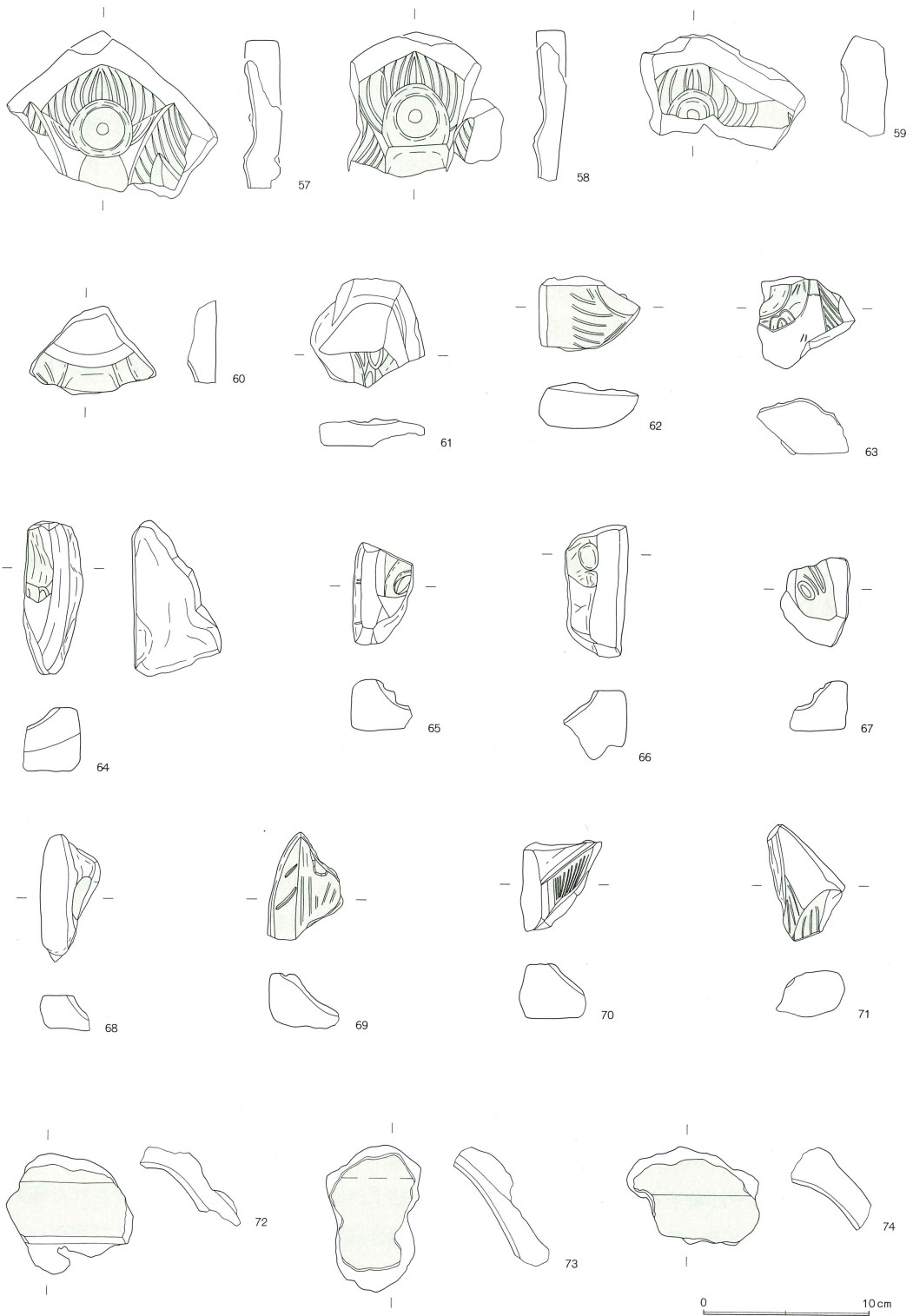
鋳型は、57～136が梵鐘鋳型、141～155は仏具鋳型、140は不明である。

検出した梵鐘鋳型は龍頭・笠型・乳・縦帯・横帯・ジョウ・素文の池の間等の部分である。調査時において鋳型のまとまりを遺構と照らしながら取上げたが必ずしも遺構単位で梵鐘鋳型の個体差を区別することができなかった。このため、遺物は第5 铸造遺構群として大きく捉えた方が理解できる。特に、第1・2・3号铸造土壌と第1号鋳込み跡で検出した梵鐘鋳型の多くは同一個体の可能性をもつ。

梵鐘鋳型は基本的には本体部分を基型によって製作されている。このため、横方向の同心円で挽かれ、鋳型面に基型の条線が残っている。龍頭や乳は別作りであり、それぞれの抜型を使用して製作し、後から梵鐘本体の鋳型を切り抜いて埋め込むという方法が取られたと考えられる。基型と抜型とでは、鋳型胎土が異なる。基型では、外側から荒真土、中真土、仕上げ真土の順で粘土が塗り込まれる。荒真土は厚さ1.5～3.0cm程で暗茶褐色の土に砂粒子、小石、滓片、焼土塊、鋳型片等の混入物が多く見られきめが荒い。中真土は0.5～1.3cmの厚みをもち鈍い黄褐色をしている。きめやや細かく砂粒子、小石、滓片を混入する。仕上げ真土は0.3～0.1cmの厚味をもちきめ細かい。鋳込んだ際に溶解物が直接流れ還元状態になるため、器肌面は青灰色になる。57～71の龍頭と106～125の乳は抜型で製作されている。

57～71は抜型で製作された龍頭である。この内57～63は上部の宝珠部分である。57の鋳型は山形に形造られ中心に径3.8cmの宝珠をもち周辺に左右対象の火炎を表現している。さらに、一段凹ませて龍のたてがみ部分が型どられている。山形の周縁部分は幅1.6cm程の合わせをもつ。素材は一体で白色針状物質や砂粒子を含みきめの細かい良質の粘土が使われている。抜型で押された龍頭部分は湯が流れたため青灰色に還元されている。合わせ部分は赤褐色である。側面および裏面は平たく成形されている。58も同様である。57と58は対になって使用されていたものと考えられる。59は宝珠部分であるが57と比べ宝珠と合わせの部分の幅が狭く火炎の長さが短いのが特徴である。64～71は龍を型取った部分の鋳型である。

72～79は笠型である。笠型は天井部張りをもち上部は緩やかな膨らみを形造る。外縁の屈曲と高



第240図 第5 鑄造遺構群出土遺物(9)

さは72や79の鑄型でおおよその形状は理解できる。笠形の推定直径56.8cmである。72・79は笠形の端部と考えられる。

80～82・84は梵鐘のどの部位にあたるか不明である。85～105は素文であり池の間を中心とした部分の破片と考えられる。

106～125は抜型で造られた乳の鑄型である。1本で4個の乳を縦に配列している。1本の大きさは106で見ると長さ11.6cm、幅3.3cm～2.6cmである。また、1個の乳は径2.7cm、深さ0.8cmで半球状をしている。底面および側・端面は丁寧に成形され、舟底型をしている。内面の乳を形造る面は青灰色に還元され、部分的に黒味の付着痕が見られる。乳の使用方法は、抜型に必要な本数(梵鐘の乳の間1区画に必要な数を縦4×横4個と想定すれば、4区画で16本となる。)をあらかじめ製作し、型焼きしておく。それを基型で製作した梵鐘鑄型の本体に切り込んで埋め込むものと考えられる。その際に埋め込んだまわりの補修用粘土が106・108・116の資料には付着したまま見られる。本資料と同種の乳の残片を第8と第9号鑄造遺構群にて検出した。

126～134は縦・横帯である。135～139は梵鐘鑄型を載せる基底部のジョウ部分の鑄型と考えられる。素材は梵鐘鑄型同様粘土により造られ外・中・仕上げ真土を塗って基型で挽かれている。ジョウはドーナツ型をしており、上面は平たく水平であるが、わずかに中央部分に段をもち内側が低い。梵鐘先端にあたる部分の鑄型である。還元された青灰色の面は幅6.3cm、内側と外側の両端にはわずかながら赤褐色の酸化面をもつ。これは中子と外型の合わせ面と考えられる。推定直径は外周で51.4cmである。

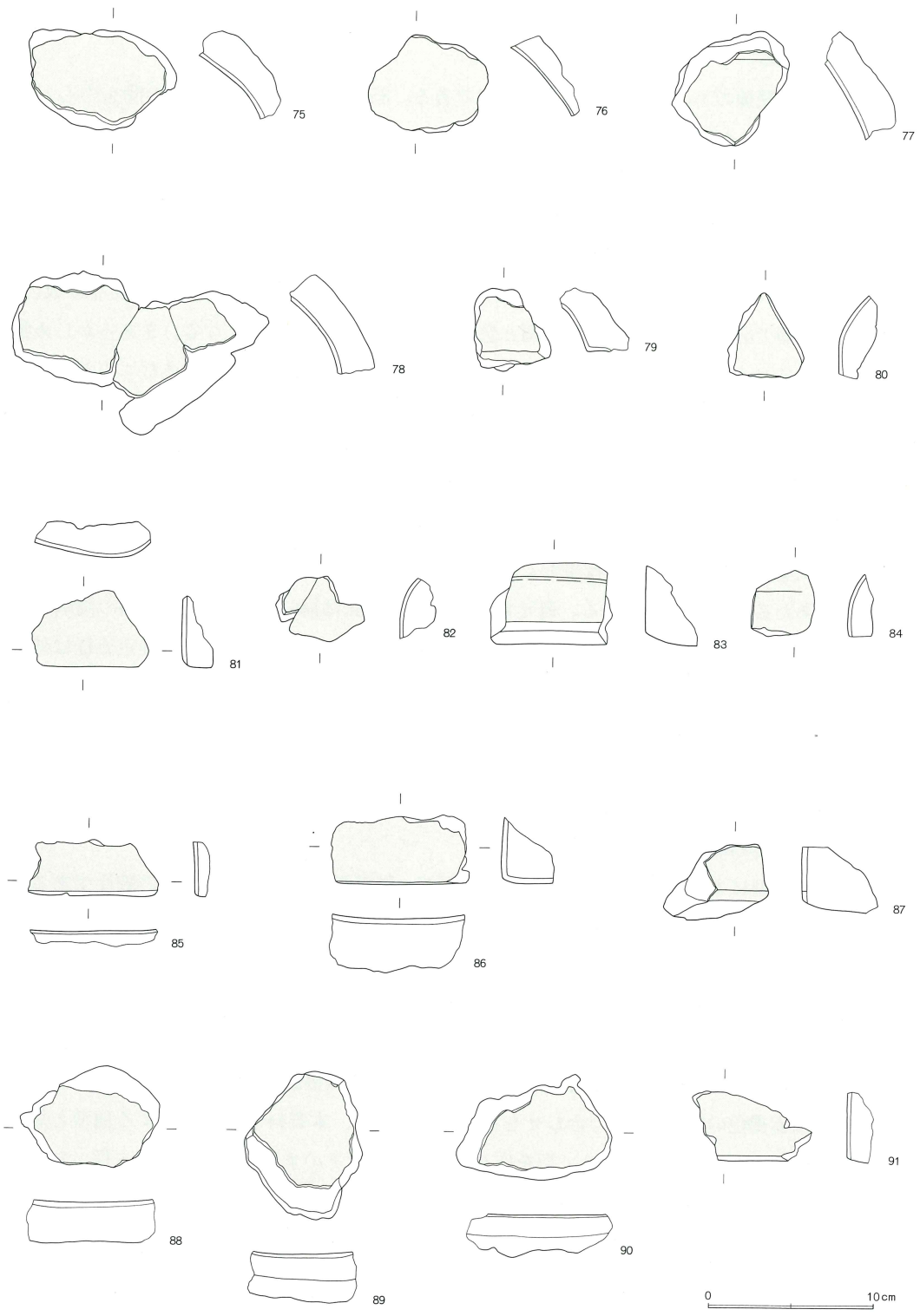
140は不明鑄型である。大きさは径17.5cm程、残存する厚さは4.0cmである。真土は非常に細かく砂質であり、全体が仕上げ真土と同質の粘土と考えられる。形態は表面が17.7cmで3mmの曲率をもちわずかながら湾曲している。ほぼ中央で交差する「+」字状の凹みをもち全体が青灰色の還元面である。第1号鑄込み跡出土。

141～145は抜型による獣脚鑄型である。141は頭部・脚部先端を欠損した半身の破片である。残存部位は歯・牙と横帯・足帯の一部である。144は大型の獣脚鑄型と考えられ、頭部の目の一部である。本資料と同種の獣脚鑄型は第6鑄造遺構群から出土している。

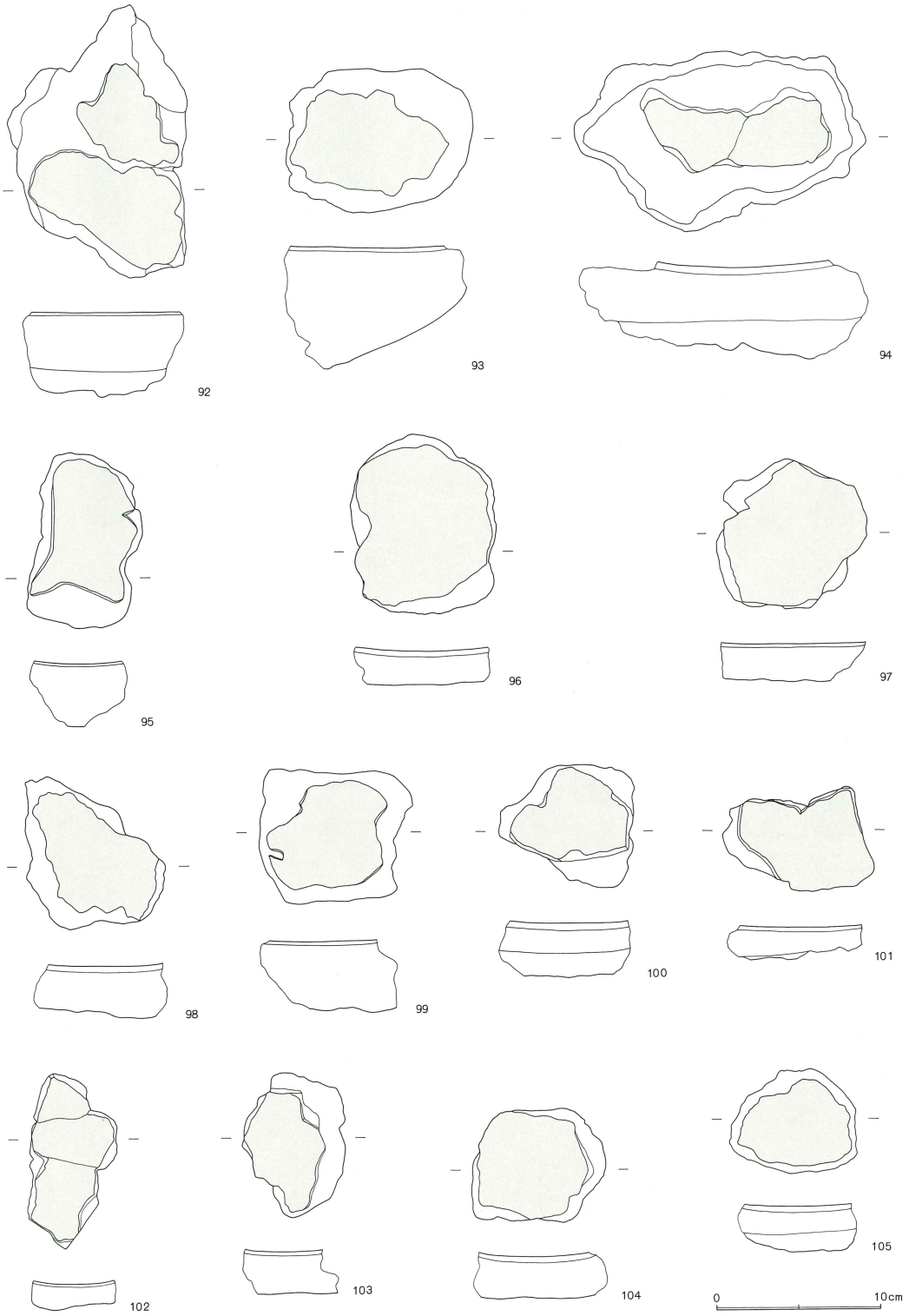
147は型焼きされた種型と考えられる。胎土は砂粒、白色針状物質を含むきめの細かい粘土である。形態はほぼ円形と推定され、表・裏面とも平坦であり、側面は逆台形状に裾をすぼめる。また、表面には中央が円形に青灰色の還元面をもつが、色調が淡く直接湯を流したとは考え難い。さらに、周縁部分には赤褐色の幅1.6cm程の合わせをもつ。おそらく、本資料は生型法による種型と思われ、この円形の種型の上に生型砂を載せて型を作り型焼きせずにそのまま注湯する方法を採ったものと推測する。考えられる製品としては種型の逆台形という形態から鏡の可能性が強い。

148・149・151は釘隠しの飾り金具鑄型である。本資料と同類の鑄型は第30号溝跡から出土している。形態は六葉で猪目の透しをあしらい中央は放射状の刻みをもちその中心はつまみ状の突起をもつ。釘隠しの鑄型である。

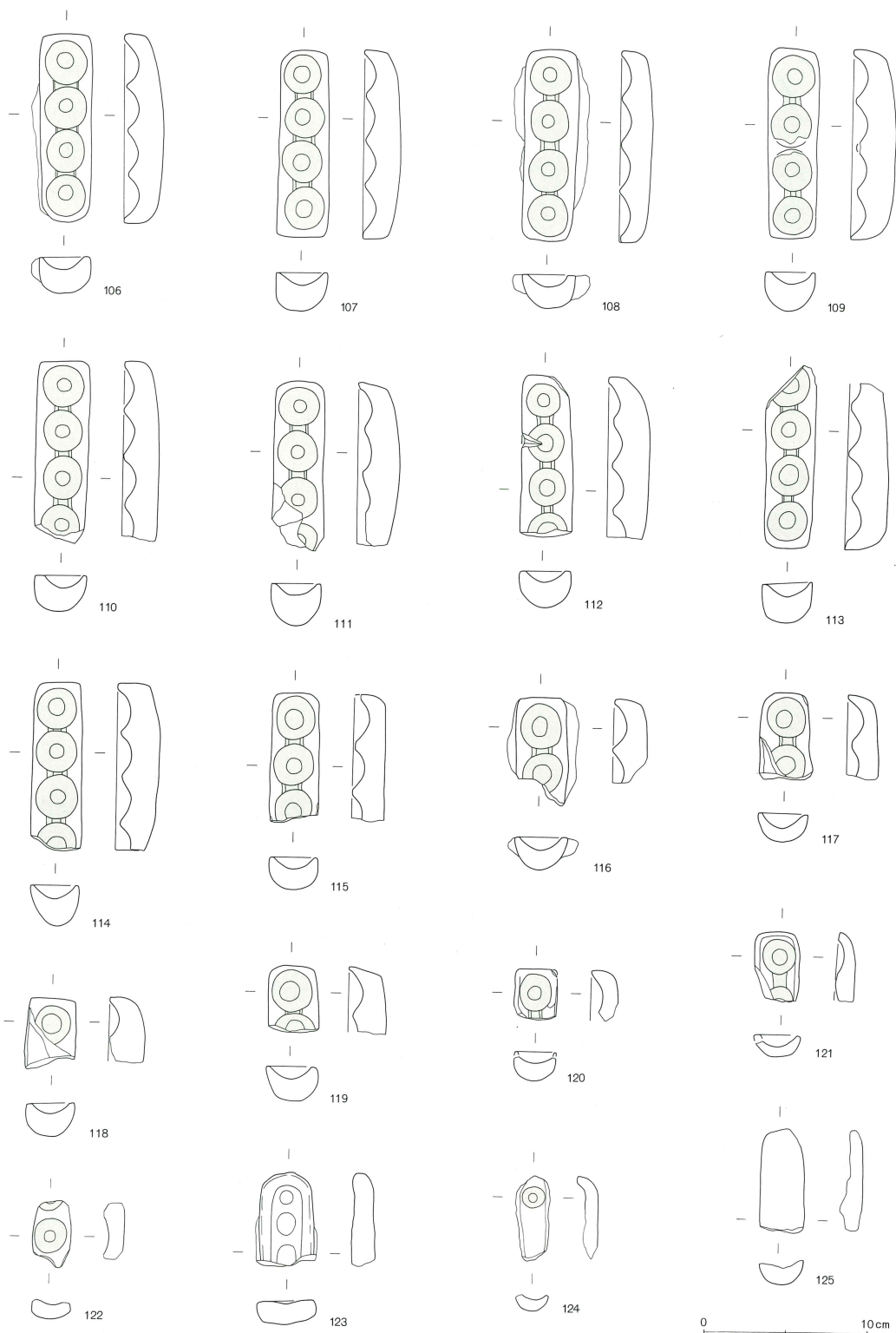
150・154はつまみ鑄型である。どのような製品のつまみであるかは不明。154はダイヤモンド型に切り込まれたつまみに花卉状の刻みをもつ円形となる。つまみの精巧な切り込みは口が狭いこと



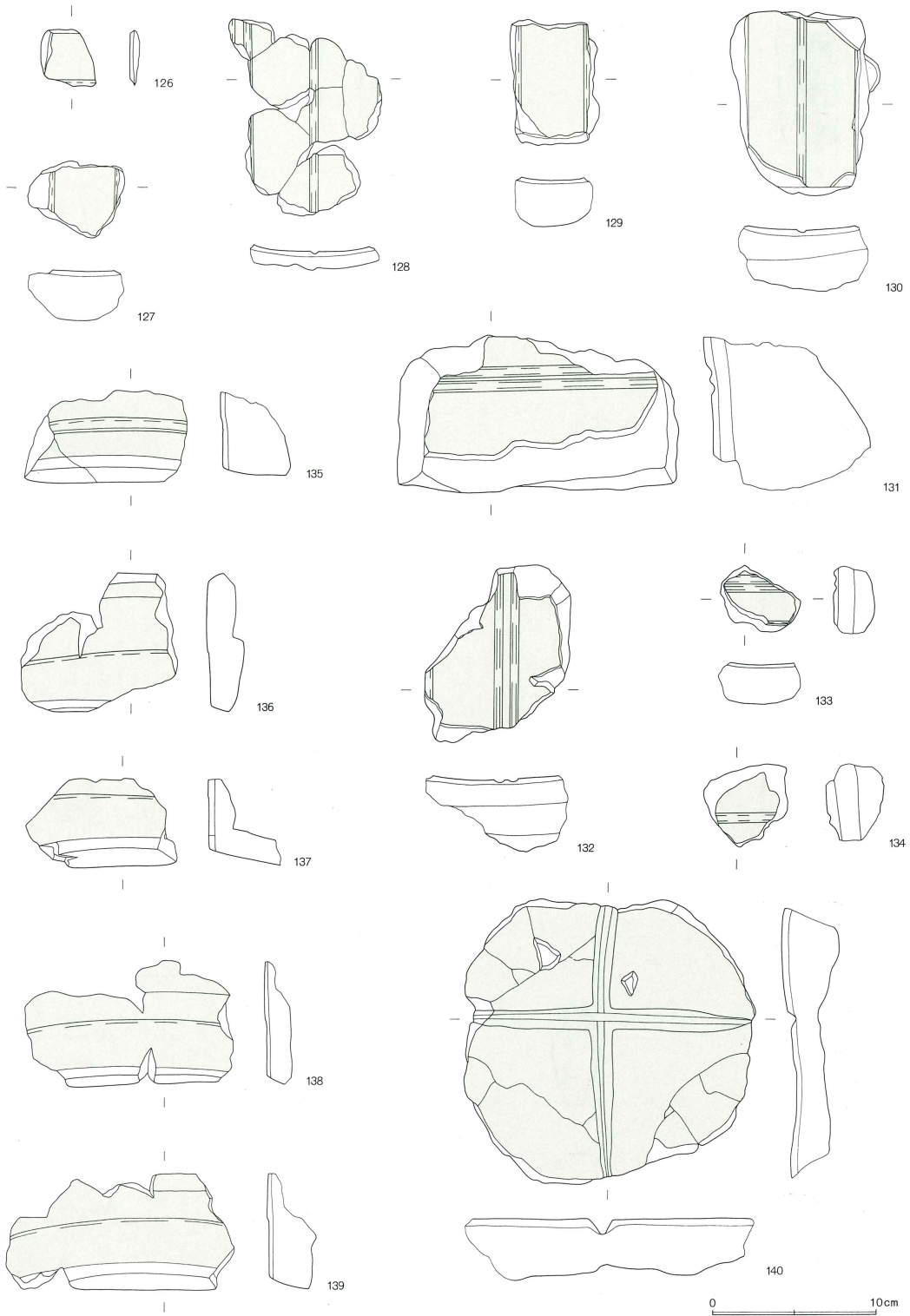
第241図 第5 鑄造遺構群出土遺物(10)



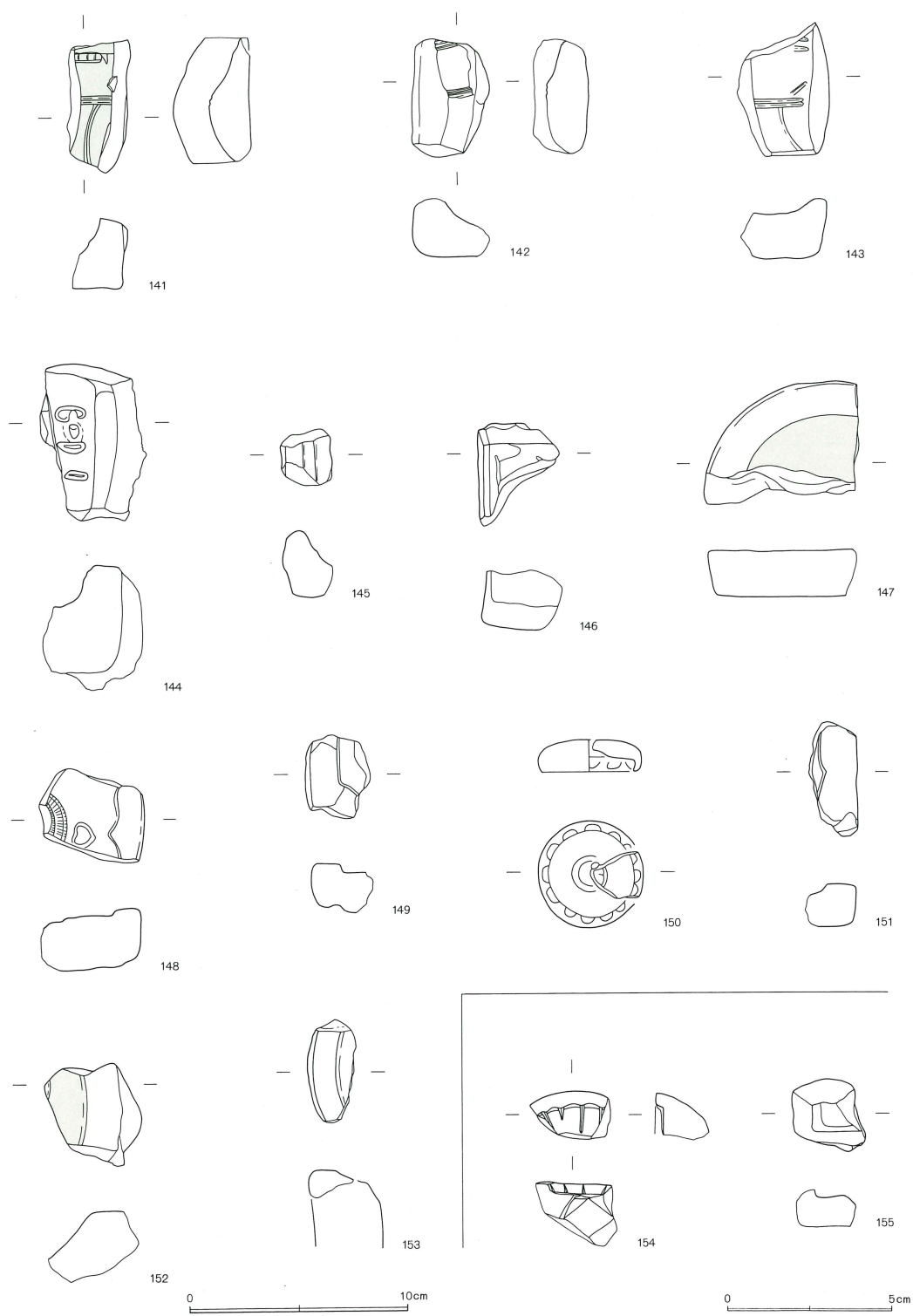
第242図 第5 鑄造遺構群出土遺物(11)



第243図 第5 鑄造遺構群出土遺物(12)



第244図 第5 铸造遺構群出土遺物(13)



第245図 第5 鑄造遺構群出土遺物(14)

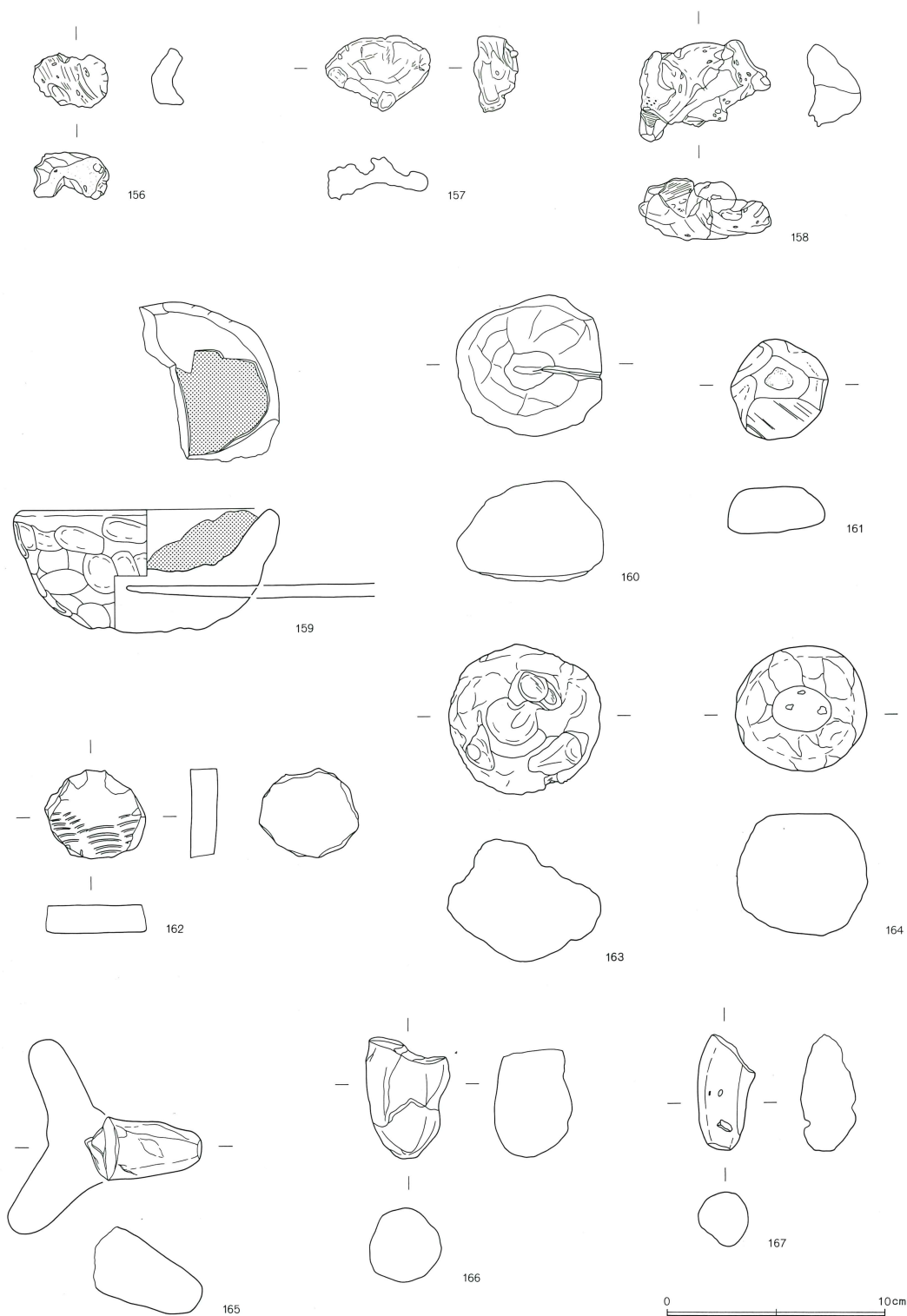
から蠟型によるものと考えられる。胎土は砂粒、白色針状物質を含むきめの細かい粘土である。色調は還元面が見られず赤茶色である。未使用の鋳型と考えられる。

152・153は容器鋳型である。

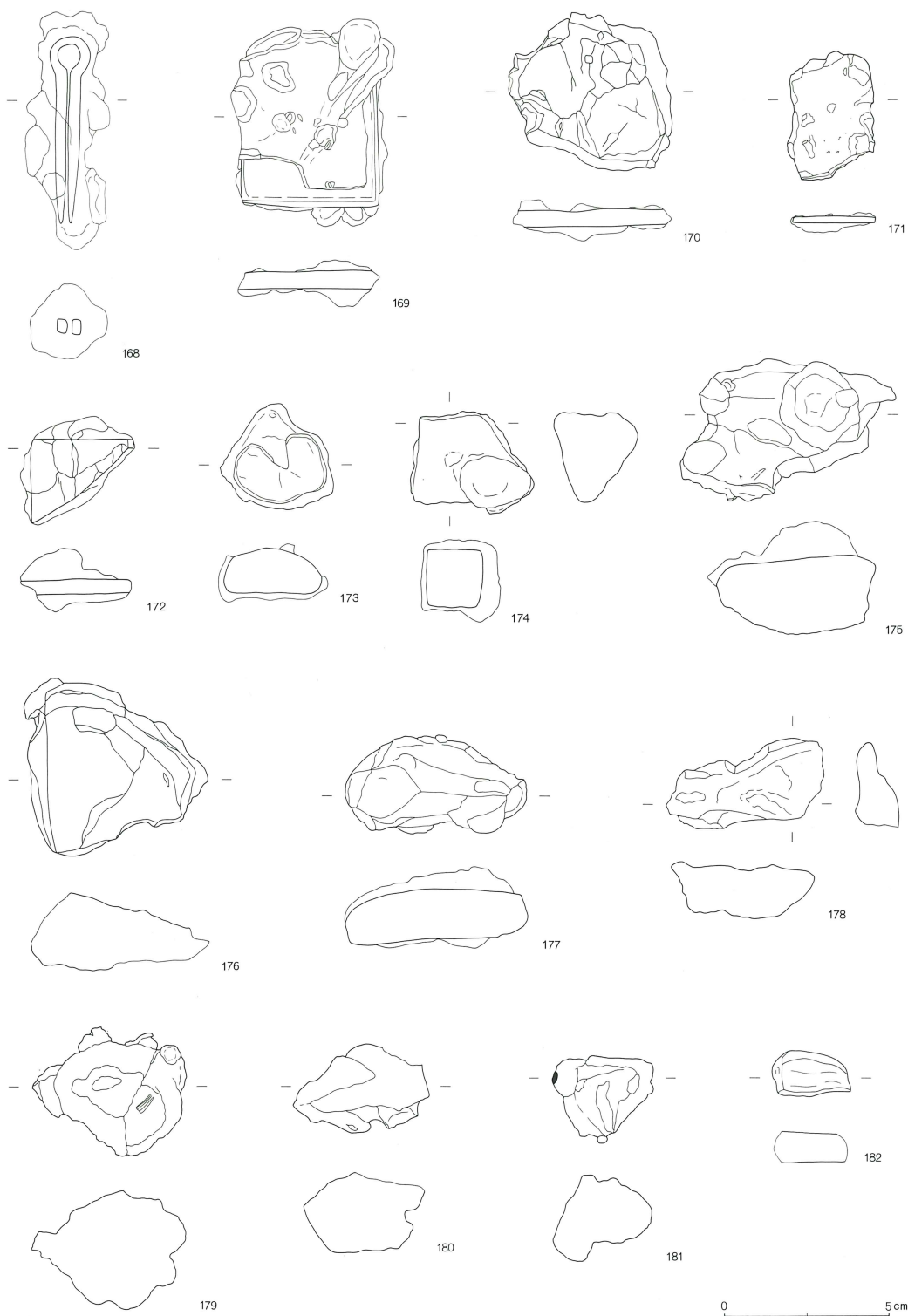
滓は、156～158・180～183である。156は、指頭大の側面二面に破面が見られる黒色無光沢のガラス質滓である。表面は、木炭痕と黄灰色の還元土が見られる。上面に広く、チリメン状のシワが目立つ。側面から下面にかけては、4mm幅で二条、10mm幅で一条の流動状になっている。中央は、1.4cm幅の木炭痕状、側面には、2mm×1mm以下の白色の角張った鉱物が黒色滓の中に数多く散在している。気孔は、円から楕円で、微細なものが散在する。表面のごく一部に紫紅色の酸化色が存在する。大きな気孔や木炭痕の凹みには、褐色の土が残る。破面片側の付着土の一部は褐色に錆化している。157は、鳩の卵大の凹凸のある薄い椀形の滓である。色調は、表面、破面とも無光沢の黒褐色。表裏面とも1cm前後の木炭痕？とチリメン状のすじが目立つ。小さな破面が表裏面や側面に散在し、破面には黒色滓の中に1mm以下の白色の角張った鉱物が溶け残っている。短軸片側端部には、黒錆が滲み、全体的には、磁着の極めて弱い本資料の中で唯一磁着が強く、1mm以下の鉄粒を内包している可能性がある。下面端部に1ヶ所赤褐色の炉壁質の酸化土が付着している。滓表裏面の半分程は、紫紅色の酸化色が残る。158は、5cm大の楕円形を呈し、断面椀形で、表面全体が灰白色の滓である。長軸端部の側面1ヶ所に小さな破面がある。それ以外は長軸端部から側面にかけて、3.5cm×1.0cm程の一部が黒鉛化した木炭痕があり、他は完形。表裏面には、1cm以下の木炭痕とも何かの圧痕とも見られる明らかな圧痕が全面に広がる。裏面の一部は、チリメン状になり、一部は紅色の酸化物が覆っている。表裏面に1～2mm大の褐色土に錆びた粒子が付着する。1mm以下の青黒い粒状の滓も点在する。破面には、楕円形の中小の気孔が散在する。又、気孔の一部は、上面を中心に表面が蜂の巣状に露出している。白色鉱物は小さく、全面に多量に含まれ、全体には灰褐色のまだら状に見える。側面から底面の椀形は、下部に面的な接触物(赤褐色の酸化炉壁が微量付着)があったことを物語る。その位置は、酸化のきれいな炉壁と黒鉛化気味の木炭痕から見て炉床側と見られる。181は重くキラキラしている。部分的に緑青が吹く。

道具は、159～167である。159は手づくね成形された「トリベ」の受け部の約1/3程の破片である。胎土は有色の砂粒と鉄滓片を含み繊維痕も若干認められる砂質のものである。内側には、底面から口縁部にかけて、1/2程の面積で0.8mm以下の厚さに黒褐色で光沢のある湯滓の付着物が残っている。全体の色調は、めまぐるしく変わり、細かい指頭痕の残る表面は赤褐色を呈し、器肉は2mm程の厚さの吸炭層をへて紫褐色となる。内面には黒褐色の氧化物(滓)が張りついている。滓の剝離した一部の表面は灰色である。付着した滓の表面には粒状の鉄錆状のものが点在し、そのひとつには磁着反応がある。下面の破面には長さ7cm近いスジ状の圧痕がある。

160・163は半球状土製品である。素材は粘土で砂粒子を含む。形態は円錐形をしており、手づくね成形の素焼きされたものである。160の底面は高熱を受け青灰色の還元状態である。上面の山形部分はやはり被熱を受け酸化状態である。163の上面は3箇所指押さえの跡をもちつまみ易くしている。160同様に酸化状態である。底面は赤褐色で素焼きされたままである。用途については不明である。しかし、出土状況を見ると、160は第9号鋳造土壙から、163は炉体2号から出土し、い



第246図 第5 铸造遺構群出土遺物(15)

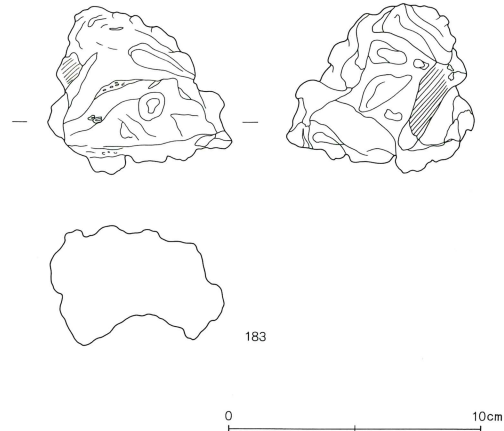


第247図 第5 鑄造遺構群出土遺物(16)

ずれも、炉壁を多く出土している。このことから鑄型に関連する道具よりも溶解炉に関連する道具の可能性が高い。161・162は円盤状製品である。161はまわりが面取りされた平たい石製品である。162もまわりが面取りされた平たい須恵器甕の破片であり、鑄造道具としての転用品であると考えられる。164は球状石製品である。上下にわずかながら平たい自然面を残す。用途不明。165・167は三叉状土製品である。

鉄塊は、168～177・179である。168は鉄製品である。173・175は鉄塊のなかでもメタルの残存度が高く金属探知機で測定すると特Lの値が得られた。174は広い平坦面を上にした場合(図化した場合)に断面は「V」字状で、環状又は棒状の鑄造品。長軸両端のどちらかの凹凸を破面と見て上下方向と考えると、平面形は片寄った三角で、細身の獣脚の中央部破片となるかもしれない。

銅塊は178である。全体に緑青が吹き銅メタルの塊と考えられる。重さは45g、第1号炉跡の基盤に張り込まれた粘土層下から検出した。



第248図 第5 鑄造遺構群出土遺物(17)

第5群出土遺物観察表 (第232～249図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
1	甕		19.0	6.3	D I	A	茶褐色	20%	S S K 9	常滑
2	甕	28.4	3.8		B D	A	暗褐色	10%	P-14-m-1	渥美

第5群出土鑄造遺物観察表 (第232～249図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
3	炉壁	10.4	8.3	5.2	195		炉体4号No70	炉1
4	炉壁	5.8	12.1	4.3	314		S S K 9	炉2
5	炉壁	6.7	8.7	5.7	270		炉体5号No23	炉2
6	炉壁	8.9	10.9	5.4	380		炉体5号No16	炉2
7	炉壁	7.6	7.7	4.6	210		炉体5号No31	炉2
8	炉壁	16.7	12.4	4.1	480		炉体5号No20	炉3
9	炉壁	14.7	16.5	7.1	1074		炉体3号No.8 分析資料No.14	炉2
10	炉壁	9.4	12.4	5.0	470		炉体2号No.11	炉2
11	炉壁	8.9	10.3	4.3	285		P-13-1-7	炉3
12	炉壁	8.0	12.0	5.3	250		S S K 5	炉1
13	炉壁	6.6	10.6	5.8	390		P-14-e-7	炉2
14	炉壁	9.3	12.4	5.6	520		炉体2号No.7	炉2
15	炉壁	10.5	7.9	3.9	200		炉体4号No.35	炉1
16	炉壁	15.6	10.5	7.0	848		第2号炉No.119 分析資料No.13	炉4
17	炉壁	7.3	5.6	3.7	120		S S K 9 P-13-1-3	炉1
18	炉壁	7.5	9.8	3.3	155		炉体5号No.27	炉2
19	炉壁	16.6	10.5	7.0	840		炉体5号No.32	炉1
20	炉壁	16.2	12.5	5.4	983		炉体4号No.85	炉1
21	炉壁	12.3	10.5	5.3	530		炉体5号No.17	炉3



(第 2 号溶解炉)

第249図 第 5 铸造遺構群出土遺物(18)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
22	炉壁	12.4	18.6	8.5	1341		S S K 9 分析資料No.16	炉 3
23	炉壁	15.6	22.5	10.4	1850		炉体 4 号No.69 分析資料No.15	炉 1
24	炉壁	7.7	14.3	3.4	310		S S K 9	炉 2
25	炉壁	13.4	14.0	7.4	785		炉体 4 号No.77	炉 1
26	炉壁	13.0	13.6	5.8	540		炉体 4 号	炉 1
27	炉壁	5.1	8.6	3.2	122		炉体 1 号No.1 胎土分析No.28	炉 4
28	炉壁	8.4	9.0	5.8	300		炉体 4 号No.1 分析資料No.12	炉 4
29	炉壁	7.1	8.7	2.9	176		炉体 4 号No.1	炉 4
30	炉壁	10.5	16.6	5.8	1260		第 1 号鑄込みNo.11	炉 1
31	炉壁	7.7	9.3	7.3	575		炉体 5 号No.14	炉 1'
32	炉壁	10.3	11.6	6.7	775		炉体 5 号No.15	炉 1'
33	炉壁	10.1	14.0	9.1	1360		炉体 5 号No.29	炉 1'
34	炉壁	8.7	12.5	5.1	540		S S K 9	炉 1'
35	炉壁	8.9	12.3	5.9	610		S S K 9	炉 1'
36	炉壁	15.2	13.3	6.3	1170		第 1 号鑄込みNo.188	炉 1'
37	炉壁	9.2	9.3	5.1	340		炉体 4 号No.31	炉 1'
38	炉壁	10.9	17.1	7.8	1100		炉体 4 号No.48	炉 1'
39	炉壁	11.3	11.1	6.1	710		炉体 4 号No.3	炉 1'
40	炉壁	15.8	15.5	8.6	1543		S S K 9	炉 1'
41	炉壁	16.1	12.1	6.5	1270		S S K 9	炉 1'
42	炉壁	10.6	15.9	6.7	1010		S S K 9	炉 1'
43	炉壁	9.1	10.1	5.6	500		S S K 9	炉 1'
44	炉壁	8.8	8.8	6.8	320		炉体 4 号No.82	炉 1'
45	炉壁	8.2	5.5	6.0	200		S S K 9	炉 1'
46	炉壁	7.4	8.7	5.7	255		S S K 9	炉 1'
47	炉壁	4.5	7.3	4.3	130		S S K 9	炉 1'
48	炉壁	5.3	9.2	3.6	170		S S K 9	炉 1'
49	羽口	10.2	13.5	4.8	313	直径 (23.0)	S S K 9	羽口
50	羽口	3.8	3.7	1.8	15	直径 (6.9)	S S K 9	羽口
51	羽口	7.1	7.9	2.9	83	直径 (7.8)	P-13-h-8	羽口
52	羽口	10.8	8.2	4.0	210	直径 (14.2)	S S K 9 胎土分析No.26	羽口
53	羽口	9.3	9.2	5.9	250	直径 (14.2)	第 2 号炉No.61 胎土分析No.25	羽口
54	羽口	7.2	7.8	3.6	232	直径 (10.8)	S S K 1 No.13 分析資料No.27	羽口
55	羽口	10.1	11.0	3.9	250	直径 (12.0)	炉体 5 号No.13 分析資料No.26	羽口
56	羽口	3.9	5.0	2.1	40	直径 (9.4)	P-13-h-9	羽口
57	梵鐘 龍頭	9.0	11.5	2.3	240	宝珠径 3.8	S S K 1 No.1	鑄型
58	梵鐘 龍頭	8.5	8.9	1.6	166	宝珠径 4.1	S S K 2 No.15	鑄型
59	梵鐘 龍頭	4.9	9.0	2.7	177	宝珠径 3.1	P-13-p No.9, 11	鑄型
60	梵鐘 龍頭	5.3	7.7	1.7	50		S S K 2 No.22	鑄型
61	梵鐘 龍頭	6.7	6.9	1.6	65		S S K 2 No.11	鑄型
62	梵鐘 龍頭	4.5	6.2	2.7	58		S S K 1 No.99	鑄型
63	梵鐘 龍頭	5.5	5.8	3.4	56		S S K 2 No.33	鑄型
64	梵鐘 龍頭	9.3	3.6	3.8	110		S S K 1 No.96	鑄型
65	梵鐘 龍頭	6.2	3.7	3.1	60		S S K 1 No.120	鑄型
66	梵鐘 龍頭	8.1	3.8	3.8	100		S S K 1 No.86	鑄型
67	梵鐘 龍頭	3.6	2.8	2.9	50		P-14-m-7	鑄型
68	梵鐘 龍頭	7.7	3.6	2.0	50		S S K 1 No.73	鑄型
69	梵鐘 龍頭	6.5	4.5	3.2	65		S S K 1	鑄型
70	梵鐘 龍頭	5.3	4.6	3.3	68		第 1 号廃滓	鑄型

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
71	梵鐘 龍頭	6.3	4.2	2.7	60		P-13-P-9	鋳型
72	梵鐘 笠形	4.4	7.2	1.7	75		第1号鋳込みNo160,169	鋳型
73	梵鐘 笠形	6.7	4.9	2.2	102		第1号鋳込みNo168	鋳型
74	梵鐘 笠形	4.8	7.5	2.6	105		第1号鋳込みNo71	鋳型
75	梵鐘 笠形	5.1	8.0	2.3	129		第1号鋳込みNo112	鋳型
76	梵鐘 笠形	5.0	7.0	1.5	59		第1号鋳込みNo159	鋳型
77	梵鐘 笠形	5.1	5.4	2.4	100		第1号鋳込みNo95	鋳型
78	梵鐘 笠形	5.3	13.2	2.1	325		第1号鋳込みNo157, 200, 202	鋳型
79	梵鐘 笠形	3.9	3.4	2.5	48		第1号鋳込みNo125	鋳型
80	梵鐘 笠形	4.9	4.1	2.1	30		第1号鋳込みNo22	鋳型
81	梵鐘 中子	4.1	6.9	1.9	45		第1号鋳込みNo185	鋳型
82	梵鐘 笠形	3.7	5.2	2.1	23		第1号鋳込みNo183	鋳型
83	梵鐘 ジョウ	4.9	7.0	3.0	86		P-13-1-9	鋳型
84	梵鐘 笠形	3.9	3.7	1.5	19		第3号炉	鋳型
85	梵鐘	3.3	7.7	1.0	25		第1号鋳込みNo40	鋳型
86	梵鐘	3.2	4.2	8.0	115			鋳型
87	梵鐘 ジョウ	4.1	3.5	3.7	85		炉体1号No17	鋳型
88	梵鐘	4.5	7.1	2.5	120		第1号鋳込みNo171	鋳型
89	梵鐘	6.7	6.1	3.0	180		第1号鋳込みNo29	鋳型
90	梵鐘	4.7	7.3	2.6	130		P-14-m-1	鋳型
91	梵鐘	3.9	6.5	1.6	35		第1号鋳込みNo225	鋳型
92	梵鐘	11.3	9.3	5.2	760		第1号鋳込みNo20	鋳型
93	梵鐘	6.1	9.3	7.4	645		P-14-i No10	鋳型
94	梵鐘	4.1	10.4	5.8	865		第1号鋳込み	鋳型
95	梵鐘	7.7	5.6	3.8	218		S S K 1 No119	鋳型
96	梵鐘	9.4	8.0	2.1	240		第1号鋳込みNo67	鋳型
97	梵鐘	8.8	8.7	2.3	197		第1号鋳込みNo57, 67	鋳型
98	梵鐘	6.7	6.8	3.3	208		第1号鋳込みNo232	鋳型
99	梵鐘	6.3	6.7	4.2	333		第1号鋳込みNo25	鋳型
100	梵鐘	5.4	7.1	3.3	170		第1号鋳込みNo68	鋳型
101	梵鐘	5.8	7.3	2.0	88		P-14-m-1	鋳型
102	梵鐘	9.5	4.9	1.5	85		S S K 1 No89, 92	鋳型
103	梵鐘	7.1	4.7	2.6	130		第1号鋳込みNo56	鋳型
104	梵鐘	6.3	6.6	2.3	158		第1号鋳込みNo43	鋳型
105	梵鐘	5.3	6.9	2.8	140		第1号鋳込みNo18	鋳型
106	梵鐘 乳	11.4	3.2	2.3	103	乳径2.2 乳深0.8	S S K 1 No. 3	鋳型
107	梵鐘 乳	11.3	3.1	2.1	100	乳径2.6 乳深0.8	S S K 1 No. 9	鋳型
108	梵鐘 乳	11.6	3.3	1.8	33	乳径2.6 乳深0.7	S S K 1 No. 6	鋳型
109	梵鐘 乳	11.5	3.0	2.3	100	乳径2.5 乳深0.9	S S K 1 No. 2	鋳型
110	梵鐘 乳	11.0	3.2	2.2	90	乳径2.1 乳深0.7	S S K 1 No. 5	鋳型
111	梵鐘 乳	10.1	3.1	2.2	85	乳径2.5 乳深0.7	S S K 1 No. 7	鋳型
112	梵鐘 乳	9.8	3.2	2.2	78	乳径2.3 乳深0.7	第1号鋳込みNo88	鋳型
113	梵鐘 乳	11.1	3.1	2.3	90	乳径2.5 乳深0.8	S S K 1 No.123	鋳型
114	梵鐘 乳	10.2	3.1	2.4	83	乳径2.7 乳深0.8	S S K 1 No. 4	鋳型
115	梵鐘 乳	7.8	3.0	1.9	55	乳径2.6 乳深0.7	S S K 1 No.59	鋳型
116	梵鐘 乳	6.5	3.2	2.1	45	乳径2.7 乳深0.8	S S K 1 No.52	鋳型
117	梵鐘 乳	5.2	3.3	1.6	30	乳径2.4 乳深0.9	S S K 1 No.115	鋳型
118	梵鐘 乳	4.3	3.1	2.1	20		第1号鋳込みNo89	鋳型
119	梵鐘 乳	4.0	3.1	2.0	30	乳径2.0 乳深0.7	第1号鋳込みNo83	鋳型

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
120	梵鐘 乳	3.1	2.6	1.0	8	乳径2.2 乳深0.7	S S K 1 No.18	鋳型
121	梵鐘 乳	4.2	2.7	1.2	15		P-13-p-9	鋳型
122	梵鐘 乳	3.4	2.3	1.2	13		S S K 1 No.127	鋳型
123	梵鐘 乳	5.7	3.3	1.4	30		No.18	鋳型
124	梵鐘 乳	5.0	2.0	0.9	10		S S K 2 No.14	鋳型
125	梵鐘 乳	6.0	2.6	1.3	25		S S K 1 No.17	鋳型
126	梵鐘 横帯	2.8	3.0	0.6	7		S S K 1 No.43	鋳型
127	梵鐘 縦帯	4.2	4.2	3.0	72		Q-13-d-2	鋳型
128	梵鐘 縦帯	10.3	7.3	1.1	75	縦帯幅0.5 帯間2.9	S S K 1 No.16,20,21	鋳型
129	梵鐘 縦帯	6.6	4.8	2.8	140	帯間3.8	S S K 1 No.116	鋳型
130	梵鐘 縦帯	9.9	8.9	3.7	350	縦帯幅0.5 帯間2.9	S S K 1 No.117	鋳型
131	梵鐘 横帯	7.2	13.7	9.6	1570	横帯幅1.5	S S K 1 No.8	鋳型
132	梵鐘 縦帯	9.5	7.2	4.5	283	縦帯幅1.5 帯間3.7	S S K 1 No.10	鋳型
133	梵鐘 横帯	2.3	3.9	2.4	351	横帯幅1.0 帯間1.7	第号鋳込みNo.197	鋳型
134	梵鐘 横帯	3.6	3.8	3.5	84		P-13-p No.12	鋳型
135	梵鐘 ジョウ	5.5	8.7	4.1	210		炉体1号No.22	鋳型
136	梵鐘 ジョウ	7.6	9.3	2.2	128		炉体1号No.18	鋳型
137	梵鐘 ジョウ	5.4	8.5	1.6	105		第1号鋳込み	鋳型
138	梵鐘 ジョウ	7.5	12.2	1.5	80		第1号鋳込み S S K 10	鋳型
139	梵鐘 ジョウ	7.1	13.7	2.8	80		第1号鋳込み S S K 10	鋳型
140	不明	17.1	17.3	4.0	1075		第1号鋳込みNo.187	鋳型
141	獣脚	5.8	2.8	3.1	40		S S K 9	鋳型
142	獣脚	5.1	3.5	2.2	40		P-14-i-7	鋳型
143	獣脚	6.0	4.2	2.7	49		P-14-m-5	鋳型
144	獣脚	7.1	4.0	5.6	78		第1号鋳込み	鋳型
145	獣脚	2.5	2.3	3.0	15		P-13-1-1	鋳型
146	獣脚	4.5	3.7	2.7	28		炉体4号No.72	鋳型
147	鏡	6.6	6.8	2.0	88		P-13-h No.6	鋳型
148	仏具 飾り金具	4.5	3.6	2.4	45		P-14-m-4	鋳型
149	仏具 飾り金具	3.6	3.0	2.0	25		P-14-e-8	鋳型
150	仏具 つまみ			1.5	5	直径4.8 つまみ径1.6	Q-13-d-2	鋳型
151	仏具 飾り金具	5.1	2.2	1.9	28		S S K 9	鋳型
152	容器	4.0	4.1	2.2	35		P-14-m-5	鋳型
153	容器		2.1	1.3	10.0			鋳型
154	仏具 つまみ	1.3	2.2	1.3	4		P-14-i-7	鋳型
155	仏具 不明	2.0	2.2	1.1	3		Q-13-d-2	鋳型
156	鉄滓	2.1	3.4	1.2	13.2		第1号鋳込み 分析資料No.45	滓4'
157	鉄滓	2.0	3.4	4.6	15.1		第1号鋳込み 分析資料No.46	滓1
158	白色滓	3.8	5.9	2.1	34.5		第1号鋳込み 分析資料No.47	白色滓
159	トリベ				148	口径11.4 器高(5.6)	炉体2号No.2 分析資料No.38	土器
160	半球状土製品	6.3	6.1	45	138		S S K 9	土器
161	円盤状石製品		4.3	2.0	43	直径 4.4	P-13-p-9	土器
162	円盤状土製品	4.0	4.5	1.3	30		P-13-h-9	土器
163	半球状土製品			5.4	160	直径(7.0)	炉体5号No.1	土器
164	球状石製品		6.9	5.5	234	直径 5.9	S S K 9 P-13-1-3	石
165	三叉状土製品			3.0	35		P-14-m-4	土器
166	三叉状土製品			3.3	50		S S K 9	土器
167	三叉状土製品			2.4	25		S S K 9	土器
168	鉄製品	7.0	2.4	2.2	37		P-13-1-5	塊1

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
169	鉄塊系遺物	4.7	6.2	1.3	47.2		P-13-1-3	塊1
170	鉄塊系遺物	4.8	4.6	1.1	39.2		P-13-1-7	塊1
171	鉄塊系遺物	5.2	7.5	1.0	11.7		SSK9	塊2
172	鉄塊系遺物	6.5	5.4	3.1	20.3		P-13-1-3	塊1
173	鉄塊系遺物	3.2	3.3	1.5	34		P-14-I-4	塊1
174	鉄塊系遺物	2.8	3.7	2.4	59.9		分析資料No.5	塊1
175	鉄塊系遺物	4.1	5.9	3.4	113		P-14-m-5	塊1
176	鉄塊系遺物	5.4	5.3	2.2	126.8		Q-13-d-3	塊1
177	鉄塊系遺物	2.9	5.5	2.5	63		P-14-i-7	塊1
178	銅塊	2.5	4.3	1.5	45		粘土下層	銅1
179	鉄塊系遺物	3.5	4.6	3.5	51.5		P-14-e-7	塊1
180	鉄滓	4.1	2.6	2.4	17.4		P-13-1-8	他の滓
181	銅滓	3.1	2.6	2.5	30.9		P-13-1-5	銅1
182	鉄塊系遺物	1.3	2.3	0.9	10		P-14-i-4	塊1
183	鉄滓	6.5	6.9	4.9	148.5		SSK9分析資料No.21	他の滓
184	炉壁			5.0		外径77.0 高さ32.2	第2号溶解炉	炉4

第23表 第5 铸造遺構群一覧表

(単位 m)

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向
SS-05 SSK01	SS-05 SK01	P-13-P	方形	1.80		0.30	N-35°-W
SSK02	SK02	P-13-P	長方形	1.80		0.25	N-6°-W
SSK03	SK03	P-13-P	長方形	1.85	1.54	0.35	N-22°-W
SSK04	SK04	P-13-1	円形	1.50		0.48	N-1°-W
SSK05	SK05	P-13-1	楕円形	2.34	1.41	0.90	N-20°-W
SSK06	SK06	P-14-m	長方形	2.00	1.63	0.35	N-1°-E
SSK07	SK07	P-14-m	長方形	1.40	0.68	0.10	N-59°-E
SSK08	SK08	P-14-m	長方形	2.30	1.63	0.13	N-19°-W
SSK09	SK09	P-14-i	楕円形	4.40	4.06	1.00	N-89°-E
SSK10	SK10	P-13-1	方形	2.30	1.82	0.25	N-15°-W
第1号鑄込み	第1号鑄込み	P-13-P					
第1号溶解炉	第1号炉	P-13-P	円形	0.66			
第2号溶解炉	第2号炉	P-13-1	円形	0.77			
第3号炉	第3号炉	P-13-P					
第1号廃滓	第1号廃滓	P-13-P					
炉体1号	炉体1号	P-13-1					
炉体2号	炉体2号	P-13-1					
炉体3号	炉体3号	P-14-i					
炉体4号	炉体4号	P-14-i					
炉体5号	炉体5号	P-13-1					

b 第6 鑄造遺構群

調査区東側の第1斜面肩部のやや平坦な台地上に展開する鑄造遺構群である。東側には第7鑄造遺構群、北側には第5・8鑄造遺構群が存在する。本遺構群の南側には鑄造施設は確認できず、同様、東斜面に展開する鑄造遺構跡が本群を南端として一度区切れるものと考えられる。しかし、第14・15鑄造遺構群の存在が確認されたことを考え合わせれば、やや距離を置いて更に南側に伸びる斜面にも鑄造遺構群の存在が予想される。

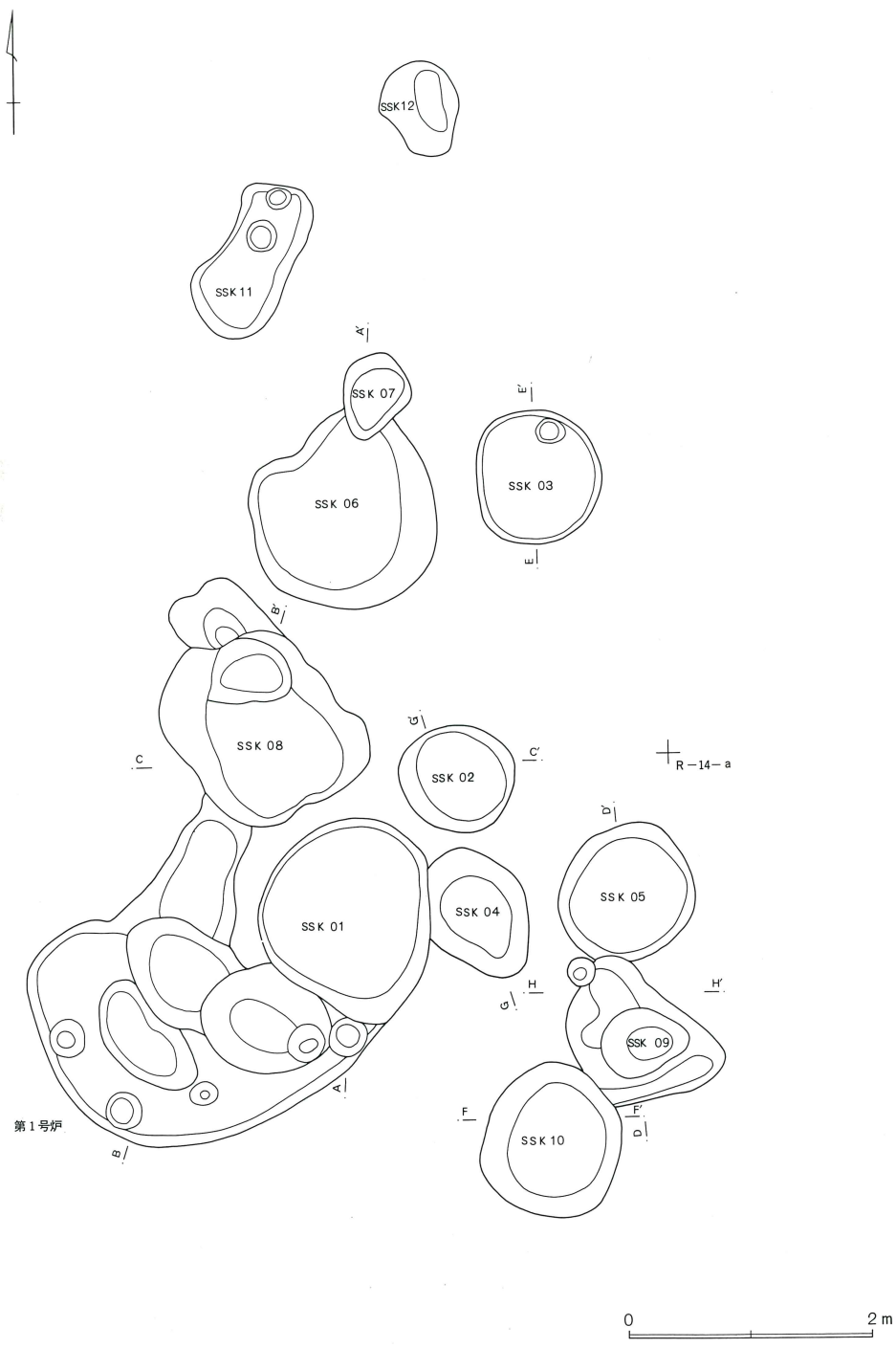
本群は滓や炉壁を含む堆積層とその下から検出された小規模な鑄造土壌の集合体で構成されている。検出された遺構は第1～12鑄造土壌と第1号鑄込み跡である。

出土した鑄造遺物は、鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鑄型、土器、羽口、粘土塊である。

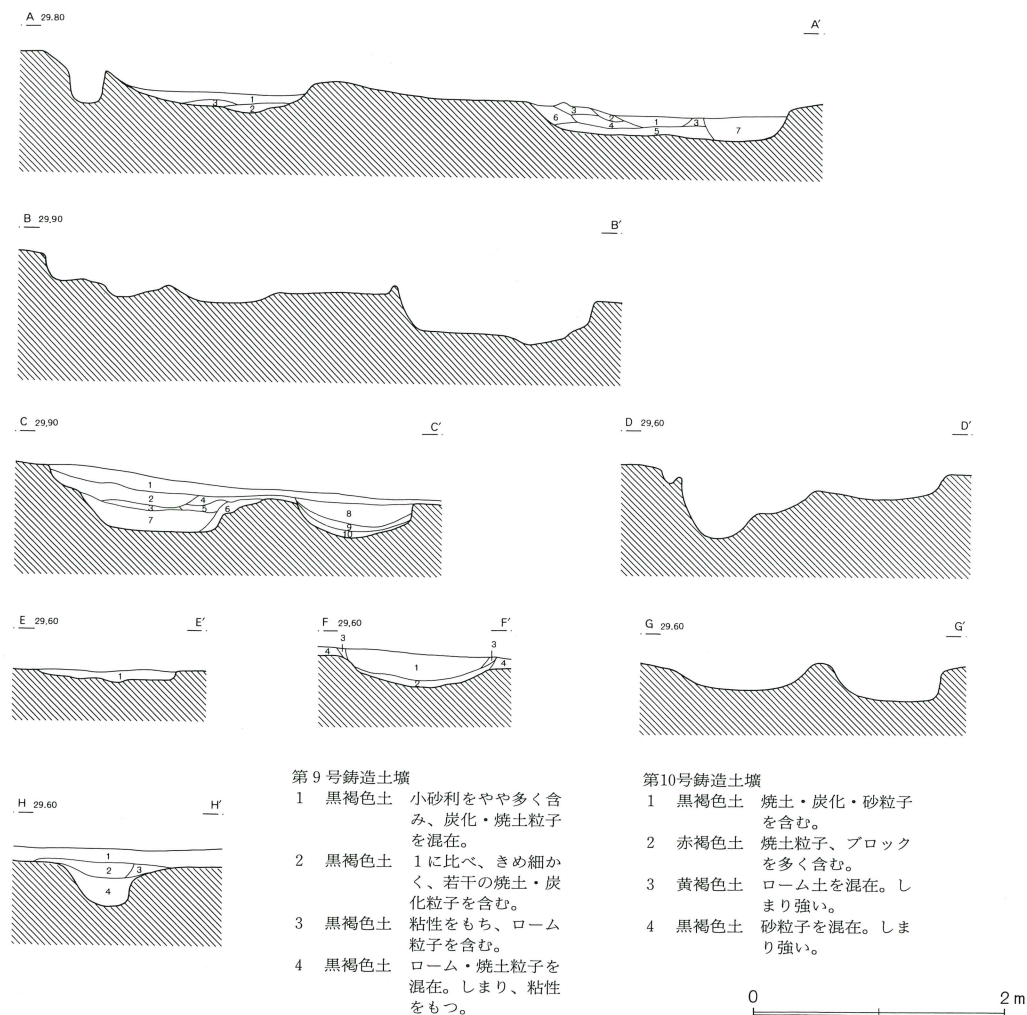
本遺構群を特徴づける遺物として鑄型がある。鑄型は2875gを計量したが、この内獣脚鑄型を多く検出し、このほか、容器鑄型、梵鐘鑄型も検出された。また、炉壁・羽口の溶解遺物は遺構出土よりもグリッド出土が約3倍、鉄塊・滓・木炭等の廃滓遺物はやはりグリッド出土が6倍と多く、本遺構群の周辺あるいは埋没後に廃滓場として利用されたことをうかがわせる。遺構内からは溶解作業に関連する遺物が極端に少ないことも注目される。



第6 鑄造遺構群（南から）



第250图 第6铸造遺構群全体図(1)



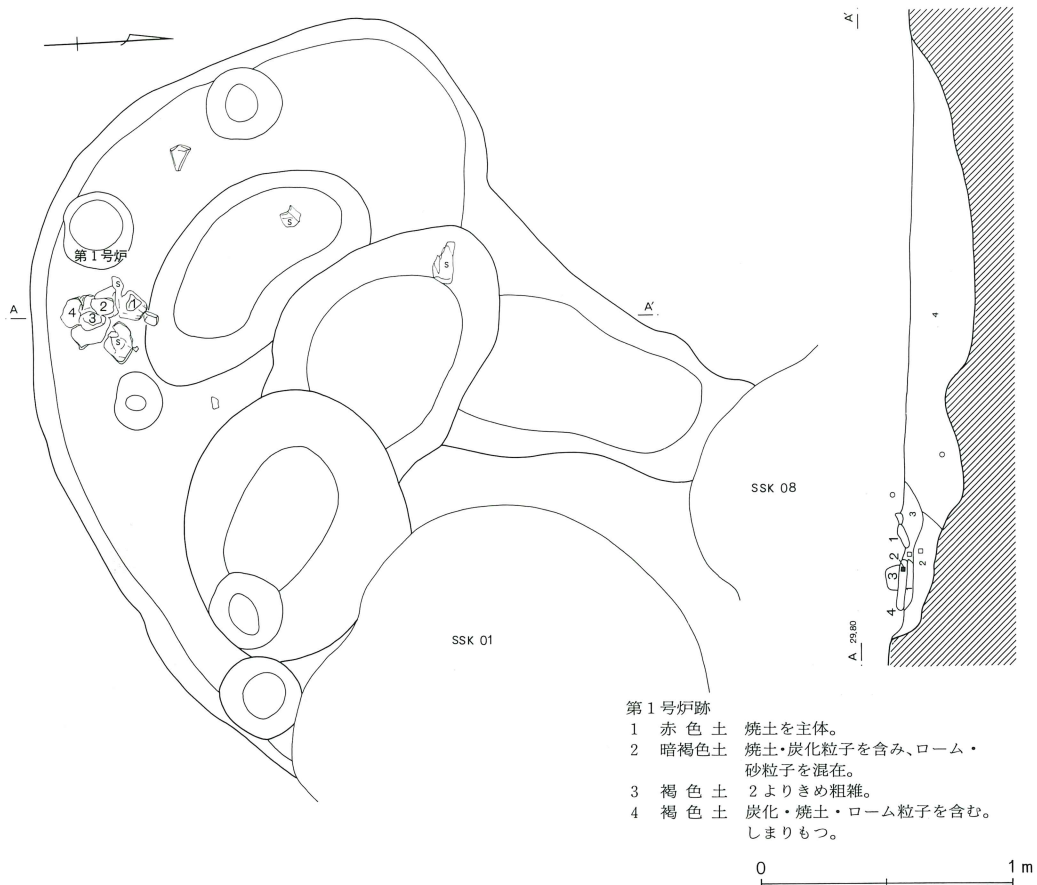
第251図 第6鑄造遺構群全体図(2)

遺構

第1号炉跡 (第252図)

本群の南西にあたり、形態はやや大型の不整形な掘り込み内に小型の楕円形をした土壌が3基重なり合って検出された。東側には第1鑄造土壌、北側には第8鑄造土壌と重複関係にある。規模は東西2.80m、南北2.86m、深さ14から24cmである。本土壌は鑄造土壌と考えられるが南寄りの位置に溶解炉の跡と考えられる部分を検出した。正確なところは不明であるが第1号炉跡とする。

第1号炉は土壌掘り方を第1～第4層によって埋め戻された整地層の上面で検出された。第4層はしまりをもちこの層の先端部を焼土・炭化・ローム粒子を含む第2・3層で埋め戻される。この上層は赤色の焼土を主体とした焼けた第1層を確認した。この焼土層の上に径15cm程の石と炉材と考えられる粘土塊(1～3)と弧を描き外側に開く炉壁片(4)を検出した。整地面が焼けていること、大きな石を伴うことから溶解炉が設置された場所と思われる。



第252図 第6群第1号炉跡

第1号鑄造土壙 (第253図)

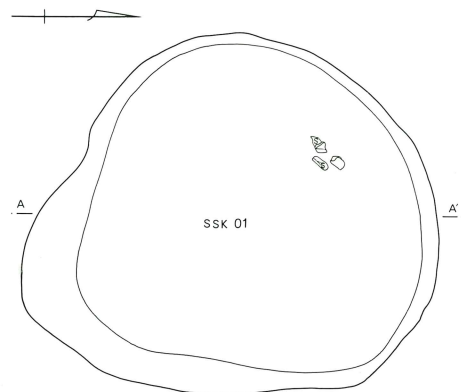
本土壙は、第1号炉を伴う土壙の北東の位置にあたる。形態は円形であり、底面は中央やや東寄りが深く皿状をしている。規模は径1.55m、深さ29cmである。覆土は第1層が焼土・炭化粒子を含みしまりをもつことから整地している可能性もあるがはっきりしない。鑄造土壙としたが土壙の機能や性格については不明である。

第2号鑄造土壙 (第253図)

本土壙は、第6鑄造遺構群の中心にあたり他の鑄造土壙に囲まれている。形態は円形であり、底面は中央部がやや深く擂鉢状である。規模は径0.97m、深さ33cmである。覆土は第8～10層あたり鉄滓を含む褐色土で覆土と考えられる。一方、第9・10層はローム・砂粒子を含みしまりをもち整地層と判断された。この整地層中から獣脚鑄型の合わせ(12)を検出した。鑄造土壙としたが土壙の機能や性格については不明である。

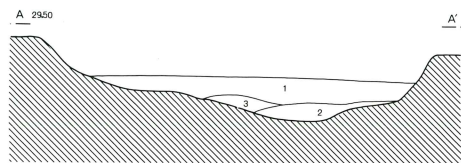
第3号鑄造土壙 (第254図)

本土壙は、北寄りに位置し、西側には第6・7号鑄造土壙が存在する。形態は円形であり、底面は中央やや凹み皿状をしている。規模は径1.07m、深さ8cmである。覆土は焼土・炭化・ローム粒



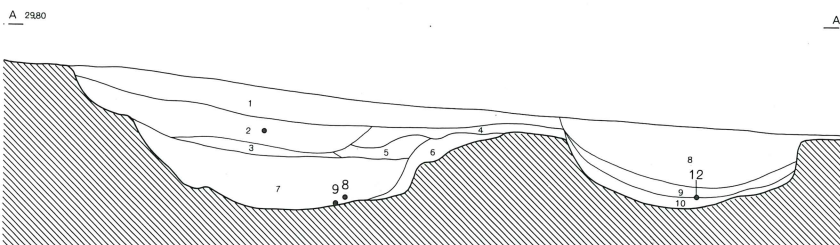
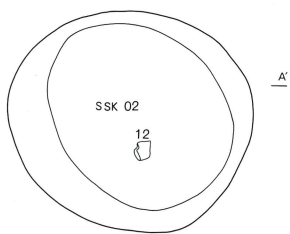
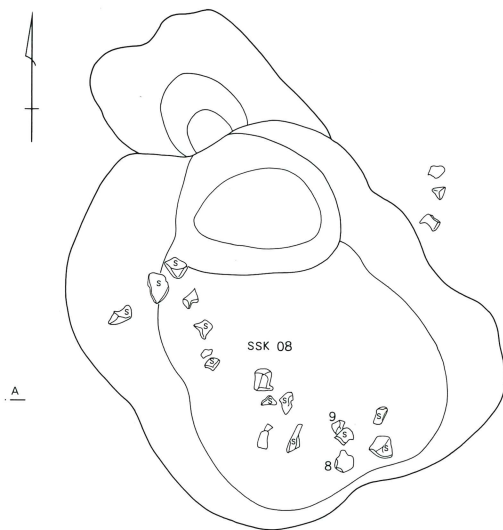
第1号鑄造土壇

- 1 暗褐色土 焼土・炭化粒子を含み、しまりもつ。
- 2 褐色土 1に比べ、ローム粒子混在。
- 3 暗褐色土 しまりやや弱く、ローム・焼土粒子を含む。



第2号・第8号鑄造土壇

- 1 暗褐色土 焼土・砂・炭化粒子を含み、しまり弱い。
- 2 暗褐色土 1に比べ、しまり強く、きめ細かい。ローム・焼土・炭化粒子を含む。
- 3 黄褐色土 ローム土を主体。(貼り床する。)
- 4 黄褐色土 ローム・砂粒子を主体。
- 5 黄褐色土 ロームブロックを混入。焼土粒子を含む。
- 6 暗褐色土 きめ細かく、しまりもつ。ローム・炭化粒子を含む。
- 7 暗褐色土 きめ細かく、しまり強く、焼土・炭化粒子を少量含む。
- 8 暗褐色土 焼土・炭化粒子を含み、しまりややもつ。(鉄滓出土)
- 9 褐色土 ローム・砂粒子を含み、しまりもつ(ローム貼り込み)
- 10 黄褐色土 砂・ローム粒子を含む。



第253図 第6群第1・2・8号鑄造土壇遺物分布図

子を含みしまりの弱い暗黒褐色土である。また、覆土中から焼土や炉壁を検出した。鑄造土壙としたが土壙の機能や性格については不明である。

第4号鑄造土壙（第254図）

本土壙は、第1号鑄造土壙の東側に隣接して検出した。形態は菱形をし、底面は中央やや低く皿状をしている。規模は長径1.00m、深さ18cmである。覆土中からは拳大の礫を多く出土する。また、獸脚鑄型(第257図7・13・15)も検出した。鑄造土壙としたが土壙の機能や性格については不明である。

第5号鑄造土壙（第254図）

本土壙は、第4号鑄造土壙の東に位置し、第9・10号鑄造土壙が南側に連続して存在する。形態は円形であり、底面は平坦で皿状をしている。規模は径1.10m、深さ15cmである。覆土中からは羽口、獸脚鑄型の合わせ、三叉状土製品を検出した。鑄造土壙としたが土壙の機能や性格については不明である。

第6号鑄造土壙（第254図）

本土壙は、第3号鑄造土壙の西側に位置する。北側には第7号鑄造土壙と重複関係にあり本土壙が古いことが断面観察により確認されている。形態はやや不整楕円形ながらも、底面は平坦である。規模は長径1.55m、深さ22cmである。覆土は第1・2層が焼土・炭化粒子を含み砂粒子を混在させ、第5層は焼土・炭化粒子を多く含む。また、獸脚鑄型を検出した。鑄造土壙としたが土壙の機能や性格については不明である。

第7号鑄造土壙（第254図）

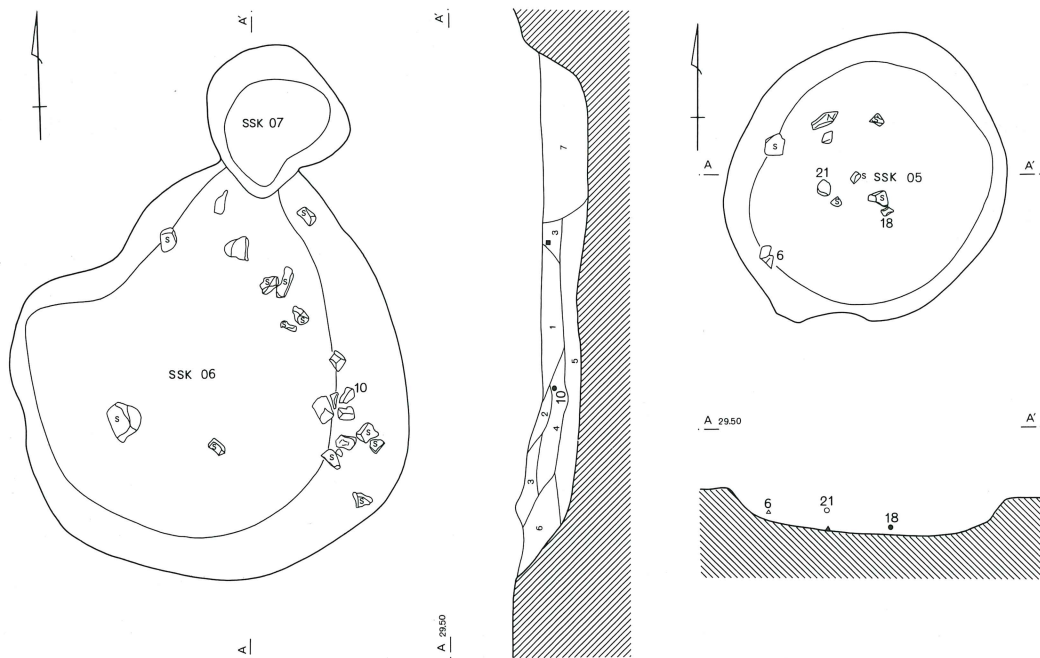
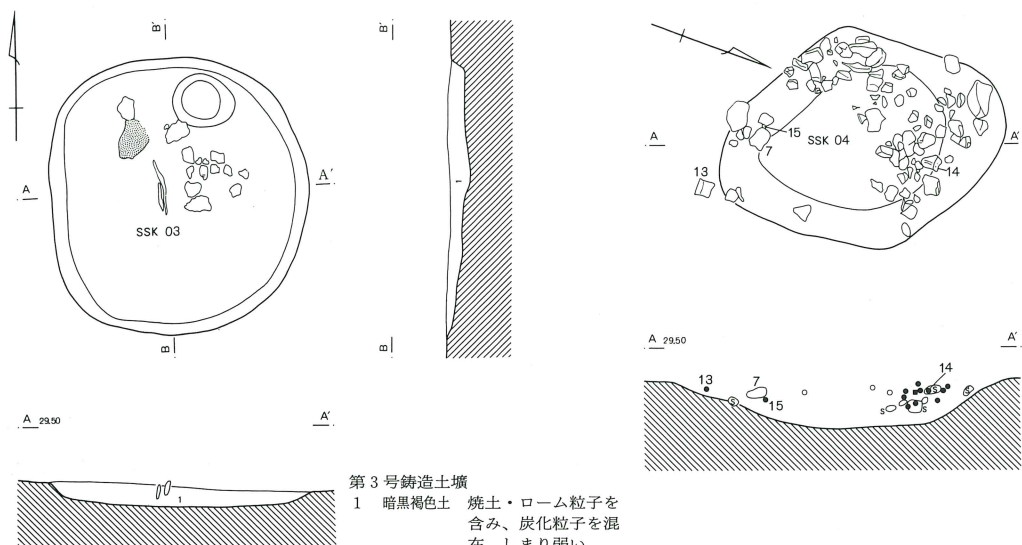
本土壙は、第6号鑄造土壙を壊して北側に造られている。形態は円形であり、底面は平坦である。規模は径0.55m、深さ25cmである。覆土はロームブロックを多く含む第7層である。鑄造土壙としたが柱穴の可能性も考えられ土壙の機能や性格については不明である。

第8号鑄造土壙（第253図）

本土壙は、第2号鑄造土壙の西側に位置する。形態は不整楕円形をしており北側はピット状の掘り込みと重複している。底面は中央が深く壁ぎわには浅いテラスをもっている。平面観察では確認できなかったが、断面観察によると3基の鑄造土壙が存在していた可能性が考えられる。最も古いのは第7層を覆土とする鑄造土壙(A)、次に第4・5層を覆土にもつ鑄造土壙(B)、そして最後に造られた第1～3層の堆積層をもつ鑄造土壙(C)の順である。土壙Bの第4・5層はロームを主体とし貼床された作業面の可能性が高い、この層を切り込んで土壙Cの覆土が堆積し、しかも3層はロームを主体とした黄褐色の貼床層である。ただし、第7層を土壙Bの掘り方と捉えれば土壙Aの存在はないこととなる。少なくとも、第8号鑄造土壙は第4層の作業面と第3層の作業面の2面が存在し同じ場所に造り替えされたものと考えられる。それぞれの規模は不明であるが全体の規模は長軸1.58m、短軸1.32m、深さはそれぞれAが48cm、Bが7cm、Cが22cmである。検出した遺物は8・9の大型の獸脚鑄型である。

第9号鑄造土壙（第250・251図）

本土壙は、北側に第5号、南側に第10号鑄造土壙が存在し、挟まれた位置にある。形態は楕円形



第6号・第7号鑄造土塙

- 1 暗褐色土 焼土・砂粒子を含む。
- 2 黄褐色土 炭化・ローム・砂粒子を含む。
- 3 暗褐色土 焼土・ローム粒子を含む。
- 4 明褐色土 3よりやや明るい。しまり強い。
- 5 明褐色土 焼土・炭化粒子をやや多く含む。
- 6 黄褐色土 ローム粒子、ブロック、砂粒子を含む。
- 7 暗褐色土 ロームブロック、焼土・炭化粒子を含む。

0 1 m

第254図 第6群第3～7号鑄造土塙遺物分布図

で中心がピット状に深く掘り込まれている。規模は長径1.22m、深さ46cmである。鑄造土壙としたが土壙の機能や性格については不明である。

第10号鑄造土壙（第250・251図）

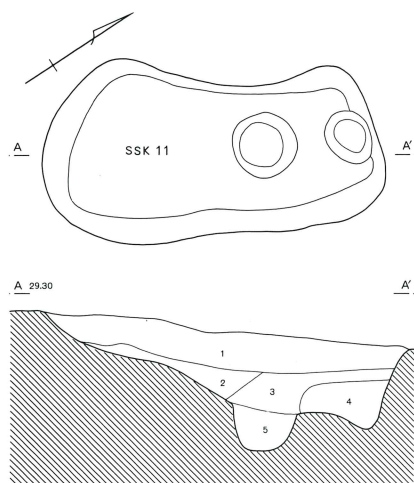
本土壙は、第9号鑄造土壙の南側に位置する。形態は円形であり、底面は中央やや東寄りが深く皿状をしている。規模は径1.14m、深さ22cmである。覆土は第1層が焼土・炭化砂粒子を含み、下層の第2層は6cm程の赤褐色土が堆積し、焼土粒子および焼土ブロックを含みしまりをもつことから整地している可能性もあるがはっきりしない。鑄造土壙としたが土を多く含む。鑄造土壙としたが土壙の機能や性格については不明である。

第11号鑄造土壙（第255図）

本土壙は、第6鑄造遺構群の中でも北側に位置する。形態は隅丸長方形であり、底面は北壁および西壁、南壁側が深く掘り込まれ、2基の柱穴を検出した。規模は長軸1.34m、深さ28cmである。覆土は地山の砂礫層の砂礫を多く混在させ、ピット内は灰褐色土の砂質土を主体としている。第1層が焼土・炭化粒子を含みしまりをもつことから整地している可能性もあるがはっきりしない。鑄造土壙としたが土壙の機能や性格については不明である。

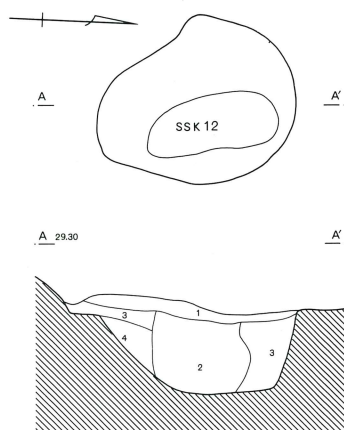
第12号鑄造土壙（第255図）

本土壙は、第11号鑄造土壙の東側に位置する。形態は不整楕円形であり、底面は平坦であるが深く掘鉢状をしている。中央やや東寄りが深く皿状をしている。規模は径1.55m、深さ29cmである。覆土は地山に見られる砂礫を多く混在させる。断面観察から判断すると柱穴の可能性もあるが機能や性格については不明ながらも鑄造土壙としておく。



第11号鑄造土壙

- 1 黒褐色土 砂利、ローム・砂粒子を含む。
- 2 暗褐色土 砂利を多く含み、しまりやもつ。
- 3 褐色土 砂利を含み、しまりやもつ。
- 4 黄褐色土 若干の焼土粒子、砂利を多く含む。
- 5 灰褐色土 砂質土を主体。砂利を混在。



第12号鑄造土壙

- 1 暗褐色土 炭化物を含み、砂利、ローム土を混在。
- 2 黒褐色土 若干の焼土・炭化粒子を混在。砂利を多く含む。
- 3 暗褐色土 砂利を主体。
- 4 黄褐色土 砂利を多く含む。

0 1 m

第255図 第6群第11・12号鑄造土壙

遺物

鑄造遺物は全て分類し計量を行った。その結果、鉄塊1951g、炉壁15966g、銅滓63g、鉄滓23692g、木炭614g、白色滓528g、石2185g、鑄型2825g、土器1227g、羽口1913g、粘土塊239gである。

遺物は各遺構覆土および上層を覆っていた堆積層内から検出したグリッド出土遺物の合計である。遺物は計量比から見ると鑄型・土器は遺構内の方がグリッド出土遺物より多いことが窺え、炉壁・羽口の溶解遺物、鉄塊・鉄滓・白色滓・木炭の溶解時にできる廃滓遺物はグリッド出土の方が多いことがわかった。このことは、堆積層が自然の堆積物で構成されたのではなく鑄造遺物の組成から溶解炉と廃滓とが見られ本遺構群内で溶解作業を行っていた可能性が推測できる。また遺構内からは鑄型が出土しており第3号鑄造土壌などは鑄込み土壌としての性格を持っていたことが推測できる。さらに、注意されることは鑄造土壌とした中に拳大の石を多く出土する土壌が見られ石の性格や用途については不明である。

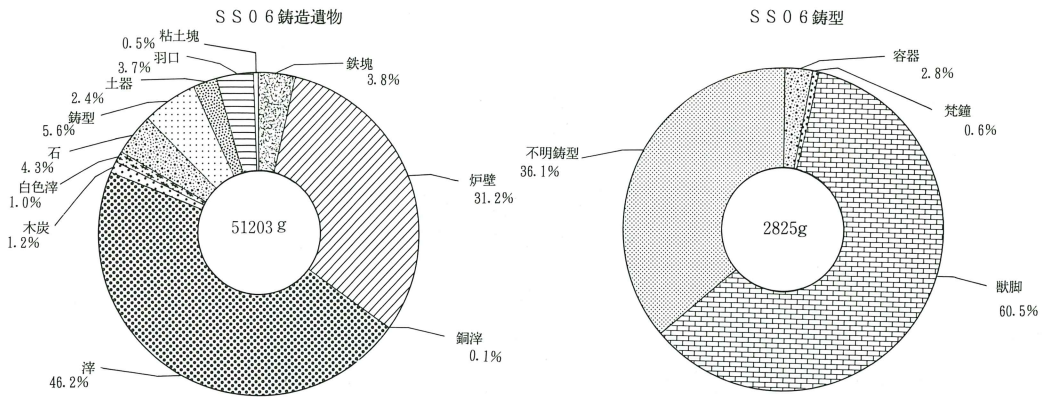
鑄型種類は、容器83g、梵鐘18g、獣脚1818g、不明906gを計量し、全体量は少ないが比率的には獣脚鑄型を多く検出した。また、グリッドから梵鐘鑄型を一片18g検出した。鑄型から判断して第6鑄造遺構群は獣脚の付く仏具容器製品の生産を行っていたものと考えられる。

炉壁は1～4である。1～3は溶解面をもたないことが特徴と言える。素材は粘土で素焼きされている。形態は上面に幅6cm程の平坦面をもち厚さ10cmのドーナツ型の炉台の一部と考えられる。4は溶解炉の頂部で「上こしき」と呼ばれる部分の破片と考えられる。素材は粘土であり、上端および下端にはそれぞれ平坦面をもつ。上端の残存幅は3.0cmで赤褐色をしている。下端の残存幅は4.5cmで青灰色をしている。下端部分は「こしき」と接するものと考えられる。内面は溶解物の付着は見られず、粘土表面を指ナゲた痕をそのまま残す。また、還元されたため色調は青灰色である。裏面は炉壁粘土の一部が剥離している。

羽口は5・6である。羽口は粘土で造られ、形態は円筒形をした大口径と考えられる。内面は赤褐色でナゲ整形され、外面は湯滓の付着が見られる。先端は幅1.2cm程の面を残しザラザラした青灰色の還元状態になっている。湯滓の付着面とは状態が異なり羽口先端の特徴である。内寸の羽口径は5で12.0cm、6で10.4cmである。

鑄型は7から20までであり、18は不明であるが、その他は大型の獣脚鑄型である。この内12・13・20は合わせ蓋と見られる。10は外型右側面に幅2.0cm、厚さ1.1cmの粘土紐がはり付いて残る。12の合わせにも同様の粘土紐が付いている。このことから、獣脚鑄型は獣面の模様の付く箱型の外型と合わせ蓋は粘土紐によって固定されていたことが窺える。11は、両端が欠けた未使用の獣脚鑄型である。胎土は、1mm以下の不透明な白色粒子を中心に白っぽい有色砂粒を1/2程含む砂質土である。スサは入らないが0.5mm程の径をもつ微細なスガ認めらる。内側は獣脚端部を示す外型である。文様は7本の長軸方向へ向かう「V」字状のすじから、こぶ状の突出部をへて4条のキザミとなる。獣脚下端部と考えられる。裏面中央の背面部分は、最大深さ1.6cm程が被熱の結果発泡し、稜の片側は厚さ5mm程が溶解し、やや流動気味である。また、その部分に限り1.2cm程の木炭痕が2箇所認められる。色調は、内側の獣脚面から蓋の接合部にかけて赤褐色に酸化しており、それ以外は発泡部分も含めて灰色に熱変化している。本資料のように外面が発泡し、内面の獣脚片面近くまで還

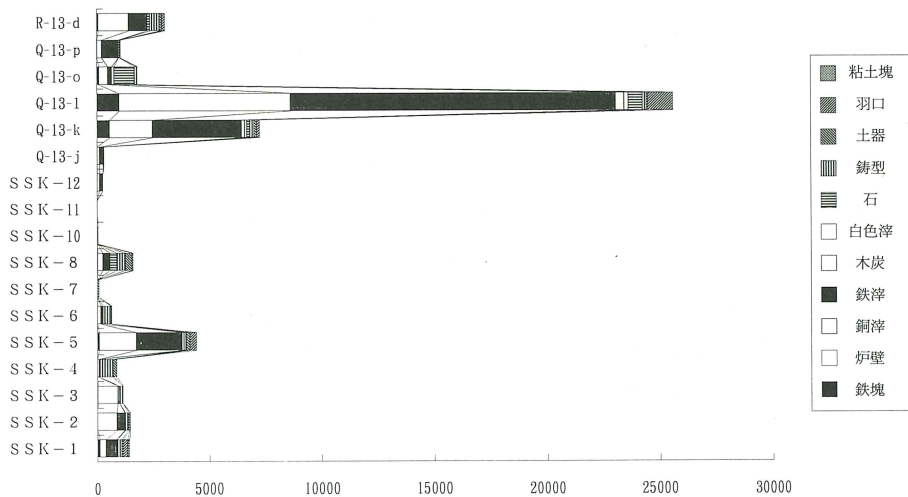
第24表 第6群鑄造遺構群遺物計量表(1)



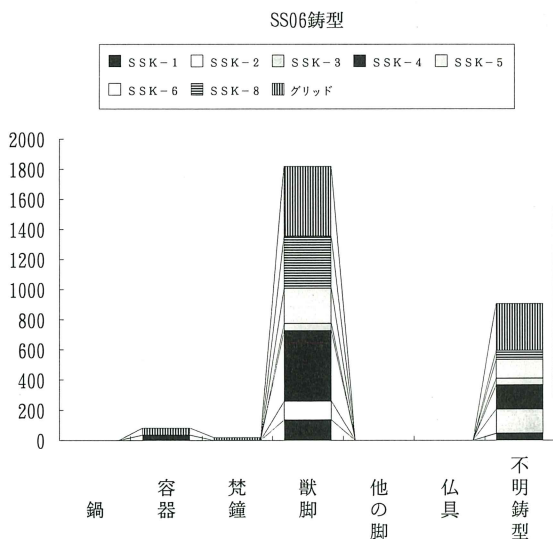
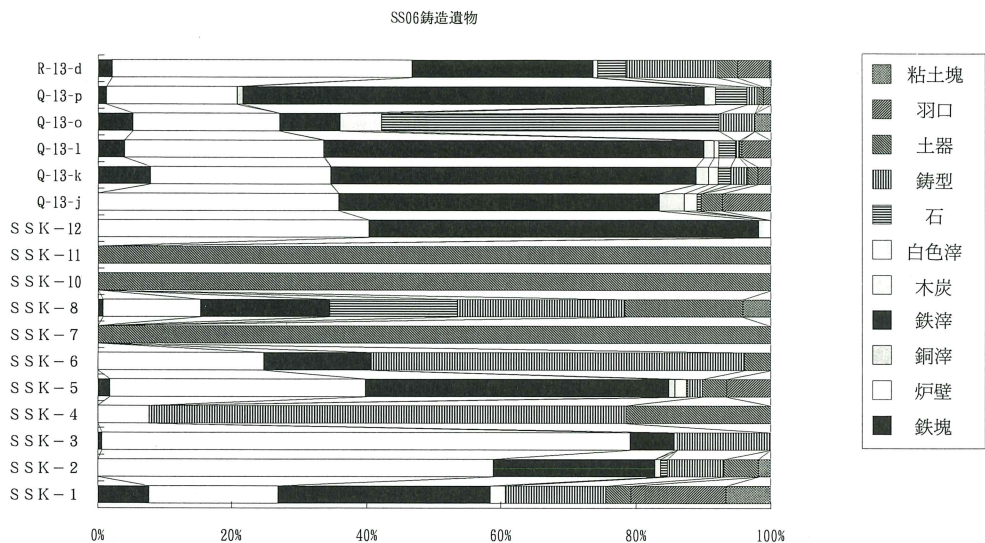
小番号	鐵塊	炉壁	銅滓	鐵滓	木炭	白色滓	石	鑄型	土器	羽口	粘土塊
SSK-1	110	279	0	456	0	32	2	213	54	205	95
SSK-2	0	875	0	356	0	13	15	125	75	0	27
SSK-3	7	915	0	78	5	0	0	161	0	0	0
SSK-4	0	67	0	0	0	0	0	627	190	0	0
SSK-5	80	1680	2	1998	40	75	11	95	160	286	0
SSK-6	0	160	0	102	0	0	0	358	25	0	0
SSK-7	0	0	0	0	0	0	0	0	90	0	0
SSK-8	12	238	0	312	1	0	310	405	286	0	67
SSK-10	0	0	0	0	0	0	0	0	36	0	0
SSK-11	0	0	0	0	0	0	0	0	18	0	0
SSK-12	0	110	0	158	5	0	0	0	0	0	0
Q-13-j	0	115	0	153	12	6	2	0	10	23	0
Q-13-k	563	1940	3	3927	133	104	129	186	105	140	0
Q-13-l	1004	7600	48	14418	380	186	615	166	80	1102	0
Q-13-o	95	404	0	164	0	112	925	96	0	0	44
Q-13-p	14	212	10	742	18	0	50	19	8	12	0
R-13-d	66	1371	0	828	20	0	126	374	90	145	6
合計	1951	15966	63	23692	614	528	2185	2825	1227	1913	239

小番号	鍋	容器	梵鐘	獸脚	他の脚	仏具	不明鑄型	日用品小計	仏具小計	鑄型合計
SSK-1	0	35	0	135	0	0	43	35	135	213
SSK-2	0	0	0	123	0	0	2	0	123	125
SSK-3	0	0	0	0	0	0	161	0	0	161
SSK-4	0	0	0	468	0	0	159	0	468	627
SSK-5	0	0	0	50	0	0	45	0	50	95
SSK-6	0	0	0	234	0	0	124	0	234	358
SSK-8	0	0	0	345	0	0	60	0	345	405
グリッド	0	48	18	463	0	0	312	48	481	841
合計	0	83	18	1818	0	0	906	83	1836	2825

SS06鑄造遺物



第25表 第6 铸造遺構群遺物計量表(2)



元気に熱変化している例は本遺構群の鑄型片に共通してみられる。こうした熱変化の推移は一度型焼きによって酸化焼成された鑄型が、鑄込みによるものではなく、二次的に加熱されたためと考えられる。これは内側の鑄型面の未使用状況と考え合わせると鑄型が他の用途に転用されたためによるものと見られる。

道具は21の半球状土製品と22の三叉状土製品を検出した。



第256図 第6 铸造遺構群出土遺物(1)

第6 群出土铸造遺物観察表 (第256・257図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
1	炉壁	9.9	6.5	9.9	605		第1号铸込みNo.4	炉1'
2	炉壁	8.5	9.3	7.3	460		第1号铸込みNo.7	炉1'
3	炉壁	5.0	8.0	6.9	275		第1号铸込みNo.3	炉1'
4	炉壁	18.7	18.0	4.4	1195		第1号铸込みNo.6	炉2
5	羽口	4.7	7.5	3.4	75	直径(12.0)	SSK 5	羽口
6	羽口	5.1	7.7	5.0	100	直径(10.4)	SSK 5 No.4	羽口



第257图 第6 铸造遺構群出土遺物(2)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
7	獣脚	9.0	6.5	3.7	199		S S K 4 No.16	鋳型
8	獣脚	5.4	6.8		100		S S K 8 No.1	鋳型
9	獣脚	5.9	3.9	5.5	90		S S K 8 No.2	鋳型
10	獣脚	6.5	5.0	5.8	154		S S K 6 No.3	鋳型
11	獣脚	7.6	5.5	5.2	135		R-13-d-5 分析資料No.35	鋳型
12	獣脚 合わせ	8.1	6.5	2.4	140		S S K 2 No.1 R-13-d-5	鋳型
13	獣脚 合わせ	6.9	5.5	2.5	100		S S K 4 No.19	鋳型
14	獣脚	4.4	3.6	3.9	50		S S K 4 No.4	鋳型
15	獣脚	4.9	2.9	2.5	47		S S K 4 No.17	鋳型
16	獣脚	5.5	3.3	1.6	25		S S K 8	鋳型
17	獣脚	4.0	3.1	3.1	20			鋳型
18	不明	3.0	6.3	2.5	40		S S K 5 No.5	鋳型
19	獣脚	3.2	4.0	2.4	28		S S K 6	鋳型
20	獣脚 合わせ	4.0	3.0	2.5	35		S S K 1	鋳型
21	半球状土製品	5.7		4.1	116	直径6.5	S S K 5 No.3	土器
22	三叉状土製品			3.3	35		S S K 2 覆土	土器

第26表 第6 鋳造遺構群一覧表

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向
SS-06 SSK01	SS-06 SK01	R-13-d	円形	1.55		0.29	N-1°-W
SSK02	SK02	R-13-d	円形	0.97		0.33	N-10°-W
SSK03	SK03	Q-13-p	円形	1.07		0.08	N-1°-E
SSK04	SK04	R-13-d	菱形	1.00		0.18	N-10°-W
SSK05	SK05	R-13-d	円形	1.10		0.15	N-1°-W
SSK06	SK06	Q-13-p	楕円形	1.55		0.22	N-9°-W
SSK07	SK07	Q-13-l	円形	0.55		0.25	N-9°-W
SSK08	SK08	Q-13-o	楕円形	1.58	1.32	0.48	N-30°-W
SSK09	SK09	R-13-d	楕円形	1.22	0.90	0.46	N-1°-W
SSK10	SK10	R-13-d	円形	1.14		0.22	N-1°-E
SSK11	SK11	Q-13-k	隅丸長方形	1.34		0.28	N-30°-E
SSK12	SK12	Q-13-l	楕円形	1.55		0.29	N-27°-W
第1号炉	第1号鋳込み	R-13-c	楕円形	2.86	2.80	0.24	

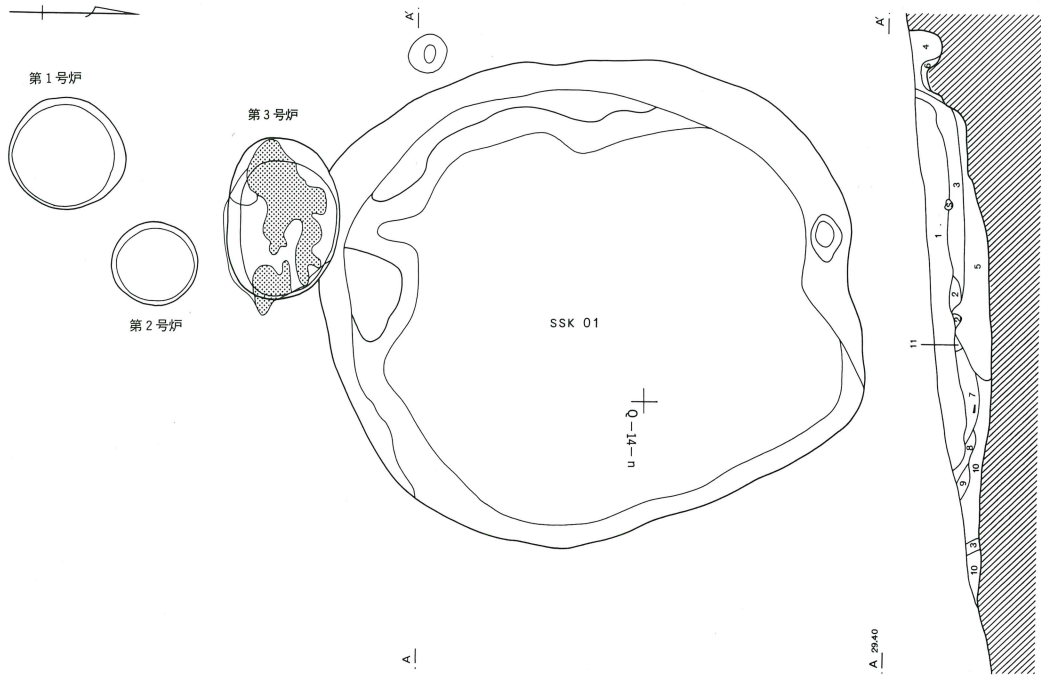
c 第7 鋳造遺構群

本群は、東側の二段からなる緩斜面に展開する第5～13鋳造遺構群の中でも南側に位置し、周辺には西側に第6 鋳造遺構群、東側に第10・12鋳造遺構群、北側に第5・8 鋳造遺構群が存在する。これらの第5～13鋳造遺構群は東側の2段からなる緩斜面に展開し梵鐘を始めとして小仏像、磬、飾り金具、獣脚等の仏具用品を生産している。本群はその中でも南側寄りのQ-14区、緩斜面上部にあたり、東側の斜をやや下った位置に第10鋳造遺構群の梵鐘鋳造土壌である第1号鋳造土壌が存在する。

検出遺構は第1号鋳造土壌と第1・2・3号炉、第1号廃滓である。

出土遺物は鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鋳型、土器、羽口の鋳造遺物を検出した。特に鋳型は梵鐘鋳型のみ12634gを計量した。

このことは、本遺構群が梵鐘鋳造に関わっていたことが窺える。



- | | |
|---|--|
| <p>1 暗褐色土 焼土粒子 (径5~10mm)、炭化粒子 (径5~23mm)、小砂利多く含み、きめ粗雑。</p> <p>2 暗褐色土 ややしまり、粘性もつ。</p> <p>3 暗褐色土 炭化粒子 (径5mm)、焼土粒子 (径2~5mm) を含み、しまり強くきめやや細かい。</p> <p>4 暗褐色土 ややきめ細かくしまり強い。</p> <p>5 黄褐色土 ローム粒子を含み、しまりもつ。</p> | <p>6 黄褐色土 やや明るい。</p> <p>7 明褐色土 1に近似するが、やや暗い。焼土・炭化粒子を含む。</p> <p>8 砂 利 小砂利を主体。</p> <p>9 砂 礫 砂礫を多く含む。</p> <p>10 褐色土 焼土粒子 (径2~5mm)、砂利を含み、きめ粗雑。</p> <p>11 砂質土</p> |
|---|--|

0 2m

第258図 第7 铸造遺構群全体図

遺構

第1号铸造土壤 (第259図)

形態は南北方向にやや長い隅丸長方形をしている。規模は南北4.40m、東西3.80m、深さ56.9cmである。土壤は鉄滓や銅滓、炉壁片を多く含む廃滓とも堆積層とも見られる土に覆われ平面形態の検出は当初できなかった。これらの廃滓遺物を1mメッシュの小グリッドで取上げ徐々に掘り下げていくが、滓を含んだ土は非常に硬くしまっており、幾度となく鉄滓や炉壁片を掘り出すため移植ごては折れ曲がり、手ばちを使っても思うように掘り進められない。終いには移植ごてを持つ手にまめができ、手首がしびれる始末である。

確認面から傾斜面に合わせて全体に20cm程掘り下げたところで西側の土壤平面形が確認でき、かなり北側に広がる大きな土壤であることが判断できた。しかし、この時点でも東側の形状ははっきり掴めなかった。そこで、最初に設定した断面観察用のベルトに沿ってトレンチを開け底面までの

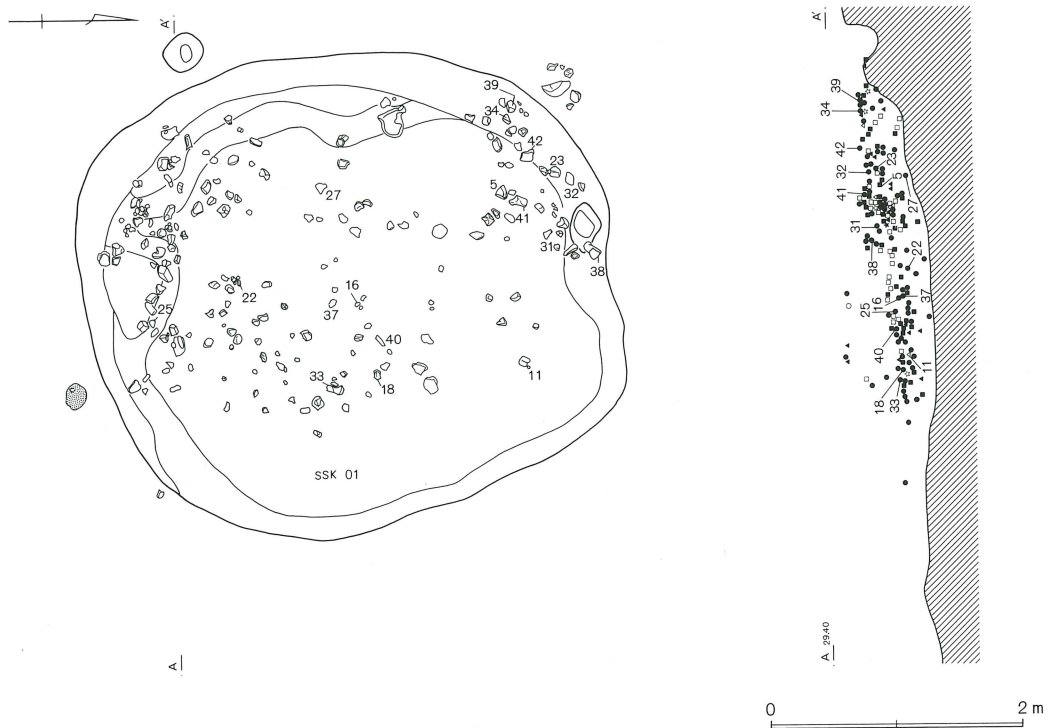
深さと東側の立ち上がりの確認作業を進めた結果、底面は廃滓層から70cm程でほぼ平坦面を検出。東側は立ち上がりがなく断面「L」字状の掃き出し型であることを確認した。こうして土壌の形態・規模を掴んだところで、再び、10cm程掘り進むと鉄滓や炉壁片に混じって今度は梵鐘の鋳型片を多く出土するようになった。

土壌は小砂利や礫を含む地山のローム土を「L」字状に切り込んで造られており、東側は地山のローム面と同じ高さに底面は掘り込んでいた。中央のわずかに一段掘り窪められた平坦面は焼土粒子、炭化物片が残存している。

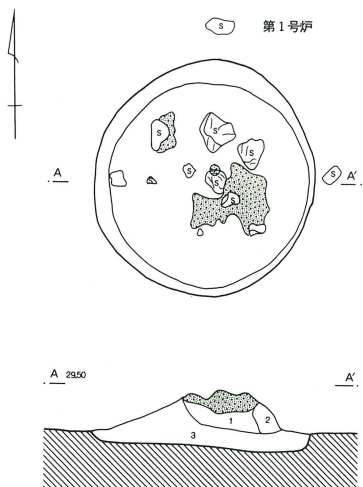
本遺構は梵鐘鋳造鋳込み土壌と考えるのか、あるいは、作業場にあたるかと考え、これに伴う鋳込み跡は第10号鋳造土壌群内の第1・5号鋳造土壌があたると考えてよいのか不明である。

第1号炉 (第260図)

第1号鋳造土壌を覆っていた廃滓堆積層と同じ面で確認した。12~15cm程の石を数個まとめて検出。中央部に炉壁を伴っていた。形態は浅い円形をし、径0.93m、掘り方深さ6cmである。断面観察によると覆土は焼土・炭化粒子を含む掘り方埋土の第3層を基盤にして第1・2層の粘性土が上面を覆っている。その上に崩壊した炉壁片の残片を検出した。出土遺物は鉄塊8g、炉壁1085g、鉄滓95gである。石については計量できなかった。

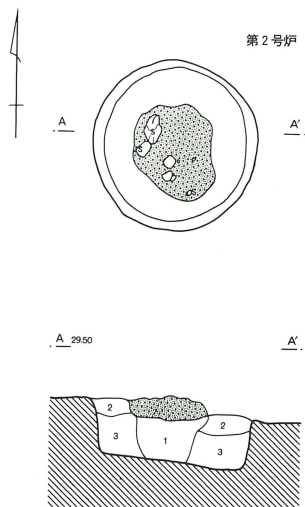


第259図 第7群第1号鋳造土壌



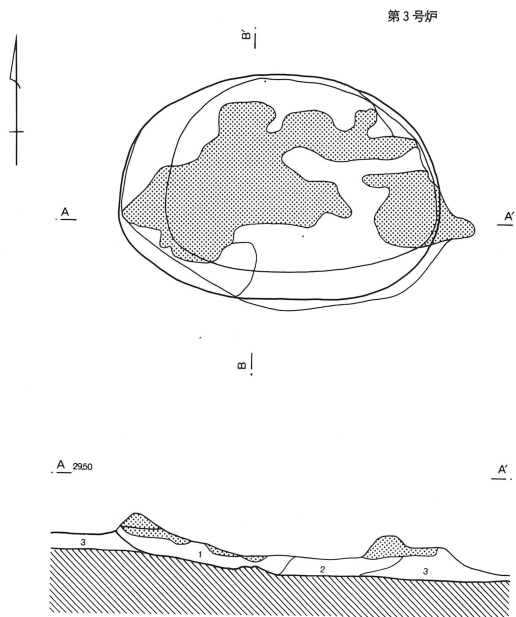
第1号炉

- 1 暗褐色土 焼土・炭化粒子を含み、しまりややもつ。
- 2 暗褐色土 1に比べて、明るく粘性をもつ。
- 3 黒褐色土 焼土・炭化粒子含む。しまり強い。



第2号炉

- 1 暗褐色土 焼土・炭化粒子を多く含む。
- 2 暗褐色土 焼土・炭化粒子含み、しまりもつ。
- 3 黒褐色土 焼土・炭化粒子含み、しまり強い。



第3号炉

第3号炉

- 1 砂質土 砂を主体。しまり、粘性なく、きめ細かい。
- 2 暗褐色土 炭化材を多く含み、炉内部の覆土と考えられる。
- 3 黒褐色土 砂利、焼土・炭化粒子を含み、しまり強い。

0 1 m

第260図 第7群第1～3号炉跡

第2号炉 (第260図)

第1号炉と第3号炉の中間に位置する。第1号炉と同様第1号鑄造土塊を覆っていた廃滓堆積層と同じ面で確認した。8～12cm程の石を数個検出。中央部に炉壁を伴っていた。形態は浅い円形をし、径0.67m、掘り方深さ25cm程である。断面観察によると覆土は焼土・炭化粒子を含む掘り方埋土のしまりをもつ第3層を基盤に焼土・炭化粒子を含む暗褐色土が堆積している。その上に崩壊した炉壁片の残片を検出した。出土遺物は鉄塊15g、炉壁60g、鉄滓138g、木炭10g等である。

第3号炉 (第260図)

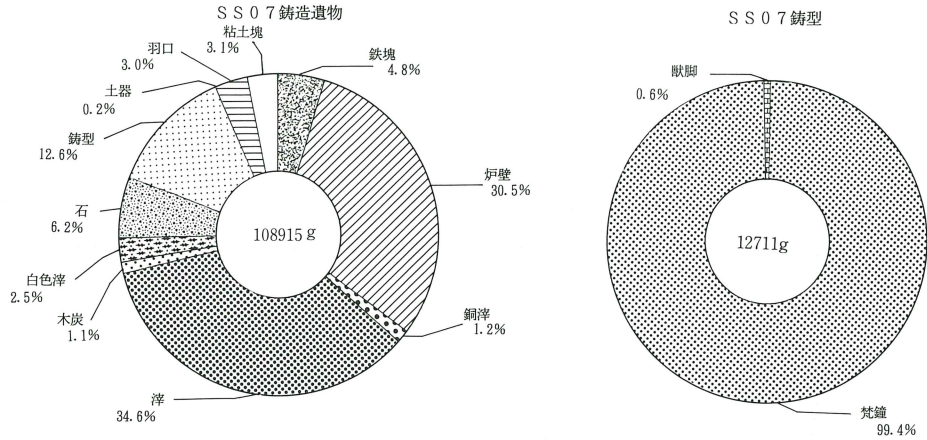
第1号鑄造土塊の南側上部にあたる。第1・2号炉と同様に廃滓堆積層と同じ面で確認した。砂質土を主体として、その中心には鉄滓が広がって検出された。形態は楕円形である。長軸1.27m、短軸0.90m、掘り方深さ7.5cmである。断面観察によると、砂利、焼土・炭化粒子を混在するしまりをもった堆積土の地山を掘り込んで、炭化材を多く含む暗褐色土と砂質土が認められた。出土遺物は鉄滓155gを計量した。

遺物

鑄造遺物は全て分類し計量を行った。その結果、鉄塊5330g、炉壁33618g、銅滓1351g、鉄滓38137g、木炭1222g、白色滓2702g、石6866g、鑄型12711g、土器246g、羽口3267g、粘土塊3465gを計量した。遺物の大半は第1鑄造土塊から出土したものである。特徴としては鑄型の殆どが梵鐘鑄型で占められ、わずか77gだけ獸脚鑄型であった。また、銅滓と考えられるやや緑色気味の滓やブルー色の滓、そして、緑青の吹く滓を検出した。この銅滓と共に白色滓の検出が特徴である。

炉壁は、いずれも溶解炉の破片である。素材は粘土を基にして砂粒子、小石、滓片、鑄型片、焼土塊、黒鉛化木炭等周辺の混在物を多く取り込んで混ぜている。1は大きい破片である。表面は溶解物が厚く付着し、径0.1～1.7cmの大小さまざまな気泡痕を全面にもつ。上下方向の湯滓の流れが認められる。色調は灰褐色で白色滓と同質の滓が全体に付着している。裏面は横方向の弱いナデによって整形された茶褐色の粘土面である。3は、表面が灰白色に発泡し、全面に4mm以下の円、あるいは楕円の気泡痕(ガスの抜け穴がクレーター状に残る)をもつ溶解炉の炉壁片である。側面は直線状の6つの破面に囲まれており、その破面には2枚の湯滓(発泡)層が見られる。裏面は灰褐色、次に暗紅色の砂質の酸化面が残る。ごく少量ながら、板状でスジ目の弱い、1.5cm以下の短いスサが混入されている。又、ガラス質の滓小片も若干点存在する。側面の破面の内、下面のみが内側から半分程溶解しており、壁の輪積部の収縮に沿ったヒビ割れ部分が溶解したものと推察される。なお、下端部の内面は、発泡したガスの抜け穴が大きく、上端部ではごく小さい。このことから本資料は、炉床中心よりやや上がった、胴部下端から底部に移行する部分の炉壁片であろうと見られる。内面の発泡部表面や側面の破面には、2～5mm大の褐色の鉄錆が付着しているのも特色である。裏面には、こうした現象は全くなく、この状態は土中で二次的に固着したものは少ないと見られる。なお、少なくとも発泡した溶解面が2枚は認められるため、内張りの補修を行い、溶解炉として再度使用されているものと判断される。内張りされた壁の溶け残りの厚さは、薄いところで1cm、厚いところ

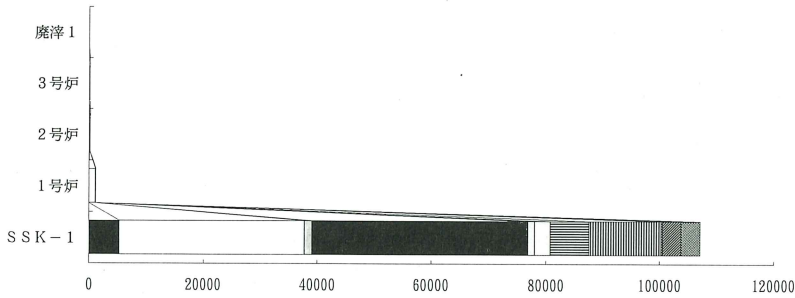
第27表 第7 铸造遺構群遺物計量表(1)



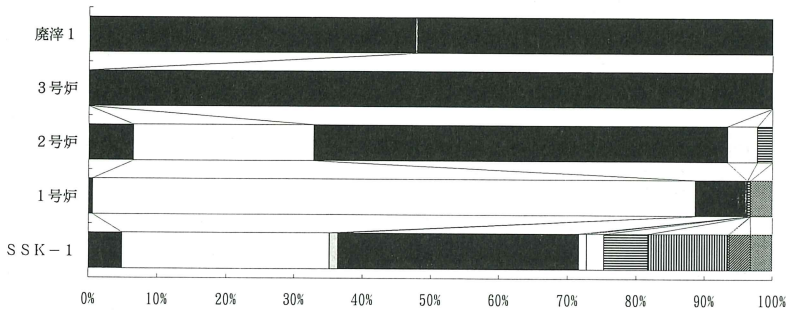
小番号	鉄塊	炉壁	銅滓	鉄滓	木炭	白色滓	石	鑄型	土器	羽口	粘土塊
S S K - 1	5287	32473	1351	37727	1212	2702	6856	12711	246	3267	3425
1号炉	8	1085	0	95	0	0	5	0	0	0	40
2号炉	15	60	0	138	10	0	5	0	0	0	0
3号炉	0	0	0	155	0	0	0	0	0	0	0
廃滓1	20	0	0	22	0	0	0	0	0	0	0
合計	5330	33618	1351	38137	1222	2702	6866	12711	246	3267	3465

小番号	鍋	容器	梵鐘	鉄脚	他の脚	仏具	不明鑄型	日用品小計	仏具小計	鑄型合計
S S K - 1	0	0	8667	0	0	0	0	0	8667	8667
SSK-1ケラット	0	0	3967	77	0	0	0	0	4044	4044
合計	0	0	12634	77	0	0	0	0	12711	12711

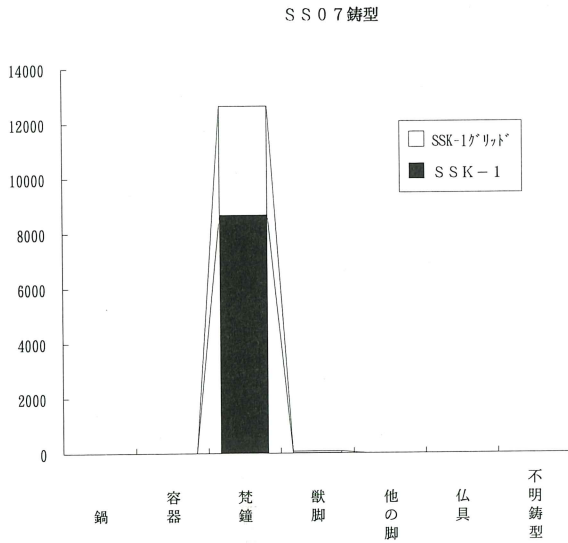
S S O 7 铸造遺物



S S O 7 铸造遺物



第28表 第7 鑄造遺構群遺物計算表(2)



ろで約2cmである。一応、発泡部分の厚い方を下と考えておすが、破面の灰白色に発泡した部分の一部は、3枚の可能性もある。溶解した壁面のうち、表層2mm程が特に灰白色化しており、その内側の滓化した部分は灰褐色である。4・6の炉壁も同様である。5は表面黒色で光沢をもつ。還元された部分がやや薄く「L」字状の形状をしている。2方向に見られる粘土は胎土が異なる一方は炉壁胎土の外側に見られるやや荒めの滓、焼土、鑄型片、砂粒等を含む粘土で、もう一方はきめ細かく滓、砂粒を混在させている。これらのことから、溶解炉炉壁でも送風の当る位置で羽口装着のため炉壁に窓を開けた部分の可能性が考えられる。

羽口は、7～10である。形態はいずれも小破片であるが羽口先端部を残し、円形の大型羽口と考えられる。素材は粘土で砂粒子・径0.03mm程の細かい鉄滓粒・径2mmの石を混在する。外面には流動質の湯滓が0.2～1.0cm程の厚さで付着している。色調は鈍い黒色か紫紅色である。内面は黄褐色の粘土が残るが溶解時の高温および冷却等の要因で歪みと粘土のヒビ割れを起こしているのが特徴である。

土器は、12・13の常滑焼きを検出。12は片口鉢底部である。底部平たく、体部は下から上方向に木口状工具によるケズリを施す。内面は平滑であり、見込部分を指頭で調整した際の凹みをもつ。13は甕底部である。底部平たく、体部は下から上方向にケズリを施す。内面には自然釉が付き平滑。

道具は、14の円盤状土製品を検出。断面形態は上下が左右に突出して中央部に凹みをもつ。手づくね成形である。上面は被熱され還元化している。胎土は砂粒子と短い白色針状物質を含んでいる。

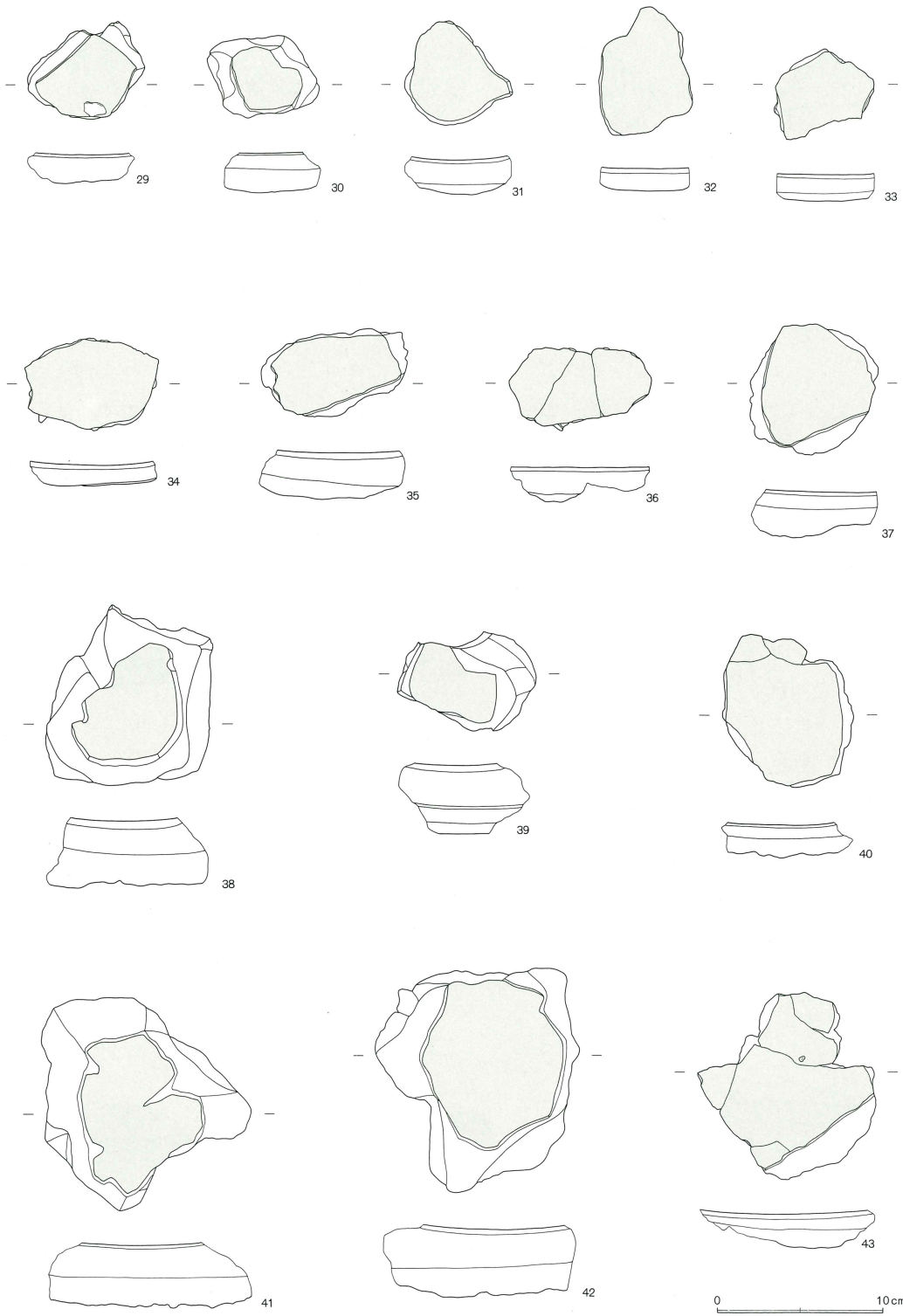
鑄型は、15～44が梵鐘鑄型である。検出した部位は笠型・撞座・横帯・駒の爪・素文の池の間等の部分である。梵鐘鑄型は基本的には本体部分を基型によって製作されている。このため、横方向の同心円で挽かれ、鑄型面に基型の条線が残っている。龍頭や撞座、乳は別作りであり、それぞれ



第261図 第7 铸造遺構群出土遺物(1)



第262図 第7 鑄造遺構群出土遺物(2)



第263図 第7 鑄造遺構群出土遺物(3)

の抜型を使用して製作し、後から梵鐘本体の鑄型を切り抜いて埋め込むという方法が取られたと考えられる。基型と抜型とでは、鑄型胎土が異なる。基型では、外側から荒真土、中真土、仕上げ真土の順で粘土が塗り込まれる。荒真土は厚さ1.7~2.0cm程で暗茶褐色の土に砂粒子、小石、滓片、焼土塊、鑄型片等の混入物が多く見られきめが荒い。中真土は0.5~1.0cmの厚みをもち鈍い黄褐色をしている。きめやや細かく砂粒子、小石、滓片を混入する。仕上げ真土は0.1~0.3cmの厚味をもちきめ細かい。鑄込んだ際に溶解物が直接流れ還元状態になるため、器肌面は青灰色になる。44の撞座鑄型は抜型で製作されている。

15~20は駒の爪部分の破片であると考えられる。特徴としてこの部分に柔らかい膨らみをもつ横帯が巡っている点である。21~23は笠型である。特徴として笠型の上部は扁平で急激に屈曲して笠型下部に至る形態と考えられる。27は横帯が巡る。25~43は素文であることから池の間等の部分と考えられる。44は抜型による撞座である。撞き木を受けるために設けられた蓮華文様の部分で文様意匠は複弁八葉蓮華文と推定される。蓮弁部分は欠損しやや膨らみをもつ子葉が中房部分に接する。中房の推定径6.0cm、この内、薬幅は1.1cmである。薬は細かい条線が放射状に伸び、外縁に堺線を挽き薬先端に蓮珠を表現している。

45は獣脚鑄型である。形態は小型で断面形は「凹」型をしている。製作法は抜型によると考えられ、あらかじめ、獅噛みの形を木彫りしたものを粘土に型押しをする。裏面は製作台の上に乗せられているためか平坦である。側面もやや内傾気味に成形されわずかながら曲線的に立ち上がっている。このことは、抜型を押すときや抜くときに側面に力がかかること、そして、合わせ蓋を固定させるときの粘土で押さえられることなどが要因として考えられる。本遺物は齒と右端部に牙が見られ中央に膝頭を表現したと考えられる2本の沈線が施されている。胎土は緻密で砂粒子を含む。色調は茶褐色で、還元面は青灰色である。

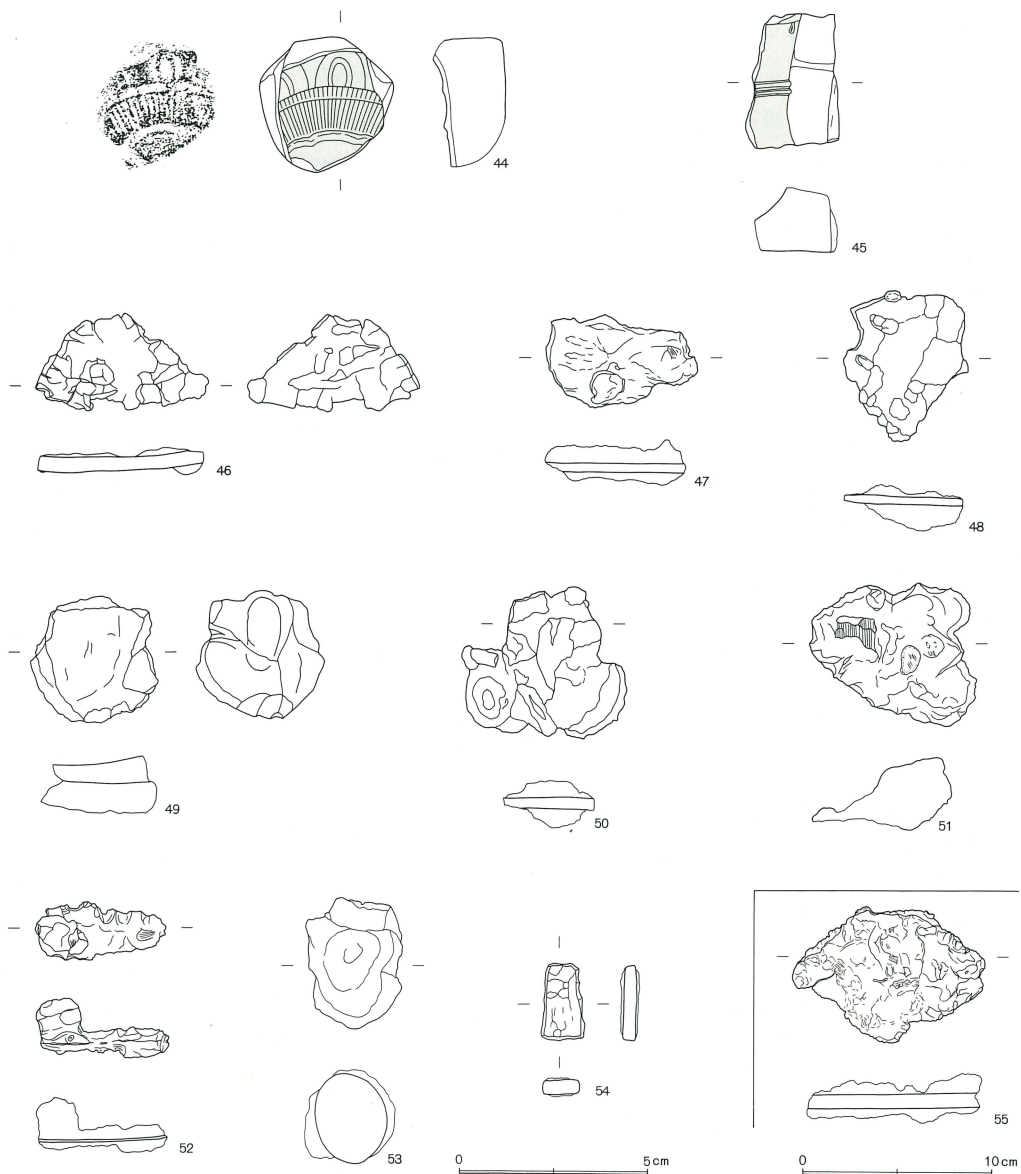
第7群出土遺物観察表 (第261~264図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他	産地
12	鉢		3.7	9.5	D I	A	褐色	20%	Q-14	常滑
13	甕	28.4	2.5	8.0	D I	A	灰色	15%	S S K 1	常滑

第7群出土鑄造遺物観察表 (第261~264図)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
1	炉壁	18.2	15.8	5.9	1710		S S K 1	炉3
2	炉壁	2.2	4.6	2.2	20	直径(14.4)	Q-14-n-7	炉1
3	炉壁	10.2	13.7	4.2	410		S S K 1 分析資料No.9	炉1
4	炉壁	5.0	8.0	5.1	150		Q-14-i-8	炉3
5	炉壁	7.0	5.2	3.8	100		S S K 1 No.123	炉1
6	炉壁	6.2	12.8	5.9	340		S S K 1	炉1
7	羽口	6.9	8.8	4.1	120	直径(14.6)	Q-14-i-6	羽口
8	羽口	5.8	4.8	1.5	20	内径3.1	Q-14-i-4	羽口
9	羽口	5.5	5.2	1.6	55	内径6.5	Q-14-i-8	羽口
10	羽口	6.9	7.0	3.0	90	直径(14.8)	Q-14-m-2	羽口
11	羽口	7.7	8.0	1.5	100	内径11.4	S S K 1 No.111	羽口
14	円盤状土製品	4.0	4.1	2.4	30		No.1 Q-14-i-9	土器
15	梵鐘	3.3	4.2	1.2	19		Q-14-i-8	鑄型

鉄塊は、46～55である。46は、三角形の平面形を持ち、放射割れの目立つ薄い鉄片である。ごくゆるく内側に湾曲し、上下方向はほぼ直線状である。赤錆は全体に見られ、部分的に黒錆や白色の錆、さらに茶色の水状の酸化液が滲んでいる。片面の7割程が錆ぶくれによって剝離しており、色調は、全体に茶褐色で部分的に黒褐色である。鍛造品か、鋳造品かは不明である。49は、直線状の4ヶ所の破面に囲まれた、ゆるく内側に反る鉄片である。中核部の鉄片は、厚さ4mm程で、端部に放射割れがやや見られるものの、全体にはしっかりしている。ゆるい内反りの横断面や上下方向にもやや内反り気味である点などを加味すると、鋳造品の体部破片の可能性が強い。色調は鉄部分は黒褐色。部分的に赤褐色の錆が広がる。端部に鉄表面の黒錆化した部分が認められ、0.2mm程の気孔が若干見られる点も鋳造品を窺わせる。55は金属分の非常に多く残す鉄塊である。



第264図 第7 鋳造遺構群出土遺物(4)

番号	遺物種類	長さ	幅	厚さ	重さ	他の測値	備考	分類
16	梵鐘	3.0	5.6	2.3	50		S S K 1 No88	鑄型
17	梵鐘 笠形	3.6	2.5	2.4	24		Q-14-i-6	鑄型
18	梵鐘	2.9	5.3	2.3	40		S S K 1 No99	鑄型
19	梵鐘	2.6	3.2	1.9	26		Q-14-i-6	鑄型
20	梵鐘	2.1	3.5	0.9	10	横帯幅0.5		鑄型
21	梵鐘 合わせ	3.2	4.8	2.8	132		S S K 1	鑄型
22	梵鐘	2.3	4.5	1.1	10	横帯幅0.5	S S K 1 No82	鑄型
23	梵鐘 笠形	6.1	7.5	1.1	94		S S K 1 No141	鑄型
24	梵鐘 笠形	4.8	5.3	2.7	75		S S K 1	鑄型
25	梵鐘	5.0	7.1	2.0	47		S S K 1 No28	鑄型
26	梵鐘	6.4	9.3	3.7	255		Q-14-i-8	鑄型
27	梵鐘 横帯	6.1	6.0	1.5	48		S S K 1 No161	鑄型
28	梵鐘	5.2	7.1	2.1	73		S S K 1	鑄型
29	梵鐘	4.9	5.1	1.8	58		S S K 1	鑄型
30	梵鐘	3.7	4.0	2.5	69		Q-14-i-8	鑄型
31	梵鐘	6.0	5.7	2.2	69		S S K 1 No150	鑄型
32	梵鐘	7.5	5.5	1.3	55		S S K 1 No142	鑄型
33	梵鐘	4.3	5.8	1.7	43		S S K 1 No96	鑄型
34	梵鐘	5.4	7.8	1.3	56		S S K 1 No132	鑄型
35	梵鐘	4.3	7.8	2.8	115		S S K 1	鑄型
36	梵鐘	4.7	8.5	2.1	60		Q-14-i-8	鑄型
37	梵鐘	7.1	6.8	2.8	85		S S K 1 No85	鑄型
38	梵鐘	6.8	6.3	4.2	380		S S K 1 No154	鑄型
39	梵鐘	3.9	5.3	4.2	130		S S K 1 No134	鑄型
40	梵鐘	7.6	7.2	2.0	110		S S K 1 No156	鑄型
41	梵鐘	9.3	7.1	3.7	460		S S K 1 No124	鑄型
42	梵鐘	10.1	8.5	4.1	57		S S K 1 No139	鑄型
43	梵鐘	9.5	10.3	2.1	175		S S K 1	鑄型
44	梵鐘 撞座	3.5	3.6	1.9	20		Q-14-i-8	鑄型
45	獸脚	3.5	2.5	2.1	15		Q-14-m-9	鑄型
46	鉄塊系遺物	2.9	3.4	0.6	10.3		S S K 1 分析資料No31	塊1
47	鉄塊系遺物	2.4	4.0	1.1	9.7		S S K 1	塊2
48	鉄塊系遺物	3.9	3.2	1.0	12.4			塊2
49	鉄塊系遺物	3.3	3.2	1.6	24.1		分析資料No32	塊2
50	鉄塊系遺物	4.0	4.2	1.2	22.0			塊2
51	鉄塊系遺物	3.5	4.0	1.7	22.6			塊2
52	鉄塊系遺物	1.5	3.4	1.2	3.1		S S K 1	塊2
53	鉄塊系遺物	3.3	2.4	2.3	35		S S K 1	塊1
54	鉄塊系遺物	1.9	0.9	0.3	3.4		Q-14-i-4	塊1
55	鉄塊系遺物	6.8	10.0	2.0	149.4		S S K 1	塊1

第29表 第7 鑄造遺構群一覽表

新番号	旧番号	位置	形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向
SS-07 SSK01	SS-07 SK01	Q-14-m	隅丸長方形	4.40	3.80	0.56	N-5°-W
第1号炉	1号炉	R-14-a	円形	0.93		0.06	
第2号炉	2号炉	R-14-a	円形	0.67		0.25	
第3号炉	3号炉	Q-14-m	楕円形	1.27	0.90	0.07	
第1号廃滓	第2廃滓	Q-14-m					

d 第8 鑄造遺構群

本群は第3区の中央部分にあたり東側第1斜面の肩部に位置する。遺構は台地の平坦部を竪穴状に切り込んで北壁から西・南壁を作り出し作業面は整地し、東側は壁を持たず地山と同じ高さで続く第4号鑄造土壌を形成している。この鑄造土壌内に第3号鑄造土壌を検出し、また、前面にあたる東の斜面部分には梵鐘鑄造土壌と考えられる第1号鑄造土壌を検出した。周辺には、東側に第5鑄造遺構群が、また、南側には第6鑄造遺構群が検出され、北側には第9鑄造遺構群が検出された。

本群は第1～4号鑄造土壌、第1・2号炉、焼土塊集中区、炉体1号、円形還元状遺構、そして、第4号鑄造土壌内で検出した第1～21号廃滓である。

出土遺物は鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鑄型、土器、羽口の鑄造遺物を検出した。特に鑄型は41111gを計量し、梵鐘鑄型が圧倒的に多く出土した。このことは、本遺構群が梵鐘鑄造に関わっていたことを示唆している。

遺構

第1号鑄造土壌（第267図）

東側の第一斜面部にあたる。東側には第5鑄造遺構群、南側には第6鑄造遺構群が存在する。土壌は鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鑄型、土器、羽口を含む赤褐色の焼土砂粒子層に覆われていた。特に、緑青の吹いた銅の微粒子が焼土砂粒の中に多く混じって検出された。本土壌はこの第2・3・4層の堆積層に覆われ平面形態の検出は当初できなかった。これらの層を順次取り除き遺物を1mメッシュの小グリッドで取上げ徐々に掘り下げた。主だった遺物は出土位置および出土の高さを記録した。第5層に達したところで土壌の形態を掴むことができた。このため、最初に設定した断面観察用のベルトは土壌の対角線上の断面観察を余儀なくされた。第5層中からも多くの鑄造遺物を検出したが、なかでも梵鐘鑄型片を多く出土した。

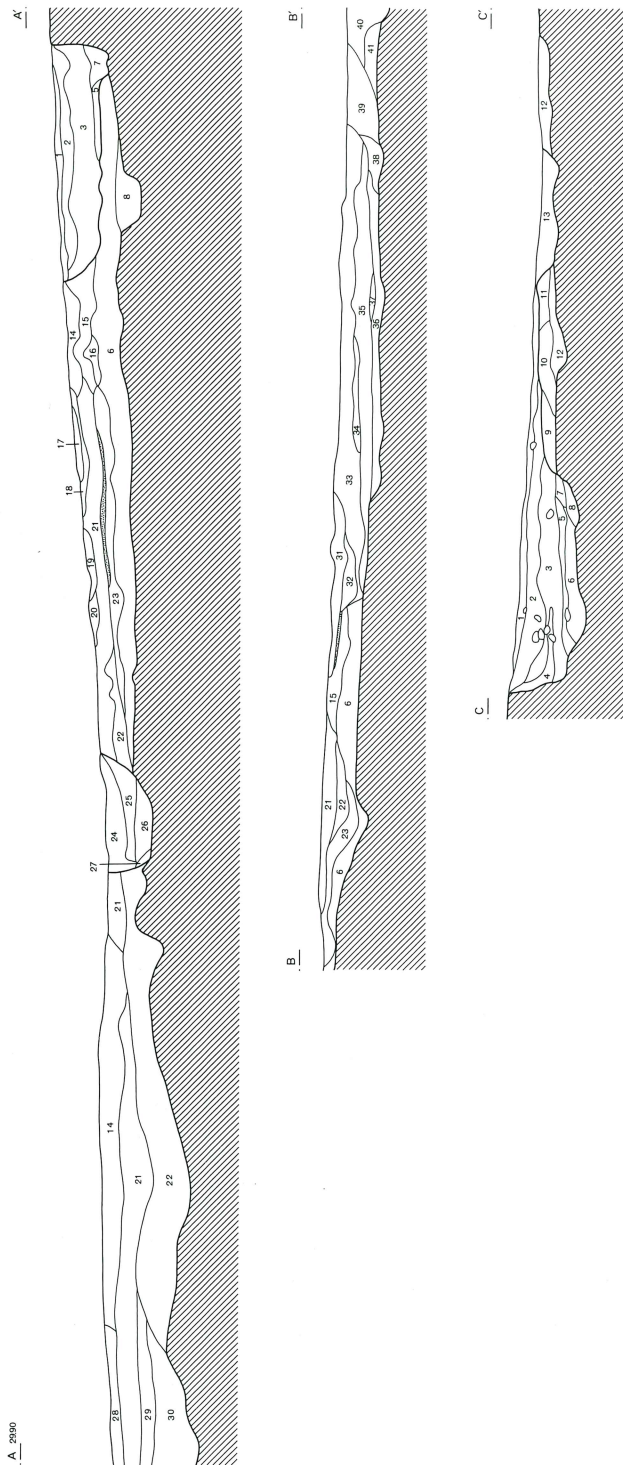
形態は方形をしており西側にテラスをもつ。掘り込みは深く地山の砂利混じりのローム層を抜いて礫混じりの砂利層を掘り込んでいる。底面は中央部が最も深く壁際は僅かに立ち上がる。また、北壁側は1段のテラスを、南壁側は2段のテラスをもつ。規模は南北3.210m、東西3.43mにテラス部分が0.64m、深さは最も深いところで1.00mである。

本遺構は梵鐘鑄造鑄込み土壌と考えられる。掘り込みが深く、周辺からは梵鐘鑄型や中子砂と考えられる焼土砂が多く検出していることから、おそらく梵鐘鑄型の型ばらしまで本土壌内において行われたものと推測できる。しかも、この規模の土壌からすれば大型の梵鐘が鑄込まれたと考えられ、鑄型製作における作業場としては整地作業面をもつ第4号鑄造土壌が想定される。

出土遺物は、鉄塊、炉壁、銅滓、鉄滓、木炭、白色滓、石、鑄型、土器、羽口等の鑄造遺物を多く検出した。中でも土壌内からは鑄型は第282図～283図の44～81(48～50は除く)に見られるように梵鐘鑄型が主体を占める。また、上層のグリッド出土鑄型には仏具の容器や獣脚、磬の鑄型を検出した。



第265図 第8 铸造遺構群全体図(1)



- 1 暗褐色土 焼土粒子、炭化物、廃滓を多量含み、やや砂質でハード。
- 2 暗褐色土 焼土粒子、炭化物、ローム粒子を少量含み、やや砂質でハード。
- 3 黒褐色土 炭化物を多量、焼土粒子を微量、廃滓をまばらに含み砂質。
- 4 黒褐色土 砂質ロームのブロックを疎らに含む。
- 5 暗褐色土 砂質ロームを多量含む。
- 6 黒褐色土 炭化物、焼土粒子を少量含み、非常に砂質。
- 7 暗褐色土 粒子の粗い砂質ロームを多量含む。
- 8 黒褐色土 ロームブロックを少量含み、やや粘性があり、砂質。
- 9 黒褐色土 廃滓、炭化物を多量含む。
- 10 黒褐色土 焼土・ローム粒子を微量含む。
- 11 黒褐色土 廃滓、炭化物多量含み、ややハード。
- 12 黒褐色土 廃滓を少量、ローム粒子を微量含む。
- 13 黒色土 砂を少量含む。
- 14 暗褐色土 焼土・ローム粒子、炭化物を少量含み、やや砂質でハード。
- 15 黒褐色土 非常に砂質。
- 16 黒褐色土 焼砂を多量、炭化物を少量含む。非常に砂質。
- 17 暗褐色土 粘土、焼土粒子を少量含む。
- 18 暗褐色土 焼土粒子を少量含み、砂質でハード。
- 19 暗褐色土 廃滓、焼土粒子を少量含む。
- 20 暗褐色土 焼土粒子、炭化物を少量含む。
- 21 黒褐色土 鋳型片、焼土粒子、炭化物少量含む。
- 22 黒褐色土 廃滓、焼土粒子を多量含む。
- 23 黒褐色土 焼土粒子、炭化物を少量含む。
- 24 暗褐色土 細礫、鉍滓、焼土・炭化粒子を多量含み、砂質が強い。
- 25 黒褐色土 炭化粒子を多量含み、砂質土、礫を少量含む。
- 26 暗黄褐色土 焼砂、焼土・炭化粒子を少量含む。砂質。
- 27 黒褐色土 炭化粒子を含む。
- 28 暗褐色土 細礫、焼土粒子、鉍滓や多く含む。
- 29 黒褐色土 細礫を多量、炭化粒子を少量含む。
- 30 暗黄褐色土 粘性が強く、礫を含む。(地山)
- 31 黒褐色土 炭化物、焼土粒子を含み、やや砂質。(伊壁廃棄壇)
- 32 黒褐色土 炭化物、焼土粒子を微量含む。しまりゆるい。
- 33 黒褐色土 焼土粒子、炭化物をまばらに含む。非常に砂質。
- 34 暗褐色土 焼砂を多量含む。
- 35 黒褐色土 炭化物、焼土粒子を含み、やや砂質。
- 36 黒褐色土 砂質でやや粘性がある。
- 37 黒褐色土 炭化物を多量含む。
- 38 黒色土 小砂利を含み、しまりよい。
- 39 黒褐色土 炭化物、焼土粒子を微量含み、ややしまりゆるい。
- 40 黒褐色土 小砂利を多量、焼土粒子を微量含む。
- 41 暗褐色土 小砂利、暗茶褐色ロームを含む。

第266図 第8 铸造遺構群全体図(2)

第2号鑄造土壌（第268図）

第8鑄造遺構群内の南側に位置する。形態は浅い円形をし、径0.67m、深さ10cmである。断面観察によると覆土は炭化物を多量に含む第1層が存在し遺構の性格を特徴づけている。出土遺物は炉壁と滓を少量検出した。

第3号鑄造土壌（第268図）

本土壌は第8鑄造遺構群の中心的な竪穴遺構である第4号鑄造土壌内の整地作業面に検出された。第4号土壌のほぼ中央にあたり形態は不整楕円形である。規模は長軸1.95m、0.83m、深さは整地面から10cmと浅い掘り込みをもつ土壌である。土壌は地山の砂利層を掘り込みこのため底面はほぼ平坦ではあるが全体が砂利である。断面観察によると覆土は焼砂・炭化物・焼土塊を含む赤褐色土で覆われ、部分的に焼土が堆積し地山の砂利は被熱され赤く焼けていた。また、土壌中央やや北寄りには凹みもちこの部分からは焼土粒子・炭化物に混じって滓を検出した。

出土遺物は鉄塊・炉壁・鉄滓の溶解及び廃滓遺物の割合が多く、鑄型の検出は見られない。

このことから、遺構の状態と考え合わせると溶解の関連遺構か或いは梵鐘鑄型等の型焼き炉とした施設の可能性が考えられる。

第4号鑄造土壌（第265図）

本土壌は第8鑄造遺構群の中心的施設である。同時に、東側緩斜面における梵鐘を初めとする仏具鑄造の中心的施設とも考えられる。本土壌内から検出された遺物は非常に多く、特に覆土中の遺物は二次的な廃滓が認められそれぞれの単位を第1号廃滓～第21号廃滓として捉え処理した。また、第1・2号炉および焼土塊集中区、炉体1号もこの第4鑄造土壌内に存在する。

第4号鑄造土壌は、覆土中に多くの廃滓層をもち、焼土層も確認された。このため、土層の堆積はかなり細かく認められ、西側の台地側から東側の斜面方向に堆積している。形態は、台地の東側緩斜面を竪穴状遺構に掘り込み北側から西及び南側にわたって壁をもち東側は掘り込み底面が地山と同じ高さであるため壁はなく開放されている。いずれの壁もほぼ直立気味に立ち上がっている。西側に「コ」の字状の張り出しをもっている。底面の状態はほぼ平坦に整地されている。断面観察による第6層は掘り方の埋土と考えられ、地山の砂礫層を全体に覆った整地層と考えられる。土壌の掘り方は第1鑄造遺構群の第1鑄造土壌に見られたように幅18～43cm、深さ5～16cmの溝が「L」字状に掘られていた。溝の方向は規則的で鑄造土壌の方向に沿っており、何れも東側の壁をもたない開放された斜面側に排水口をもっている。これらの溝は地山が砂礫層にもかかわらず作られている点で本土壌が防湿設備を必要とした作業場であったことが窺える。

円形還元状遺構（第268図）

第1鑄造土壌の西側にあたる。形態は円形のドーナツ状をした遺構と推定される。調査においては半円のみ残存し検出できた。上面は平坦で青灰色をした還元状態である。幅20cm前後、推定直径は1.10mである。